女鑑

第拾三年第卅貳號



女鑑 第拾參年 第廿二號 目次

定價

一册	金拾錢
六册三ヶ月分	前金五拾七錢
十二册半年分	前金壹圓拾錢
廿四册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
中一頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年十一月十四日印刷
明治三十六年十一月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊楽一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



デシン石鹸

定價十二錢

此デシン石鹸は其原料を臺灣總督府專賣局製劑のデシンフエクトールに採りたれば各種の皮膚病を豫防するに用ひて頗る有効なる事既に諸大醫の證明せらるる所なり

デシンフエクトールは●にきび●たむし●いんきん●水蟲●しつ●ひぜん●あせぼ●其他一切の皮膚病に效あり**消毒殺菌**の効あれば本品も亦該使用の途殊にに供する最も便利に且廉價なるゆゑ**病院薬局産婆檢疫員**の如き衛生的業務に就事するもの、必ず常用すべき也

注意（養蠶家は養蠶操作の際洗下に之を用ゆれば消毒の効あり御試用を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區若附町（東京衛生商會）

鈴木長兵衛

特電話本局一三六番

●賣捌所は各地の藥店○賣藥店に有之候

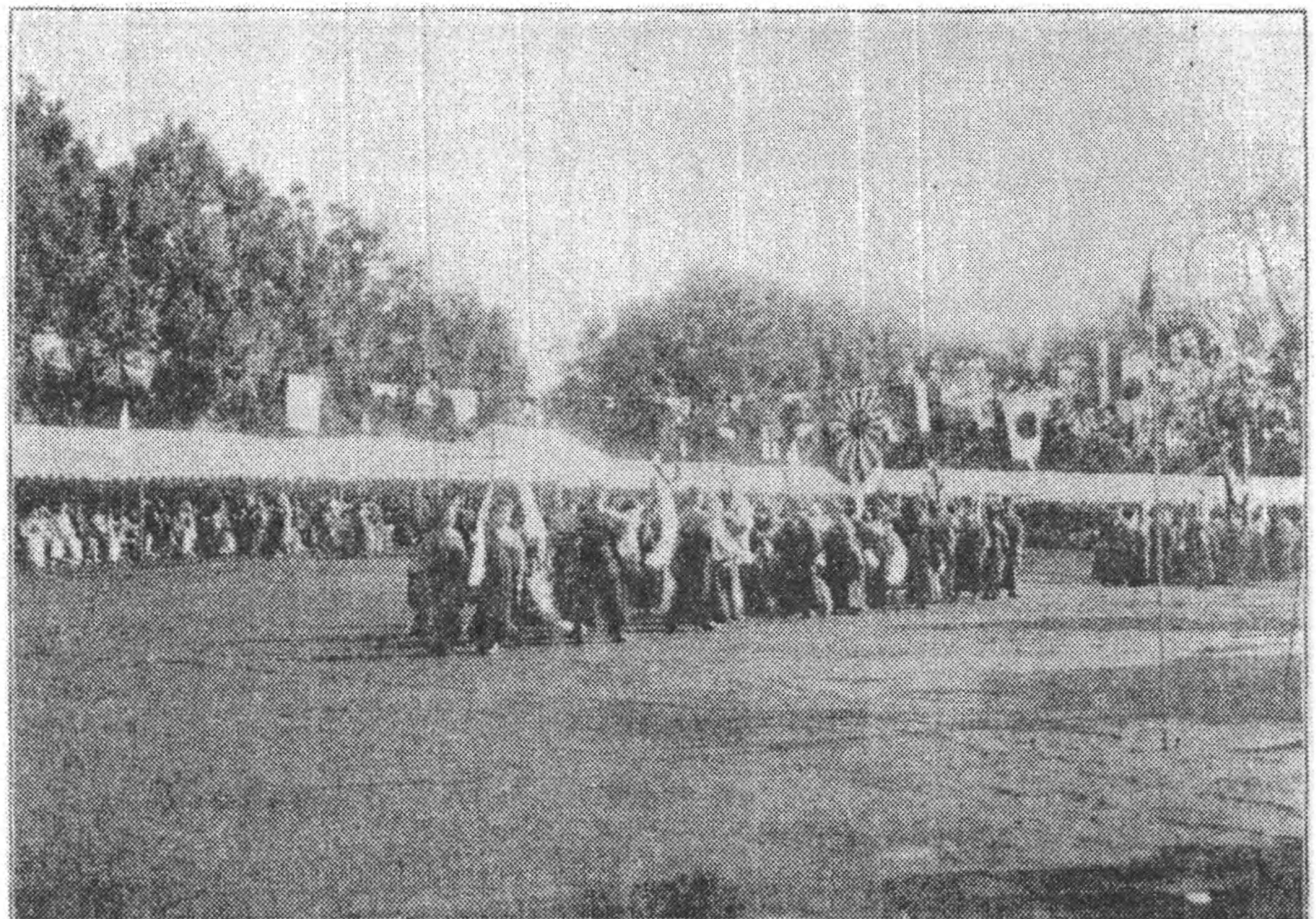
特約店

大木合名會社　山崎帝國堂

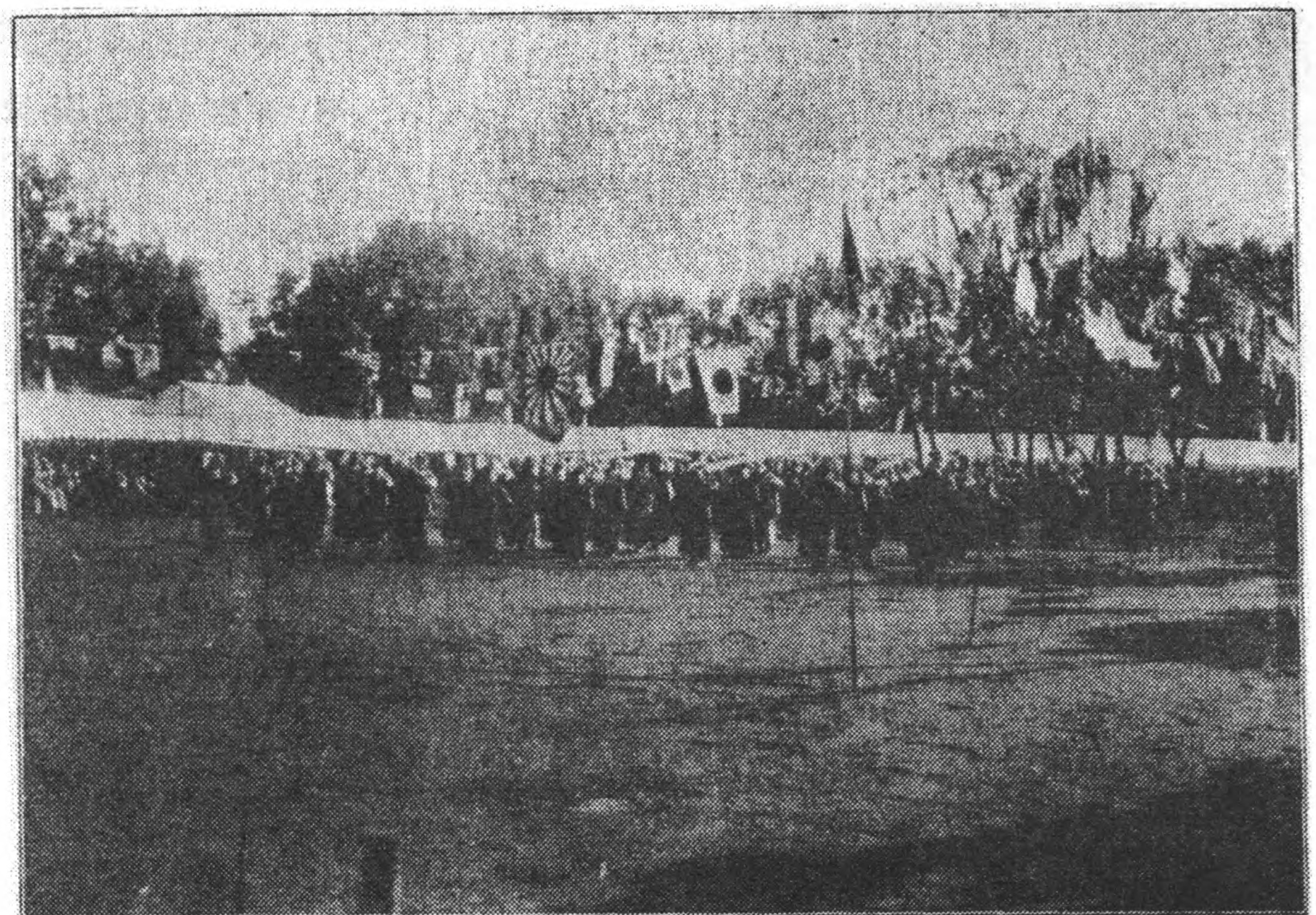
玉置藥店　森谷藥店

福井藥店　佐々木藥店





日本女子大學校大運動會（其一）



日本女子大學校大運動會（其二）

女鑑兼題投稿優等者



岩橋花子



大阪市育英高等小學校裁縫科職員並生徒

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

静岡縣掛川病院長山崎增造先生著感應療法研究所藏版

一讀速成

催眠術及感應療法

催眠術の現象を記述する書百卷を讀むも自ら其の現象を實驗し得ざれば只だ隣の寶を數ると同じく何の興味かあらん**此書は施術の實行**を獎勵し初學者をして速に斯術の眞味を知らしめんとするに在り**第三版**發行に當り先生實驗上獨得の考案を六個の圖に示し挿加解說加之全部に修正增補し愈々獨習研究に容易ならしめたり**治病**其他實地に應用せんと欲せば一讀實踐講究ゝ給へ**奇怪**なる現象は**驚嘆**神を飛し**魂**を**消**すの思ひあらん（若し出來ざれば傳授す又前版講讀者に限り圖說御希望なら郵券六錢を添へて弊堂へ直接御請求あれ特に出來送呈す）價五拾錢郵稅四錢郵券代用必ず一割增し

静岡縣掛川病院長山崎增造先生著◎價廿五錢郵稅四錢

生殖乃要

菊版半切　十餘個の
挿畫意匠　斬新なる
製本最も美麗の書也

斯書は字句極めて平易にして小冊子體也、筆を男女の生殖器解剖に起し著者が豐富なる衞生學の識見に照らし、二十五年間の實地經驗に徵して成る、下は娼妓の檢黴より藝妓の內幃車夫馬丁の內情を穿ち、上は貴婦人、令孃、學生、紳士富豪の情實に臨み、**人身改良**の根本を說かん爲め閨房、妊孕の原理を略論し、結婚の情弊及結婚年齡、撰婿方－自由結婚の用意、夫婦の交情**家庭の幸福**健强穎才の俊兒を設くる法、遺傳の原理早婚の害、房事の適度、不妊症、人爲の妊娠分娩論、……所謂方今の婦人子病とは何に由るか、**花柳病**の原因症狀、豫防法、治療方等を周到詳密に論述せり、最愛なる子女を緣附け養子を取らんとする父母及未婚者にして苟も一家の圓滿子孫の繁榮を欲する者は須く一本を購ひ閱讀あれ

發行所 東京市芝愛宕町二丁目十四番地 **尚絅堂書舖**

ふけができて困る

人は **白屑藥**

を試られよ、ふけ症は頭部かゆくて衣襟に「ふけ」を散布し脫毛甚だしく殘る毛髮は、やせて光澤を失ひ薄赤毛となる者也、本劑は其の原病たる脂漏質を根本的に治療し毛根の營養機能を旺盛ならしめ以て永久に毛髮の濃厚美麗を保つ確證藥なり、輕症は中瓶五拾錢重症は大瓶壹圓で治す特殊有効貳圓參拾錢也：世人脫毛を苦にして生毛藥を需むるも病根の治療を思はざるに依り之れ大に誤れりと云ふ可し

いぼができて困る

人は **治疣散**

を用ゐよ輕症は五拾錢重症は壹圓分服用し置かば三十日以內に無痛無痕で知らぬに脫離して治癒する受合也

月やくとまりて困る

人は月經閉止忽ち下ろ確證藥

調經丸を服用あれ：本劑は月經の閉止を開き不順を整理し婦人の苦惱する厄難を未發に豫防し病根を拂ふ通經唯一の特效藥なり、服して無效なれば詳細容體書を以て照會次第適否効能の有無を懇篤に說明して回答す、症に由りては他の適當有効藥をも紹介す、藥價は試料四日分三十錢、治療五拾錢◎壹圓◎壹圓四拾錢特殊有效三十日分入貳圓也各種注文小包郵稅拾錢郵券代用一割增し

弊堂は自家所屬の病院に於て最新良藥を撰擇調製し幾多の試驗に徵し愈々有効適確なりと認むるに至り始めて官許を請ひ世の需用者に推奬し尙ほ新に有效藥の出づるあれば躊躇なく幾回にても鋭意に改良し以て倍々信用を博し責任を明かにせんことを努むる所也、請ふ羊頭を揭げて狗肉を賣り他人の製劑を僞造して龍頭蛇尾の廣告を爲す如き欺瞞的賣藥と同一視すること勿れ

本舖 山崎薰効堂

東京芝區愛宕町二丁目十四番地 薰効堂東京支店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下被度候

新奇發明 增酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍增し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄備荷酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の醸造家及び請賣營業者の大有益案内……右今同披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ般前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やく下し

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變する憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

傳染病研究所

養生園

東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎**消毒** 傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎**防臭** 便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く惡臭を止む

◎**洗濯** 衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎**入浴** アルボース石鹼を入浴の時用ひよアセボニキビ等を治す

◎**頭髮** 禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の拔けるを防ぐ

◎**毒蟲** 蚤蚊蜂等に刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎**植物** アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

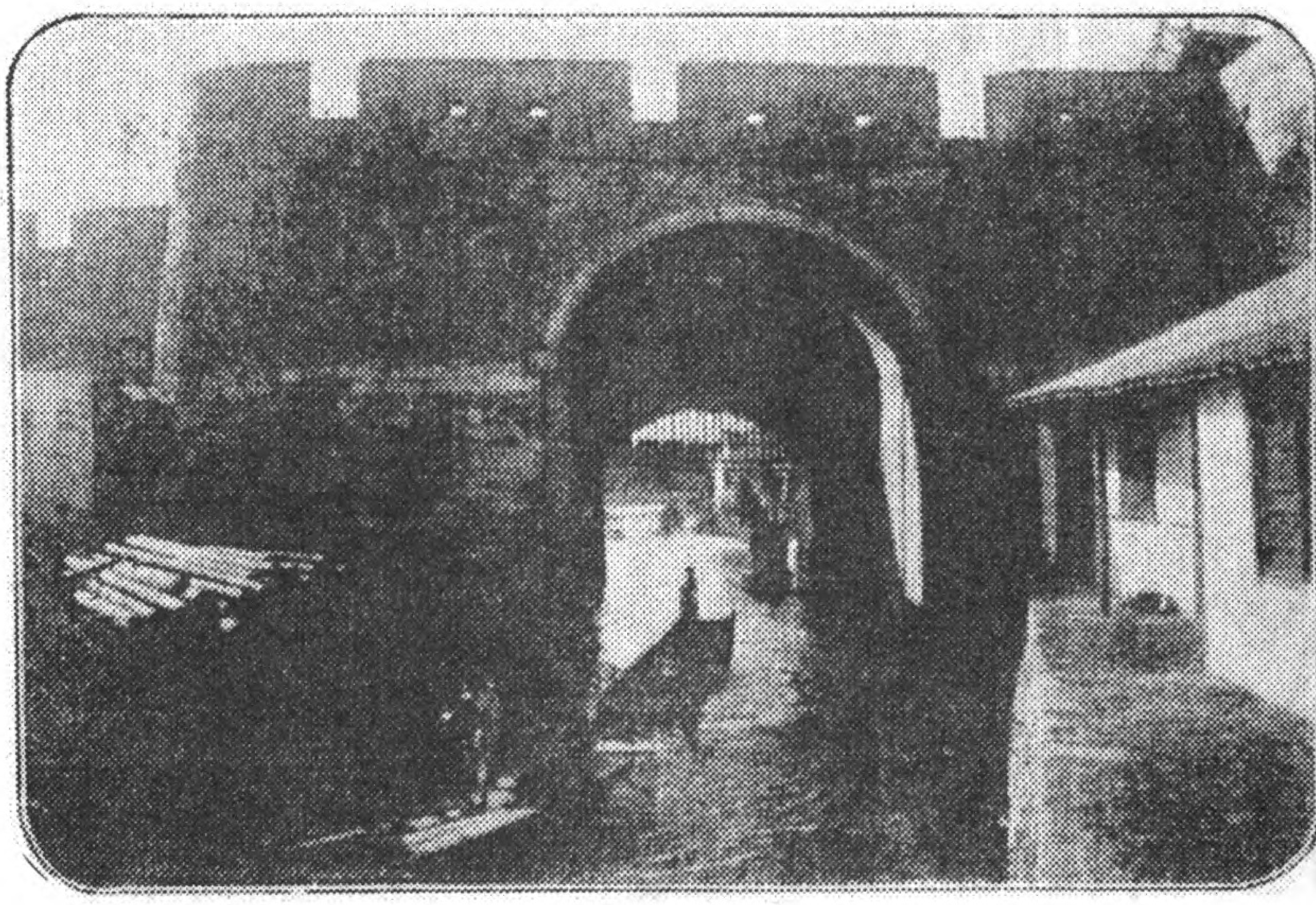
◎**疵所** 突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同廿五斤入金二圓●石鹼大形金十三錢、同小形金八錢

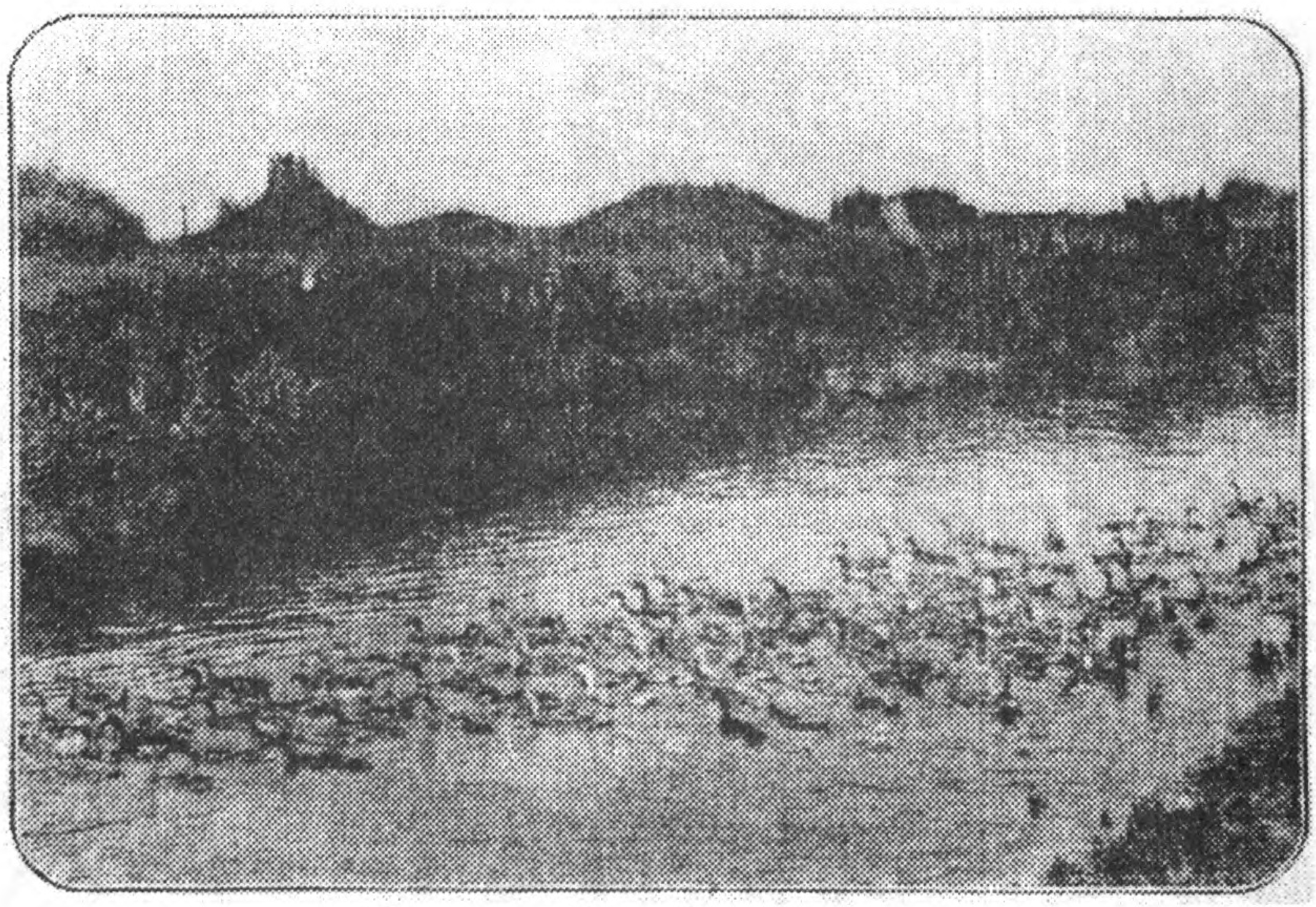
東京深川區東扇橋町五番地

扇橋製藥株式會社

清國風景



蘇州城盤門脇水門



揚子江畜鴨の圖



熊本縣八代郡立高等女學校生徒勝野多み子

山川よ風のりけしき
しかゝこゝろ
なりきらとあゐ
就業あり
かな

宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

渡邊産科婦人科醫院長　渡邊光次先生講述

衞生講話
婦人の友
一名設兒安産の秘譯

談話体裁總振假名付美本紙數二百三十頁
●正價金五十五錢郵稅六錢

●本書は嘗て普通姙娠論を著して好評嘖々たる著者が多年の實驗に基き婦人の平生姙娠時出産時産後の養生育兒法幷に出産取扱法等に就て懇切丁寧俗人に通じ易く講述せられしものにして苟も衞生を重んぜらるゝ家庭は勿論産婆看護婦諸姉は必ず一本を座右に備へ置かるゝ要あるべし希くは續々高覽の榮を賜らんことを

發行所　東京本郷區龍岡町三十四　吐鳳堂

◎東京女醫學校廣告◎

本校は明治卅三年の創立にして爾來志望者日を追ふて增加し漸次改善を加へ校務益々整頓せり此際一層擴張を計り汎く生徒を募集す志望の姉妹は至急入願書を差出さる可し

嚴重なる監督寄宿舍の設あり

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所

◉婦人科
◉小兒科
專門

女醫　鷲山彌生

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

大日本圖案協會編纂

圖案

每號　定價金廿錢　郵稅金壹錢

發行所
發賣所
東京築地二丁目　國光社

御注文の節は女鑑廣告にりたる旨御附記被下度候



一三味線幷に糸類附屬小間物　各種
一御琴幷に糸類附屬物　各種
一清樂幷に附屬品
一琴三味線あら木取品々
一唐木各種丸木幷に板子類々
一御普請木材　各種
一象牙撥琴柱其他いろ〳〵

右の外諸品御好に應じ種々調製仕候間多少に不拘御用向被仰付度偏に奉希上候

東京市日本橋區室町二丁目九番地
木屋號
岡野勘兵衛
（電話本局一四三三番）

女鑑

第十三年 第廿二號

女子運動會

封建の時代に於ては、雉刀、鏈鎌及び柔術を以て女子が武術鍛錬の方法としたる例はあれど、是れとても一般女子間に行はれたるにあらずして、武士の妻又は女なる篤志の婦人が、僅にその嗜みとなしたるに過ぎざるのみならず、こは當時男子間に行はれたる鎗、擊劍などの技藝と同じく、その目的とするところは、偏へに武術一邊にありたるものなれば、今の謂ゆる體育といふものとは、全く其科を同うせず。されば體操といひ、運動會といふものは、みな維新後學校制度一定の後に於て、始めて見たるところのものにして、其の由來や極めて近し。

男子の體操、運動會すら一時は人目に立ちしこともありしが、今は何人もめづらしと思ふ者もなきに至りしは固より當然の事なれども、女子の體操や、運動會に至つては、今尙ほ人目を牽き

て見物の群集するは、其の技術の男子に比して、花やかにして、また麗はしく、その纖弱なる手や、その柔軟なる體を以て各種の技を奏するの妙は、觀者をして一段の興味を添えしむるが爲めなるべきか。兎も角一部少數の婦人が、その稽古塲の一隅に弄びたる薙刀、鎖鎌の武藝のみを見て、大なる敬服を拂ひたる吾國一般の眼には、多數の妙齡女子が、一整に體操運動の技を行ふを見て、奇妙とも、稀らしとも思ふ影の映ずるもまた無理とのみは云ひがたし。

されど茲に心すべきは、體操といひ、運動會といひ、必ずしも人に見物せしめて、喝采を博せんが爲めにあらずして、身體發育の爲にするものなれば、踊り、輕業などの興行物とは固より同一ならざるを認知することなり。斯くいはゞ甚だ比喩を失するものなりとて、非難せん人もあるべけれど、タトヒ學校敎育に於ける重要なる學科の一なりとも、見らるゝ者、徒らに喝采を博せんことを望み、見る者又た唯其の花やかにして、麗はしからむことをのみ期するに至つては、其心何ぞ又た踊り輕業の技を演ずる者と、之を見物する者の心とに異ならむや。若し萬一にも斯の如き心を以て體操運動の會を催ふし、斯の如き心を以て體操運動の技を觀るものあらば、神聖なる敎育を侮蔑するものなりといふも、又決して過言にあらずと信ず。

運動會といへば。生徒の父兄、其の學校に關係ある者などを招待するを以て例とするが故に、多少外觀の美をも衒はざるを得ざる塲合なきにあらずと雖も、會塲諸般の修飾の外、一般生徒の衣服にまでその美を及ぼすが如きは、寧ろ其弊に堪へざるべし。衣服調度のことに懸念する

は、一般婦女子の通情なれば、さなきだに運動會など晴れの場所に臨むには、成るべく美麗に粧はんことを求むるが常なるに、若し學校當事の者また之を勸めんには、如何ぞ相競うて、華奢に流るゝの勢を呈せざらんや。乃ち貧家の子女は鮮衣を有せざるの故を以て、當日の出席を辭し、富人の子女は更に新衣を調製せんが爲め、累を父兄に及ぼさずんば已まざるべし。而して其の結果は、運動會はたゞ一の興行物と同じく見るものと、見らるゝものとの間には、喝采せらるゝと、喝采するの一事に止りて、其他には何等有益なる意味もなきに至るべし。誰れか又た體育の爲めに惜まざらむや。

近來女學校生徒運動會の有樣を觀るに、往々予輩の希望と相反し、徒らに新奇を競ふの風ありて、身體の發育を求むるよりは、寧ろ態度の輕快にして嘆賞を求むるを勉むるの傾きあるが如きは予輩の嘆息せざらんとするも得ざるところなり。而して父兄或は其の子女衣服の要求に堪へざるものあり、或は子女その同窓の學生と、衣服調度の美を同うする能はざるにより、假病して、故らに出でざるものありと聞けり。女子體育の重要なるは今更らいふまでもなきところにして、今や我國千百年來未だ曾て之れあらざりしところのものを興して、之が隆盛を圖らんとするの時なるに、早くもかゝる弊害の生ずるが如きあらば、前途眞正の發達は、豈夫れ容易に期し得べきところならむや。滔々たる社會の風潮が何事にまれ、靡然として奢侈に趨るの傾向あるは最も嘆ずべきことなり。當事の人の幸に三省せられんことを望む。



女子教育所見

女子高等師範學校敎授　安井哲子

近時我が國の女子教育を以て、實際生活に迂遠にして、社會の實用に適せずとなし、非難する者も見えまするが、此の實用的ならずとの非難は如何なる點を意味するのでありませうか、私の考ふる所に據れば、これには二種の方面があつて其處より起つて來る謬想であらうかと思はれます。即ち第一は學校の敎育は一般に注入的にして且つ生徒は常に受動的の地位に立つと云ふことヽ、第二は學校の敎科が單に常識の養成に努め社會に出で直接に役立つべき實用的の敎授に缺けてあると云ふことヽ此の二說であります。併しながら此の第二の非難は寧ろ普通敎育なるものヽ目的を誤解せしより起れる非難にて、私等の首肯すること能はざる所であります。

夫れで先づ第一の方面より論じて見れば、即ち一般女學校の敎育は敎師自身の活動は主となりて生徒は何

時も〳〵受け身の狀態に在ると云ふことは、現今女子敎育の形式的に流れて實用に適切なる人物を作り出すこと能はざる根本の理由と思はれます。尙ほ詳しく述べて見ますれば、敎師は學校に在りては自分獨り活動しまして何もかも世話を燒く、之が爲め生徒も敎室で課業を修むれば澤山である、敎授されたことを器械的に記憶すれば充分である、學校に在りて靜肅にして居れば夫れで品行の方正なものであると心得て居まするので、家庭に歸りては學校にて修めた所を實地に試むることも知らねば、又敎室の外では行儀を愼しむといふ心もなければ、寄宿舍に入りては課業の終つたのを責任を免れたやうに考へて之を應用することなども致しませぬ。これは抑々の誤りで、生徒をして如此謬想に陷らしむるのは、畢竟するに敎師が自ら生徒を敎育する主義精神を誤つて居る結果であらうかと思はれます。

然らば如何にして此通弊を矯正すべきかと云ふに、私の考では此弊害の根本たる敎師の態度を一變し生徒をして單に敎師より學修せる所を記憶するを以て能事了れりとなす根本的誤謬を打破して以て、其智識を自ら實際に活用せしむると云ふことは最も必要なことゝ思ひます。若し女子の敎育が將來とも斯かる精神に向つて進むことは出來ず、生徒の學習は何時も受け身の態度を改むることが出來ませぬならば、如何に實用的の學科を多くし、全力を之に注いだ所で、到底駄目であります。

次に女學校の學科は如何なるものを主眼として、現今の女子敎育の非實際的なる缺陷を補充すべきかと云ふことにつきて、少々說いて見ますが、之には二樣の見解があります。其一は前に申した家事、裁縫、作法等女子に取りて特別に必要なる學科を重要視し、その修めたる學科を直ちに社會生活に役立たしめんとするもので、其一は理科數學等の如き學科を主とし之を以て生徒に一定の見識を與へ、専ら實際生活に對する應用力を練らしめんとするものであります。此の二主義中何れが適當なる見解でありませうか。私

の見る所では、前にも一言せる如く、普通教育を目的とする女學校に於て技藝的のものを眼目とするなど云ふことは、頗る誤つた解釋で、賛成の出來ぬ所であります。若し世人の言ふ如く女學校（主として高等女學校を指す）の卒業生が家庭の實務に迂遠であるとすれば、現今學校にて課し居る家事科など云ふものは、實際上學校生活の間には到底充分修得せしむることの出來ぬものでありませう。果して然りとせば、多くの敎授時間を之に消費する如きは頗る不經濟なことで徒勞と言はねばなりませぬ。一體高等女學校などに於ける幼少なる女兒に向つて家事科等を課し、家政の心得だの、夫に對する心得だのを敎授した所で、到底完全なる功果を收むることの出來やう筈はありませぬ。夫れ故に私の信ずる所では、或は少しく極端なる意見かは知りませぬが、斯かる種類の學科は初年級より課することを止め、生徒の思想が充分發達し、應用力の練磨せられた後に於て、即ち五年級程に至りて既習の學科の應用と共に敎授したならば、寧ろ適當ではあるまいかと思ひます。要するに、生徒をして學校にて修得せる知識技能を獨立的に充分活用せしむるやうに敎育すると云ふことは、此問題に對する根本的解決であるのであります。西洋に於ては、高等女學校程度の學校に在りては、我國の如く家事科などを課して居りませぬ。夫れは何故かと云ふに、彼國にては一般に家庭生活の程度高く、又その家族も比較的に敎育思想に富んで居るが爲め、此等のことにつきては强ひて學校の敎育を俟つ必要は無いからでありませう。然るに日本では家庭の事狀が餘程此等と趣を異にするからして、直ちに採りて模範とすることは出來ませぬけれども、前陳べましたやうな改正を加ふることは決して誤謬で無からうかと思はれます。

最後に一言を加へて置きたいのは、女子に職業敎育を施すために、高等女學校程度、若くは其以下に於て、或る特殊の技藝學校を興すことは如何であらうかといふ問題でありますが、私は別に異存はありませぬけ

れども、之を以て女子の普通教育と同一視する如きは全然不贊成であります。夫れから在來の高等女學校を今少し實用的にするが爲め、成るべく本科三年制度を採り、二年の補習科を設置し、特殊的敎育を施すべしと云ふ議論に至りては、尙は一考を要することゝ思ひまするが、兎に角此の程度の學校に於て人格の修養てふことを顧みず、徒らに技藝敎育に重きを置く如きは、同意の出來ぬ所であります。現今の女學生は高慢である、理想に耽つて實務に通じない抔と申しますけれども、之も他の一方より云へば、我が國家庭生活の程度は低いから、斯かる非難も起るのでありませう。之が爲め技藝敎育を奬勵せよとの理由にはなりませぬ。勿論女子をして萬一の時の爲め若くは夫婦共働の意味に於て、即ち將來獨立生活を營むに不便なからしむる爲め、一定の職業敎育を施すことは差支ないが、之を以て彼に換へんとするは決して當を得たるものでありませぬ。高等女學校は女子に高等普通の敎育を施す所でありますから、現在の學科程度は必ずしも不適當であるとは申されませぬ。寧ろ之を實地應用の出來るやうに、生徒を敎育して往くことは肝要であります。

（完）

過度時代の女學生

呦鹿庵主人

一

過度時代に於ける總ての事物總ての人心が、活動の中心點を失ひ、若くば是非の標準點を失ひ、從つて、個々別々、己れが私意私情の動くが儘に翔けらむことを欲するの狀は、吾人が、既往の歷史に於て屢々散見する所也。既に過度時代と云ふ、新たなる慰安と信仰と善惡の標準とは未だ興らずして、舊き宗敎と舊き制裁とは夙に其の能力を失し居るの時代なるや勿論也。此かる時代に在ては、人々の道德上に於ける觀念到つて薄微に、社會の制裁また殆むど皆無なるものあり。故に吾人は或はこれを良心の麻痺期とも稱することを得る也。

ゴルキーの浮浪文學やニイチエの本能主義や、これ近き文界に在て天才論なる美名の下に、一部の文學者に由りて謳はれし所のもの也。天才乃至英雄偉人を崇拜し謳歌することの美德は、カーラエルに由りて敎示されし以來、吾人の恒に首肯せるところ、特に今の時代に於て吾人は天才謳歌の痛切なる必要を思ふものなりと云へども、然れども、放縱散漫宗の皷吹や、淫猥多情敎の布說や、夫等に到つては甚だ苦々しき事と爲さゝる可からず、殊に夫等偏狹の論義を提げて一代の人心を攪亂せむとするに於ては、吾人尠からず之れを厭はずむば非らず。

一面よりして此かる現象を究むれば、これ取りも直さず、社會が漸く良心の麻痺期に入れるを證據立つるもの也。放縱散漫の浮浪主義を鼓吹し、淫猥多情の本能主義を謳歌す、只だ夫れ私情私意に驅られざらむと欲するも得可からざる可し。嗟吁これ此の過度時代や、善惡の準據は全く影を沒し、社會の制裁は著しく弛む。此の間に呼吸せる女學生が、意志甚だ薄うして素行尠からず亂れ、品位毫も保たれずして情徒らに充ち、恰かも絹を以て醜物を包めるの現境に在るもの、吾人敢て異端とは爲さじ。

二

夫れ異端とは爲さずと云へども、吾人は、女性の美を以て美中の最高美となし、女性が有する美徳を以て美德中の美德の一に數ふるものなれば、此等の總てに違反せる點に逢遇する毎に、吾人は一層の醜感を催ふすを禁じ得ざる也。

女性の美は、泰西幾多の詩人が筆に由りて、適切に發揚されたれば、敢て此に繰り返さず。吾人を以て視るに、世の所謂女學生なる一階級は、其の年齢に於て、其の情意の發動に於て、其の操行に於て、女性中の花ならざる莫からむや。そは例へば、青年氣鋭の時代を以て男子一生の春風期と爲すがごとし。あたゝかき血は汚がれざる體にめぐり、白き顔黑き髮、美々しき思のみ微見ゆるぞかし。更らにこれを飾るに海老茶袴の美を以てす、今の女學生は、外觀の美に於て、殆むど詩化されたるが如きものあり。誠に女性一代の譽なりと謂ふ可し。

抑も海老茶袴と云ふもの、誰人が創見になりけむ、誠に能き思ひ付き也、更らに、若き女性をして品位あらしめ優美ならしめ貴からしむるに於て、海老茶袴は殆むど遺憾なきまでの成功を奏せるが如し。兩者調和の美も、これ位に能く發揚されなば、萬事議論はなかる可し。此の點に於て、吾人は、尠からず其の創見者に謝するを躊躇せざる也。然れども、そが竟に醜物を包むの絹と化し、狗肉を賣るの金看板と變ずるに到ては、吾人、頗る多くの恨みを其の創見者に寄せざる能はず。今や過度時代の根據なき思潮は普く事物を濕はし、左なきだに意志微弱なる若き女性は俄に道德の規範を擺脫し社會の窘束を超へ制裁の中樞點を失つて、己が儘に浮泳しつゝ、汚れに向て進み行きぬ。調和の美の極致と稱されし海老茶袴も、此に到つては、其の汚醜の一染を被むらざらむとするも得ざる也。從つて吾人が、海老茶袴に對する感は、急激なる變調を表はし來れり。曾ては若き女性をして詩化せしめし唯一の材として、多くの尊敬を拂ひし吾人は、今、醜物を包むの絹として

彼を視るの外毫も他なきに到れり。吾人は動もすれば、海老茶袴廢止論をさへ唱へ度く思はむとす也。嗚呼これ、餘激なる變調に非らずや。

三

東京に遊ぶ女學生約一萬五千、校舍幾十百、高等なるものに到つては女子大學あり、女子高等師範學校あり、其の他美術工藝職業の各專門學校あり、若し夫れ小學校に到つては百を以て數ふ可し。定刻を俟つて、神田本鄕芝虎の門邊を徘徊せば、先づ其の海老茶袴の多きに過ぐるに驚異せむ。傳へて云ふ、此等の女性中、品行正しく身持ちの直なるものは、僅かに三分一に過ぎずと。女學生の腐敗も亦た極まれる哉、新聞『二六』が曾て之を摘發するや、其の記事は直に女學生間の愛讀する所となり、既に汚れたるものは得々として記事の適切なるを誇稱し、未だ汚れざるものも亦た之れに誘惑されたる多しと聞く。『二六』が其の記事の目的を徒勞にしたるは暫く云はず、此かる反對の傾向を見るに及びし女性の現境を推想せば、言語に絶することの餘りに多きに苦しむ可し。

何が故に此くは腐敗する。これ吾人が聊か此に研究の要を思ふ所也。吾人をして其が主因を數へしめば、先づ左の如く云はむ。

（一）樂天的教育の弊
（二）智育と德育の不平均
（三）下宿屋生活の弊
（四）海老茶袴の濫用

大體は此の四個に包合さる可し、多くの細目は何れも此の四個の範圍內に在り。

四

樂天的教育の弊に就て云はむ。

我國の女性教育が、幾千年の久しきに亘り隱遁主義深窓主義の下に馴れたりし其の反動として、明治に到り、俄かに反對の樂天主義を悅ぶの現象を示すもの、無理はあらず。或は女權擴張と云ひ、男女同權と云ひ、此等の議論が如何ばかり、性微弱にして

根底なき我女性の意を動かしたるやは、想像に餘りある所也。意志の甚だ强硬ならずして他の煽動に乘り易きは、女性の特質也、此の時に常り、女權論を聞き、同權論を聞き、敎育のことを聞き、理窟を聞き、體操を聞き、樂器を聞き、舞踏を聞く、意奢り、心揚り、彼等御轉婆たらざらむとするも得ざる也。僅々の年月を以て、彼等が、其の會て彼等を窒息せしめたる社會に反抗す可く、深窓主義を放擲し來りし勢ひは、非常なる力と云はざる可からず。彼等は男女の交際を以て相當の事態と唱へたりき、七歳にして席を同ふせざる孔子の敎訓は、彼等の罵詈して止まざる所のものなりき、彼等は白晝男學生と手を携えて帝都の中央を濶步するに何等の憚かる心を有せずなりぬ。此くて戀愛神聖を說き、文學を談し、理窟を捏ぬ。今の女學生、滔々として比々皆な然らざるは莫し。

今の樂器、今の舞踏の夫れには、著しく樂天的趣味の橫溢せるものあり。我國に於ける從來の樂器乃至舞踏また然りと云へども、和樂和舞の主義する所は、優美なる女流をして之れに由りて以て益す優美ならしむるに在りたりき、女性の美をして愈よ發揚せしむるに在りたりき、故に其の樂や其の舞や優也、柔也、謙也、德也、一言にして盡せば、何處迄も女流的なるを免れず。之れに反して洋樂洋舞は、全然反對の結果を我國の女性に敎えつゝあり。

悲哀の情は、女性が有する特美の一也。久しき間、我國の女子敎育は、之れを女性に敎えたりき。今は即ち然らず。謙讓の德、優柔の美、今は女學生の間に痕跡を殘さゞらむとせり。而して一世相率ゐて、樂器的舞踏的に彼等を育成す可く勉む。樂天主義の弊生ずるに何の不可思議かこれあらむや。

若し夫れ猿をして人間の眞似を爲さしめむとするに似たるものあらば、一派の人々の所謂生理的美人育成歟。生理的美人の貴稱既に奇也、彼等は今の女流に向つて男性的體育を施さむを欲するもの。體育のこと素と不問にす可きには非らずと云へども、其

の弊の甚太しきに於ては、餘りに生理的美人育成のことを皷吹せざるに勝る。女性は、男子よりも長命也、古に於て然りし如く今も尚然り。此の點より云はゞ、改めて生理的美人育成のこと及び其の方法を案定するの要なきが如くにもあり。若し夫れ、健全なる子孫を設くるにあらしめば、見よ、支那は世界唯一の女性深窓主義の國也、而かも尚ほ優に健強なる(體育に於て)子孫を有するに非らずや。今の人々が無闇に樂天的御轉婆的女性を造らむとすること、吾人の最も與みせざる所、女性は到底女性らしからざる可からず。之を要するに、女性は女性相當の體育を勉むるに在り。何ぞ必らずしも沐猴にして冠するの狂を學ぶ可けむや。

樂天的教育の弊は、悲哀にあらず、談笑にあり、優美にあらず、御轉婆にあり、謙讓にあらず、亂雑にあり、情に脆きは女流が通有性、樂天教育に由りて、彼等が其の素行を誤り行くもの、甚だ多からずや。

(未完)



マダム、ド、セヴィギエ

菊池雪子

賤の女山がつのきは〳〵に至るまで、今なほ夫人の名を知らざる者なく、智情餘りて水ぐきよりしたたる露の惠に轉だ潤ふ少女等は、いまさぬ世までも夫人をいやほめたゝふるも理なり、まことやセヴィギエ夫人は歷史の上に事蹟殘したる女傑にあらず、また大なる著述をものしたる學者にあらざるに、まばゆき名を佛蘭西の文壇に留めたるは其の消息文の他に類なきに因す、愛情濃かにしてしかも熱きこと慈み深き母の稚兒を懷に抱ける樣はいつもながら夫人の手紙に於て現はれたり、母としての恩愛深く、友としての友誼厚き夫人の手紙の優にすぐれてものせられたる心のほど、ゆかしくもなつかしくも、情至りて切なると共に、文の詞簡にして艶麗なる古今に得がたき文例どもあまたあり、月桂の冠はそれ夫人のみつむりにか。

夫人はふくらかなる頰にさと紅さしたる、美しと云ふにはあらねど、目元やさしく口つき愛嬌ありて、しかもきつと結びたるは、なか〳〵に意志堅固の人と知らる。

夫人は初めマリーと呼びて、男爵ド、ジヤンタール家の愛娘なりしが、父君母君は神かけての獨子なれば、手中の珠よ花よとかしづかれたり、一年を經て佛英の間に戰爭起りければ、父君も出陣し給ひて、腥き戰場の風に露の玉とぞ散り果てぬ。

母君泣く〳〵子ひとりを育て上んと、それをしも今より後の樂にわがせの君を忍ぶ折々は愛子がさゝや

かなる腕を肩のわたりにまつばせ、何げなき戯れでとに憂きもつらきもみな忘れぬ、慰の天の使やこのいとし子、さるに六ッに成る頃母君失せ給ひき。

其れよりは叔父君にわたるクランズの高僧を父とも母とも頼て、朝な夕なに、そが教に導かれしが、此人元より寛仁におはせし人なれば、マリーは叔父君の跡追ひ慕ふこと度々あり、さすがは徳高き僧の君にこそおはすれ、智識のほども比なく優おはしませば散文詩歌にも妙を得て、ラテン、イタリー、エスパギウの語にも通じて悉く自ら師となり、姪に教へ給ふ、かゝる教育をうけつゝ、いかで智識才能の諸人に優れざらめやは、マリーは日に日に歩一歩秀才の婦人と成りぬ。

美服はこれを着る價値なき人の肩に泣き、精神の麗はしきは自然貌に顯はるゝとかや、むべも姫はこれぞといふ美貌家にはあらねど、心の美さひときは外貌の美を装へり、皇后マンヌドオトリシユの宮に仕へ、さやけくも貴夫人の擧動になぞらひて、まことに交際場裡の菫の花とばかり鮮芳愛すべかりし。

十八の花の盛りを誰が掌中にや歸すらん、あゝ姫はセヴィギエ侯爵の許へと嫁ぎぬ、花散る里に行きて見れば嵐を恨む心の習ひ、殿は驕泰奢侈にして素行修まらざれば、操高き夫人をいつしかつれなくふり棄てたりき。

むべなるかな、妻は夫を信用せずして愛し、夫は妻を信用すれども愛せざれば、閨中の風冷かなるよ、かゝりし程に殿は輕卒にも人と決鬪して横死を遂げしは夫人廿五才の年なりき、亡き夫の忘れ形身なる男子一人女一人を撫育せんと夫人は黑き衣に晩くもなき花の姿を未亡人の装に代へ、いよゝ操を表はしぬ。

嗣子ミャドールは母君が前途を計畫し給ふにも係らず陸軍學校に通學せしが、半途にしてパリーに行き文學社會に交際を廣うして、深く謠曲に心をそゝぎ、演劇に舞蹈に一身を委ねたりき。

又た長女フラソアズ、マルグリット孃は絶世の美人

にして鈴をはりたる如き目に、柳の眉濃く、淡紅の唇を開けば、歯は水晶を列ねたるが如く、清き肌は雪をもあざむき、黒髪のふさ〲長きをば、よき程に巻き上げ、薔薇、小菊、四季折々の花にリボンなどをかみ挿して、容色艶麗皎として玉人のそれかと、たれも〲見ほれたり、公達、殿上人等襟つくろひて、我れこそは姫を得て世に生れたる男子の甲斐ありとしも、人にはこらばやと、心の駒にかられては云ひ倚るもあり、姫の美さを詩に詠じ、歌にうたひて媚を呈するもあれど、姫は丰姿美なるのみならず、智慧すぐれ、婦徳も缺けねば、麗しき花の芳香ある如く進退また潤雅なりき。

姫のグリギヤン伯爵と婚を結びて、プロヴァンスに赴きしは、母君にとりて最も悲しかりき、これより夜の鶴の子を思ふにも勝りて、いつも情こめたる消息を送りつゝも、筆に託せて娘君の美をたゝへたり、愛情熱きこの母君の詞に返すに、クリギヤン夫人は「母君は我が健康なり、幸福の幸福なり」と云ひし、グリギヤン夫人はさまで感情の人ならずば、げに完全の人と云ふべしなど、時の人言ひ合へり。

セヴィギエ夫人は、その教育の上に、學問の上に、自然賢豪名儒と交はらざるを得ざりしかば、ルイ十四世の御代に於ける學者社會に、親友益多く、情交彌敦かりしは、性質信實の人におはせし故なるべし。

三十年の長きに渉る消息文は一として名文ならざるなく、夫人は實に佛文消息の曉星なり、哲學を始め、宗教學、純文學につき、其れ〲難問をも容易明白に書きたる樣は夫人一家の風を成して、凡人のまねぶべくもあらずかし、其の消息の中に記事、叙事、隨筆、評論等の種類ありて、中等教育教科の數に編入せられたるもの數多あり。

セヴィギエ夫人の文は艶麗緻密、しかも流暢にして氣力あり、類まれなる筆鋒なれば、讀む人をして無限の趣味を覺えしめぬはなし。

夫人は文章に妙を得たるのみならず。聲音さはやか

に應對流るゝが如きも、巧言を以て人を欺くが如きとは假初にもしたまはざりき。
寡居していよ〳〵貞操堅く、四十五年の長き年月をロシエの城中に經たまふ、慈愛深き母君として名高く、グリギヤン夫人疱瘡を患ひたるに、朝夕其の側を離るゝことなく、ひたすら看護せらるゝ間、病に感染して、一千六百九十六年四月廿日を一期とし、グリギヤンの城の露と消えぬ。

（をはり）

石野衞守の妻

西村梅軒

享保の頃筑後久留米の城主有馬玄蕃頭則維の家來に石野衞守といふものあり。元より勇氣武功のものにて、久しく江戶に居り忠勤を勵げみけるが、其の女房は仙石越前守政朝の家來三宅勘助といふものゝ娘なりけり。然るに衞守いさゝかの事により玄蕃頭內室の意にそむき、歸國仰せつけられ、久留米へ引越しけるが、折りふし女房は越前守政朝の內室懷胎にて臨月なるゆゑ見放しがたく、夫婦一緒に國元へ降だること成らず、獨り江戶に殘りて、翌年の春歸國する事とはなりぬ。この時仙石殿より諸事取計らひ吳れられ、若黨一人、中間四人附添ひ、女房は乘物にて長刀を持ち、具足櫃を先へ立て『久留米家中石野衞守內具足』といふ札を附け、遙々二百九十里の道中女一人にて勇ましく旅立ちける。かくて函根の關所にかゝりけるが、先達て通り手形を若黨に差出し置かせければ、女房は乘物より降り暫し番所の傍に待たせ、その身は地黑模樣の小袖に萠黃柄の大小を提さげ、かひとりして番所の椽に登り休息しぬ。役人手形切手に引合せ、さぐり姥を呼寄せ、姥來りて髮をほどき檢ため、腹を探り吟味して仔細なしと申しけれども、役人は更に暫らくお控へといひて、女房を待たせ置くこと半時許りになりぬ。此の時女房申しけるは、お吟味相濟み候はゞ早くお通し下され間敷や。役人申しけるは、手形の面見申す所ある間

留め申し候。女房如何致し候やと問ひければ、役人更に、手形の面有馬玄蕃頭家來石野衞守女房上下五人と有之候、然るに具足櫃等相見え候へば、衞守らしき人も御出もやと存じ、又その元許りならば女供も之れあるべき筈なるに、さる樣子もなければ、旁た不審に存じ差控へ留置き申すなりと云ふ。その時女房重ねて申しけるは、开は御尤もなるお咎、併しながら私は手形面の通り石野衞守の女房にて少しも相違これなく候、具足櫃の事は、私 親仙石越前守家來三宅勘助と申す者、私石野家に嫁ぎ候 折から、武士の妻はいか樣なる事にて忠死致すまじきものにもあらず、其の時に至りなば男同然に忠死を勵げめよとて其節戴きたる具足に相違これなく候、猶はいぶかしく思召し候はゞ、只今改めてお眼に掛くべし。又女の供連れ來らざる御不審、是れまた御尤もに存じ候、夫衞守國元へ引越し申 候節、私事 據ん處なきさわり事これあり候ゆゑ、只今跡より國元へ罷越す處に有之候、江戸にて召使ひ候 女ども、海陸三百里隔てゝ他國し、親兄弟を見放して下らんといふ者一人も無之ゆゑ、私一人家來四人を引連れて旅立つ所にて候、されば女の具足を持たせ、大小を帶し候事も、さして御不審に及ぶ間敷、他藩は存じ申さず、玄蕃頭國元にては、國のかためと相成り候ゆゑ、女にても武具を嗜なみ居り申候、町方の女は不調法なれば大小を帶し申さず候へ共、武家の心ある女は皆平生取扱ひ居り候、具足櫃を持たせ、大小を帶したる咎にて、半時餘りも當所に留め置き、さては大久保加賀守樣へ御注進なされ候や、又は江府玄蕃頭方へ御引渡に相成 候やと膝立直して物云ふ氣配、艶にして且つ勇あり。ふりかゝる髮を插櫛にて撫上げつゝ理非を聞糺し些も臆せざる處、實にも仙石越前守政朝の內室の姉石野衞守の女房とぞ知られけり。番所の役人一言の返答にも及ばず、いや是れは永く留置き申すの、又は引渡申すのとの儀にては無之候へ共、一と通り不相應なる姿をお尋ね申したるまでの事なり、さ候はゞ早やお通りあるべしと

いふにぞ、女房はにつこと打笑ひ、然らば早速罷通り候と、夫れ〴〵へ目禮し、靜かに乘物に打乘りける。此の樣子を見るもの、天晴れなる武士の女房かなと譽めぬものはなかりし。誠に三百里の道中、心の底も知れぬ男を四人召連れ、女の身にて只一人萬事に心を配ばり、江戶より筑後までの長旅を無事に終りしこと、勇膽武藝人に勝れたる女ならでは出來べくもあらじ。

抑も封建時代の女性の中には、往々意氣の男子をも凌ぐもの丶多かりしは、當時武人の妻又は女が、常に氣節を養ひ、武藝を鍛錬するを以て、能事となせしが故なるべく、さればこの石野衞守の妻の如きも當時にありては敢て珍らしといふにあらざれど、その凛として犯すべからざる勇氣に至つては、中々に感じても尙餘りといふべし、予は明治の婦人が學問執業に身を委ぬる間にも、一片の氣節を養ひて、他日妻となり、母とならむ時は、世路の險艱に逢ふも、毫も沮喪するなからむを望むなり。

學藝

『乳母のふみ』を讀む

天籟生

鎌倉時代の文學宗教其他一般の社會狀態が、著しき特兆を有して、人文史上に一異彩を放てるは人の能く言ふ所、顧れば文明が一度異邦外境より輸入せらるゝや、社界は凡べて漢臭韓味を帶び、國民獨特の國尙は漸次銷磨せられんとして、國民の文學や日本の社界的特質や、趣味や、未だ起るに及ばずして早く外邦の薫化する所となり了んぬ。日本書紀の中漢史の文を其まゝに襲用せる所などあるを知らば、如何に國民が異邦の文化に心醉せしか蓋し思半ばに過ぎん也、菅公の英才を以てして猶倭魂漢才を叫びて後世其卓見を稱せしむ、吾を以てすれば倭魂倭才ならんのみ、しかもこれ人文史上避くべからざる現象ならんかし。

遮莫國民同化の力は能く其難關を排し、其勃々たる發展的勢力は決して挫折了せるものにあらず有史時代に於ける物語艸紙の類に至ては其思想に外邦の臭味を脫せざるも早く其文體に於て換骨脫體の趣あり、下て鎌倉時代に至ては、上は一國の政治より文學宗教に至るまで純然たる日本氣質を表示し來り文學は徒に上流紳縉嬉戯の具たるに止らずして、國民實際の用に供せられぬ。文學者の範圍も大に擴張せらるゝ處となり宗教に於ても遂に國民的宗教の發現を見るに至りぬ、親鸞が唱導せる眞宗や日蓮が喝破せる日蓮宗や之を獨逸が國民的運動の曙光とも云ふべきルーテルの宗教改革に比して孰れぞや。

其他戰記の流行、隨筆の盛なることや、日記紀行の前代に比して著しき事等、更に遊戲笑玩の末に至

るまで國民的精神の渾熟せんとするを見るは、史を讀むもの丶快哉を禁ずる能ざる所とす。唯一概に此時代を稱して暗黑時代の先驅と爲し、破倫滅道の濁惡世界となすは深く究めざる者の言のみ。

如是の社會に在て女子教育が如何なりしかは蓋し又一覽の價無しとせず、今其序論として阿佛尼がものせる『乳母のふみ』を剖して以て當時精神の那邊に存するかを見ん。

今此書の説く所を見るに女子として具ふべき才幹學問、女子としてあるべき作法、女子として持すべき貞操宗教に説及し小は下婢侍女に對する心得より大は國母として保つべき品藻に至るまでいと懇切丁寧を極めたり、以下取次に其内容を見んと欲す

先づ當時女子が修むべき學科としては何々なりしか

第一　和歌。。　は漢文の衰頽と共に復興して苟くも目に字を解するもの歌よまぬは恥とせりき、「衣のたてのほころび」は稗史の構作とするも「道もせに散る山櫻」に春の名殘を惜むはむくつけき武士さへも優しき理想とせる所なりき、况んや纎麗優美の女流に於てをや、其和歌の精神を論じては

歌の姿ありさまは、皆ふるきに見えて、くでんにしるして候へばよく御覽じ候へ、たゞ女の歌にはこと〴〵しき姿候はで、詞たがはず、いとをしきさま、うら〳〵とありたく候、さればとてえんある姿にのみひきとられて、魂の候はぬもわろく候

と阿佛は爲家に嫁す、歌家の統流なり、以て當代詠歌の精神を覗ふに足らん。

第二　習字。。　歌かくにつけ、消息を通ずるにつけ先づ文字を清かに書くべきは又當代の欲せし所なるべし、されば「御手などかまへて〳〵うつくしくか丶せ給ひ候へ」と勸め「女の本たいに、手はとをかたちにて、はかなき事のすさみも人のほどをしはかられ、心のきはも見ゆることにて候」と箴めたり。之を今日に移すも決して易ゆべきにあらざるなり。

第三　繪畫。。　書は文字に比して更に專門的に美術

的なれども、畫家と唱えられぬ内、時に名手無きに非らず、且や筆のすさびとして當時に珍とせられたるや疑無し、花山院がうす墨に香ばしたる走り車の話は大鏡に載せたり、嚴島に奉せる平家一族の法華經卷の畫は平家の姫たちの筆と想像せらる、源氏物語にも源氏の君が肖がほをよくし玉へるとを記しぬ。されば にや『乳母のふみ』の草者も

ゑはわざとたてたる御のうまでこそ候はずとも、人のかたちなど、美しくかきならひて、物語ゑなど詞めづらしくつくり出て、もたせおはしまし候へ。

其他屏風の墨がき、色紙などを書かんことは艶にして望ましけれども其までは及ばずともと言ふ。今も然るべき人々の筆跡見事に展覽會や雜誌などに見侍るはいと優なる事ならんかし。

第四　音樂　音樂及舞の當時に盛なりしは增鏡などに詳かに記しあり、燕宴嬉戯の夕、詠歌祝賀の晨、鳴物の合奏は當時の縉紳に缺くべからざる技なりしなり、阿佛は和琴、箏、など習ふべきもの丶由を書き且内侍の幼少にして此天才あるを賛嘆せり。

第五　讀書　として阿佛の最尤推奬せしは源氏物語にして「源氏おぼえさせ給はざらんはむげなることにて候」といひ「人丸赤人があとをも尋ね紫式部が石山の浪に浮べる影を見て、うき舟の君の法師にあふまでこそかたくとも」云々といふに至る。其他上下の歌書は常に座右におきて吟詠すべき者とせしなり。

更に將來國母ともなりなんにはの準備として歴史の繙讀をも勸めたり「御心もちひ世のをきて、古きを改め、村上の御代より此かた御らんじおぼえて、しよくしや守地、ひゞしきたぐひにはあらぬものから、ふしごとに故をそへ、おもふ所あるがよきことにて候」といふもの是なり。

此當時漢學の衰頽は又史記の素讀を傍らに打聽きて之を諳誦し父をして男子ならぬを嘆せしめし才媛の流を汲むが如きあらざりき、從て此書一も漢學に及

ぶこと無し「まなは女の好むまじ事」となせるは時勢の推移を知るに足りなん。

學問として阿佛が說ける所大畧上の如し、次に所謂躾けとして、女子のあるべき行儀作法に關しては、通篇頗る悃切を極むるもの丶如し、一言にして蔽へば、さし出がましからずして中庸なる婦德を持せよといふに在り、彼が枕草紙を擧げずして源氏を推奬せる理由の一は此點に在らんか、此を今日より見れば甚だ矯飾に過ぎ退嬰に傾きたらんが如し、さあれ、又時代精神の發現として觀るべけんなり、今其一例を擧ぐれば

たとへ、人のいみじうつらき御事候とも、色に出で人に見えんは、耻づかしかりぬべきことおぼしめして、さらぬ顏にてはありながら、さすがにうやとは覺えて、ことずくなゝるやうに御もてなし候へ、また嬉しう御心にあふ事候とも、こと葉にうれしや、有がたやなど、おほせごとあるまじく候、うきもつらきも嬉しきも、御心に能おぼしめしわきて見え候はんぞ……御心のうちばかりにて、よくおぼしとゞめて、我心、身のうへをもおほろげの人にうちかたらひ、色見ゆる御事など候はで、大かたに何事をも御心のうちばかりにおぼしめしわき候へ。あさはかに物など仰せ候はんはあしき事にて候ぞ。

といふが如きこれなり。放縱を戒めては「心のまゝなるが返〳〵惡しき事にて候」といひ。女子として容貌の作り樣、餘りけば〳〵しからず優にやさしからんを主とすべきを敎へ。思想の優美にして、なさけ仁義を旨として人を憐み。他に對しては謙讓尊敬すべき事を述べぬ。是等の思想は想ふに源平時代頃より兆して、德川氏に至りて極りぬ、今日東洋の婦德を云々する者、能く其源に溯り由來する所を察し、其美を存し其醜を拔かざるべからず。遽に變じ急促に改めんとするは蓋し歷史を無視せる考にして決して改良の好方便と云ふべからず。女子敎育に志あるもの深く想はざるべからずとなす。

次に說くべきは男女間の關係なり。當時風儀頽れ道德廢れることは史の明に示す處、阿佛は之を箴めて假令問法求道の師となすも、また高僧明智識なりとても、男にはつくべきにあらず、然るべき尼法師に從學すべきを說く、用意の有る所察すべからずや。如今の女學生希くは這箇瓜田不容足李下不正冠底の戒心あらんこそ望ましけれ。

女子は嫁すべき身、されば此間の消息も亦語るべきもの曰く、

うきは身にそふならひの候へば、こゝを去りかしこへ行きても、人こそかはり所こそあらたまりぬるとも、さるべきと定めおきなん身のすぐせ、一たんの事によるべしとは覺え候はねば、たゞ御身をもてわづらはで、あるに任せて御らん候へ、

其夫に對しては「あらけうざめなど思はるゝていのふるまひ」無からん樣に又假令秋風扇の嘆はあるも所天を憶ひて忘るべからず「只おいらかに心靜なる振舞」有らんことを望めり。頃者國民新聞所載の「濱千島」一篇や、此邊の消息を語るもの耶。

宗敎　三從の身と云はれ、五濁の身とさいなまれ、よるべ渚の捨小舟。たよるべくすがるべきは只み佛の慈悲なる哉。阿佛は出家の身、法の道を說く事從て丁寧なり。

たれはぐくみ、あはれをかはす人候はずとも。佛の御をしへのまゝにて、あきらかなる道の光をも見。親のありどころをも知らはやとおぼしめし候へ

といひ、人生さち無き最後は唯發心入道あるのみ「申しても申しても夢の世にて候　あぢき無き妄念無くて佛の御をきて御ようい候べく候」

しかも宗門偏僻の弊無からん樣、我宗ばかり法ありて他の經文の徒らなることなど論はぬ樣敎訓を垂れたる處用心深き處見るべしとなす。如今婦人の宗敎にたづさわる多し試に問ふ這般の用意あるや否や。

云はんと欲する所の大體は上の如し、更に彼が母たる感情として記せる文章の如何に熱情あり如何に心事の衷々たるを示すかよ。更に彼が理想として記

せる處の光彩あり韻致あるかを見んが爲次の二章を抜かしめよ。

はぐゝみまゐらせし心ぐるしさはおほふばかりの袖もひきたらず、それにつけてもかたくなしきかしづきは、更にいたはしく、あらき風をも、よるのふすまを重ねて衣のうすきをふせぎ、いずみの水をすましても、扇の風のぬるきを心苦しく、朝におきては花の開きたる心地して、木たかき影を心もと無く待ち、夕にふしては、露の塵をもすへじと、床夏の花のにほひゐすぎて、らうたくまほり、むば玉の髪のすぢことに千いろをゆはひてもわかぬ心地して、春の錦も秋のたつた姫も、わが子の爲にたち重ねんことを思ひ、まだひとへなる袖のうたゝね、心ぐるしくて、寒き夜にゆかたあたゝめて、傍にふせまゐらせ、雪の光をかべにそむける光とたのみて、あかず夜な〳〵おぼえ候しにも日にみえぬ神佛をかこち、いにしへのむくひをうらみてふたとせ斗りをすぐして候し程に、心を碎き身もなやみて、おひさき遠き御爲とのみ、よろづに祈りしに…………

其辭や痛切其情や熱誠、不覺讀者をして暗涙に咽ばしむるものあり。次に女子の理想としては

月も秋のさやかなる影よりも、冬霜夜に冴えわたりて氷にまがう色は心にしめられ。春の花秋の紅葉のはへ〴〵しき色よりも霜枯のせんざいのそこはかと無く枯れ行きて、誰に問はまし夜の名殘をと、さながら雪の下に埋もれて心くるしげなる枯野などの、わきて哀れにおぼえ候心ならひに候、花の色秋の紅葉をも人にたがひてすさめたる御氣色、見えされ給はずとも、事にふれてけはやからず、物あはれなる方に御心とゞめて好ませおはしまし候へと思ひまいらせ候

秋晴洗ひたらん空、さやかに澄める月かげを賞せんか、冬の寒天に劍の磨ぎすましたらん如き月を喜ばんか、春花の艶麗か、霜枯の孤獨幽遊の味か、そは見る人々の心々に依て異ならんなれど、我は阿佛尼

が描ける理想の女子は這底の人なりしを明かにすれば足れり。
十六夜日記は人の能く知る所　思想文章共に見るべきあり。『夜のつる』及此篇の如き又決して捨つべきにあらず。殊に『乳母のふみ』全章、情の激越する所、動もすれば反覆重煩の嫌われ共、此點却て著者が冲々の眞情の流露を見るべく、女流繊細緻密の思想と、母たるの愛情慰撫の情緒を知るに足るべく、此を飾るに錦心繡腸の文を以てす。用て女子修身の書となすべく、又立志の鑒となるに足りなん。加之著者が世の逆境に往來して人生の辛酸を嘗め、其間に、鍊成せる信念の光明と處世の用心とは此書を繙くもの、直に認知する所ならんなり。豈唯に歴史上一の參考とのみいはんや、聊か今の世今の社會今の女子に推奬せんと欲する所なり。

（了）



予の感じたる婦人の歌（第二）

林　天然

平相國入道清盛が、兵馬の大權を握り、法外の豪奢を極め、淫逸を事としければ、京洛中の舞女諸婦等は、彼の老爺が猶色情の深きにつけ込み、特長の才色をうり、其餘榮に預からんとの慾望を起した。でいちはやくも名乘り出たるは近江生れの妓王といへる白拍子である。入道一たび其艶麗なる容姿を見、老顏に笑凹をつくッて大悦び、直に殿中に入れて、玉よ花よと寵愛して居ッた。幾程もなく加賀の生れ佛御前なる者、これも六波羅に出て、入道の面前に其舞曲を試みた、所が多情なる入道は、孫子の手前も耻ぢず、直に佛を引入れ、妓王を視ること、恰も挫け團扇の如く、いや佛を喜ばせん積りか、無理やりに妓王を逐出したから、妓王の憤怨は非常なもので、

出る時閨の障子に

萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

何れか秋にあはで果つべき

と筆太く書き捨て置き、嵯峨の奥に庵を結び、母子三人諸共髪をけづり、尼となッてしまッた。妓王時に年二十一、妹妓女は十九、母某は四十二であッたといふこと。

それより佛御前の榮譽は妓王にも増した、けれども佛は妓王の歌を見、頗る感ずる所あり、いでや我も共々修行せばやと。

思はずも秋にあひぬること草の
我身の上におひしげるらん

と吟じ、六波羅の館を忍び出で、妓王等が住める嵯峨の往生院に尋ね行き、浮世を辭したる心意を打あかし、共に佛陀に仕へんことを請ふた所が、妓王も快よく諾し、長い年月の間、不和もなく、亂行もなく、共に誓念に怠りなかッた。後白河法皇此事を聞れ、畏くも叡感せられたといふことである。

妓王も佛御前も、語るに足らない賤婦である、而し其行をみるとや丶君子に似た所がある、妓王は幼時父を失ひ、只管母に孝を盡し、榮運を一身にあつめた時、佛御前清盛の館に來たが、始めは斥けられてあはれなかッたのを、憐れと思ひ清盛にすゝめて見えさせた、所が恩が仇となり、却ッて幸運は悉く佛に移ッてしまッた、それ故一時は非常に恨んでたが、直に佛道に入り、其後佛御前に訪はれた時、毫も恨むる所なく、朝夕起居を共にしたのである。佛御前も清盛に愛せられた初め、妓王を憚りて、再三固辭したけれども聽れなかッた、妓王が館を逐出されてからも、種々これを慰めやうと心掛けた、而かも一朝榮枯盛衰の理を曉るや、深く仇敵されたる妓王の許に尋ね行き、互に助けあつて、一生をおくらうとした事など、仲々感心すべき精神である。で二人の歌の如きも、身分に比しては頗る高尚で、些の澁滯もなく、素人の作ッた樣ではない、佛御前が妓王の身の上を頻りと氣の毒に思ッてるので、清盛は妓王を招ぎ、佛を慰めやうとしたことがある、妓王はなか〳〵應じなかッたか、餘り强ゐられたので已

を得ず館に來た、で口惜しかッたのか、

佛もむかしは凡夫なり　われ等も遂には佛なり
何れも佛性具せる身を　隔るのみこそ悲しけれ

と、謠ッたさうであるが、まこと妓王の作でありとすれば、性來餘程佛心のあッたものと考えられる。『萠え出づる』の歌の如き、深く味ふべき名句である。

三位維盛内室

雲井より吹き來る風の烈しくて
　涙の露の置きたまるかな

これは、三位維盛の内室が、まだ處女であッた頃、ある事により詠んだ歌である。内室は中御門大納言成親の女で、容貌美しく、平維盛に嫁し、六代君(世にいふ三位禪師)、夜叉御前の一男一女を生んだ、平氏滅亡の後は何うしたか分らない。

巴御前

まぼろしよ夢よと變はる世の中に
　など涙しもつきせざるらん

山人の道のたよりも自ら
　思ひ絶えねど雪は降りつゝ

兩歌共に武力を以て聞えたる巴御前の詠である。巴は中原兼遠の女で、木曾義仲の勇將、今井兼平、樋口兼光とは兄妹である。義仲に從ひ、所々の戰場に出で、義仲歿後、越中に赴き(一説に和田義盛の妾となり、朝比奈三郎義秀を生み、和田合戰の後尼となり、故國に歸ッたと)九十一歲の高齡で終ッたといふこと。

建禮門院

いざさらば涙くらべむ時鳥
　われも浮世にねをのみぞなく

丹波局

ゆく水に千々の思ひを流しやらば
　心はすみて靜けからまし

若狹局

たぐへける鹿の鳴く音を聞きしより
我身もともに夜半の淋しさ

前者はこれ、建禮門院が、世をはかなみてよめる歌である、建禮門院御名は徳子、平相國清盛の第二女であッて、高倉天皇の中宮となり、安徳天皇を生み玉ひ壽永三年平氏の一門西海に滅びた後は、尼となり眞如覺と號し、大原の寂光院に入いり、樂しからざる世を過ごさせ、建保元年五十七歳で薨去した。中者はこれ、右大將頼朝の愛妾丹波局が、頼朝の正室政子に嫉まれ妊娠の身となりしより、由井ケ濱にて打果たされんとした時、詠んだのである。が運よく其時政子の侍臣に助けられ、西國に逃れて、天命に終ッたといふこと。
後者はこれ、比企判官能員の女、若狹局の歌である。局は源頼家に寵せられ、長子一幡を生んだが、父能員等は北條氏の擅横を憤り、一幡を擁して兵を擧げ、勝たずして殺され、頼家は爲めに伊豆の修善寺に幽せられ、元久三年遂に弑せられてしまッた。局はこれより尼となり、法臺尼と號し、味氣なく世を終ッた。
三者何れも憐れな歌である。建禮門院が便り少ない身の上となッて、時鳥と涙の比べくらをしやうとまで叫んだ心の底こそ、想ひやられる。丹波局が『心はすみて靜けからまし』といふまでには、隨分つらい思ひをしたであらう。若狹局が父は殺され、子は討たれ、夫また弑せられ、獨り伊豆の山寺にわびずまゐする運命となり、夜更けて鹿の鳴く聲を聞いたら、さぞ淋しく感じたであらう。

龜菊

月影はさこそ明石の浦なれど
雲井の秋ぞなほもこひしき

これは白拍子龜菊の歌である。龜菊は後鳥羽上皇の寵愛を受け、承久三年上皇隱岐へ遷された時、龜菊も附從ひ、途播州明石の浦にて澄みわたる月をながめ、『雲井の秋ぞなほも戀しき』とよんだのである。

BARONESS TERU SONE, WIFE OF THE MINISTER OF FINANCE.

By A. Miyamori,

Professor of English at the Keio Gijuku.

"It is only when men become wise and thoughtful that they become frugal."

Baron Arasuke Sone, Minister of Finance is an eminent figure in the political world, as an influential member of the present ministry, as one of the committee for administrative readjustment, and as the chief promoter of the proposed curtailment of the budget to the amount of yen 16,000,000. Just as Baron Sone has great abilities for the management of public finance, Baroness Teru Sone is unrivaled in managing domestic finance; indeed, her skill and tact in house-keeping is far above the common level.

Notwithstanding his wealth and social standing, Baron Sone is wonderfully thrifty even to the admiration of all his friends. Should you visit his country-house at Katase, you will be surprised to find that the man who holds the Portfolio of finance enjoys there a simple life little more luxurious than that of a mere fisherman. This simplicity of living is heartily seconded by Baroness Sone; nay, thrift and simplicity are her guiding principle in house-keeping.

How far thrift prevails in the home under Baroness Sone's management is shown by the following anecdote of her daughter Miss Seki, who was married some time ago. Being the only daughter of a cabinet member and rich nobleman, Miss Seki might be supposed to dress usually in silks and velvets. But nothing is so far from the actual fact as such a supposition. She never wears silk on ordinary days but is quite satisfied with *taffachelles* clothes lined with red muslin. When preparations were going on for Miss Seki's nuptials, her parents proposed to order for her a suit of crepê *furisode* * to be worn on that occasion. She was not a whit pleased with this proposal, but, quite contrary to her parents' expectation, declined it, saying, "Father and mother, excuse me but I think it would be waste of money to make expensive garments, which I can not of ten wear in the future, even for so important a ceremony. If you are bent upon ordering *furisode*, I hope you will get them made of white crêpe. If so, after the ceremony is over, I can get the stuff dyed and make it

over into any kind of garment. But if I may be allowed to have my own way, I don't want furisode at all."

The very evening of the day on which Baron Sone was for the first time appointed a cabinet minister, Baroness Sone called together her sons and daughter and said to them in a dignified manner, "My dears, as you know, your father has been made a cabinet minister. No doubt we may well rejoice at it. But as far as your father is concerned, his duties and responsibilities have become much heavier than hitherto; so we must be very careful in every way that his trouble and anxiety for us may be lessened. Moreover, you must remember that your father has attained to his high position by his own merit and is in no wise indebted to us for it. You must not allow yourselves to be Proud or indulge in luxury because of his high station in life."

Thus the family live in extreme simplicity, and luxury is never allowed to creep over the threshold. If her children complain of the simple life they live, Baroness Sone will say, "My dears, your father was brought up more simply than you." She never gives them a penny more than they actually need. Until quite recently, she had them keep a large number of hens, and gave something for the eggs, which was divided among them for their pocket-money. As the eggs were bought at only one *sen* and a half each, the youngest son once complained saying, "Mamma, wherever you may go, you can not buy eggs so cheap as at one *sen* and a half each. Will you not please give us a little more for our eggs?" Thereupon, the mother replied, reproachfully, "But, my son, who pays for the food for the hens?"

---

* Long-sleeved garments of graceful form worn by young ladies only on great occasions.

大藏大臣曾禰男爵夫人照子

『凡そ人は賢く且つ思慮深く成りて初めて節儉となるものなり』

大藏大臣男爵曾禰荒助君は現内閣の勢力ある一員として行政整理委員の一人として一千六百萬圓豫算削減の主唱者として政治界の大立物なり。曾禰男爵が國家の財政を處理するの敏腕あるが如く男爵夫人照子は一家の財政を處理するに匹敵するものなし其の家政上の手腕は實に滔々たる世間の奥樣令夫人の企て及ぶ所にあらず。

曾禰男爵は其の資産と身分とに似合はぬ大儉節家にして知人の皆嘆服する所なり。一度片瀬なる男爵の

別莊を訪れたらんには身藏相の顯職にある人も田舍に歸れば質素なる一漁夫たるに過ぎざる生活を樂めることを見て一驚を喫するならん。照子夫人は男爵を助けて此の質朴なる生活を營めり否節儉と質朴とは家政上における夫人の根本主義たるなり。

曾禰男爵夫人の經營する家政の如何に質素なるかは曩頃結婚せる令孃せき子に關する左の美談にて知ることを得ん。せき子孃は大臣にして富有なる華族たる人の一人娘なれば平素定めて絹布を纏ひ居るならんと想像するものあらん。然るに斯る想像ほど實際の事實に相違せるものはなし。令孃は平日絹布を纏ふこと決して無くして而かも緋金巾の裏を附けたる唐棧縞の衣服を着て滿足し居れり。曩きに婚禮の準備中男爵夫妻は婚儀の折に着せしめん爲めとて縮緬の振袖一揃を注文せんと言出でたり。せき子孃は之を聞て少しも喜ばず而かも全く兩親の豫想に反して左の如く言ひて之を辭したり『甚だ失禮なる申分でございますが如何に大切なる式の爲めとは申せ此後幾度も着る事の出來ない高價の衣類を調へまするは不經濟至極でございます。是非振袖を注文したいと思召すならば何卒白縮緬で拵へて下さいませ。左すれば婚禮の濟んだ後で染めてどんな着物にでも拵へられます。然し私の思ふ通りになりますならば私は振袖は決してほしくございません。』

曾禰男爵曾て初めて大臣に任せらるゝや男爵夫人は其夜直ちに令息と令孃とを呼び集め儼然襟を正して曰く『御前達の知つての通り御前達の御父樣は今度大臣になられた。誠に喜ばしい事に違ひない。然し御父樣の御身になれば今後一層勤めが重くなつてお骨の折れる事も大きいのだから家族の者は萬事に注意して父樣が我々の爲めに御骨折と御心配なさる事を成るべく少くせねばなりませんよ。それに又たお父樣の大臣におなりに成つたのは全く御自分の手腕でおなりになつたので家族のものゝ御蔭は少しもないと云ふ事を心得ねばならないよ。御前達は御父樣の御身分が高いからと云ふて高慢をしたり贅澤なまねなぞしてはなりませんよ』。

左れば男爵の家族は其生活において質素の限りを盡し毫も贅澤の行爲を許さず。令息令孃等若し其の質素なる生活に就き不平を言ふことあらば男爵夫人は『お前方の御父樣は御前方よりも質素に御育ちになつたのだよ』と言ふ。夫人が令息令孃に與ふる小遣錢の如きも一文たりとも餘分に與へず。曩頃まで夫人は彼等をして多くの鷄を飼はしめ卵を買上てげ其錢を小遣錢として彼等に分ち與へたり。其買上價格纔に一個一錢五厘なりしかば或時末の令息不平を唱へて曰へり『母樣何所に御出でになつても一個一錢五厘と云ふ卵はありませんぜ。私達の卵も何卒今少し高く買つて下さい』と。此に於て母君は曰へり『然し坊や其卵を生む鷄の餌の代價は誰が出しますか』



妙齡女子の理想生活

リギョル博士談
前田長太記

佛の文豪ルーソーの言は人皆能く之を知つて居る、曰く『世の青年にして二十歳に至るまで其の清淨無垢の性を保ち得たる者は、世に最も珍重せらるべき者ならむ』と、此は勿論天下の青年男兒に就て語られたる言であるが、世の青春妙齡の女子に至りても亦然りである、否尚一層然りと謂はねばならぬ、何せなれば其の清淨無垢の性の上に、青年男子の有たぬ優美性と誠忠心とを添加して居るからである。

斯の年頃の女子が、其の將來に想到するときは、解決すべき問題は、先づ第一着に『誰に身を托す可きか、又如何なる道によらば、最とも忠實に働らき得べきかと云ふに在りて、『富者とならむか、貧者とならむか、順境に立たんか、逆境に立たんか』の如き殆ど其の顧慮せざる所である、少くも是等は第二の問題とする所である、身を托するとは是れ其の一生を司配する思想である、忠實に働らくとは其の心に期す

る唯一の目的である、此の理想によつて斷ずるときは、女子の志望に最もよく適合し、其心の要求に最もよく應ずる生活は、絶體的、献身忠實の生活であると斷案を下すべきである。

西歐諸國には這箇の天啓に照らされて、高崇雄大なる志を起した妙齡女子は實に萬を以て數ふべきほどある、彼等は家門の榮を離れ、奢侈安逸の生を棄て、交際塲裡の樂み、偕老同穴の契り、家庭團欒の歡びをも打捨てゝ、全く利害の觀念を絶ち、勇然決意、粗衣粗食以て一身を社會公共事業就中子女の敎育と貧民の救助とに献げて居る、其志の高崇にして其擧の壯快なるは寔に感ずべきである。

日本に於ても二十歳前後の女子にして、這般の献身誠忠の志ある者は尠くないやうに見受けられる、或は學校に敎鞭を執り、或は病院に看護の勞を取り、假令ひ他に都合差支あるにもせよ、兎に角社會公益の上より見て多とすべく珍とすべきである、誰か溫きホームを慕はざらむ、誰か母と呼ばるゝ樂みを冀はざらむ、滔々たる女人社會に玉の輿を夢み、奥樣の稱を希望しつゝある者多々益々多しと云はるゝ今の世の中にも、結婚の望みと家庭の樂みとを絶ち、單身以て社會公共事業に從事しやうと志す者の尠からぬは兎も角も邦家の爲に賀さなければならぬ、大和民族の魂は尙未だ其女性の身に就ても看取されるではあるまいか、言ふ勿れ、結婚せざる婦人の多ければ、人口減少の憂なき能はずと、國家は假令人口の多きに堪へ得るも、其の住民の凡てを養ふこと能はざるは、當眼の事實である、無職の民と生活難とを見ば一目瞭然である。

歐洲にては此の難問は疾く既に解決されて居る、此種の女子あるときは、相共に團結して一の團體を成し、其の嫁資を携へ來りて一の公產を築き、之に依つて以て生活して居る、若し其中に病に罹る者あれば、健全なる者之が看護の勞に當ると云ふやうに、彼等は最早一人ではない、孤影煢々の心細い事はない、宛

然一の家族である、一の社會である。

女性の我儘を抑へ、弱質を支へて團體の乖離分裂を防ぐ爲には、戒律があつて之を會則若くは家憲と云ひ、團員上下の別なく皆之を遵奉して居る、世の腐敗の空氣が、此の女人社會に入り來るを防ぐ爲には、健全なる宗教の道を以てして、之を周密に研究し、之を嚴重に格守して居る。

高貴顯榮なる家門に於ては、忠誠より貴き寶はないと思ふて居る故、今迄は子女を此の團體に入るゝを以て、家門の榮譽として居るのである、之に就き面白い話がある、一の例證ともなることなれば玆に之を挿入しやうと思ふ。

此種の團體の一に『愛國婦人』と稱するものがある、重に病院にて病人就中戰塲に負傷した兵士を看護して居るものである、一日巴里で名高き某侯爵が其の令孃（團員となれる者に）會見せんとて、肥馬輕裘といふ華美な有樣で其の門前に到つた、處が門を守れる婦人は斯る訪問には日頃馴れて居る事故、毫も驚かず正直に語て曰ふ『今日は侯爵の令孃に會見することは堅くお斷り申します、令孃は只今洗濯最中であります』と、冷然何の顧慮する所もなく答へたので、侯爵は嚇々として怒り、令孃の洗濯に從事すと聞ては、尙一層腹立ち、『我は我娘を洗濯女にするが爲に、高金を拂つて之に敎育を授けたものではない。』

一語能く侯爵の心事を顯はして居る、然しながら侯爵自らも後日屢々此話を繰返さずには居られなかつた、其の當時斯くは言つたものゝ、思へば我娘を富豪の家に嫁がしめたよりも、洗濯女とした方が却つて家門の榮とするに足りし事を其の胸中に呼起したのである。

（をはり）

鍋島侯爵家の家庭

（子女の御教育）

記者

さる方の紹介にて、鍋島家の御邸に上り。侯爵夫人榮子の方に御目にかゝりて、「子女の御教育」を承る積りで、同邸に參りました。

　大玄關

嚴かに立つ大門を入り、立派に敷詰めてある小石の上を歩みて、壯重なる大玄關に參りますると、若い執事が恭しく腰を屈め、黒に卷繪をちらした盆にて、自分の名刺を受けられた。

　應接間

ピカ〳〵として、輝き渡る御殿を、目も綾に打眺めて、たしか、三間ほど經て、表應接間に通はり、眞中に圓く置かれてある、椅子に腰を据して居りました。

この時、折目正しく着た、羽織袴の、而して何處となく、古武士の面影を宿せる家令樣が來られて、暫時御待下さるやうにといはれて奥に行かれたのであります。

　柔かな御方

室は天井が高くて、飾付はいろ〳〵貴重なる什器であるのを觀つゝ、執事が酌み來りし、御茶を飲みながら、サスガ鍋島家だと感嘆して居ると、緩かに、扉は明けられました。

さては、夫人の御入りと、自分は椅子を離れて慇懃に立禮する。夫人は柔やかに玉歩を移し、甚だ靜かに椅子に凭られ、頗ぶる平民的に、「大分寒くなりました」と仰せられた。

　質素なる御召物

溢るやうな御愛嬌に、涼しい御聲、口數尠くして、賑はしく受取らるゝ樣。あゝ此御方かぞと。何となく尊敬の意が起りました。

羅馬や、巴里で、交際社會の花と謳はれた侯爵夫人、今は又、我國の凡ての社會に、内外人より、あ

の御方こそ、貴夫人のモデルである。其誰にでも御丁寧に、且つ舞蹈でも何でも一二を争ふほどの御腕を有せられて、常には穗にも現はさぬ程の御方なれば、凡てが御質素であらうとは思ふて居ましたが、今其の御姿に接して彌々恐れ入りました。じみな糸織の御召に、細い片の繻珍の丸帶をなされて指には、僅かに一個の金指輪を嵌められて居るので御座いました。

子女の御教育

自分が少しは心配しつゝ、粗末なる言葉で、來意をいひますと。

夫人はそうですかと、ニッコリ笑はれ、次で、この節は、皆樣が種々御研究になりますので、御蔭樣で、樣々の事を知りますと仰せられるので、自分も、この時どうも恐れ入りますると感謝し、それから子女御教育の事を承つたのであります。そうすると、榮子夫人は、諄々として仰せられました。

十一人の御子方

私の方には、十一人の子供です。男が五人女が六人であります。

尤とも、長男直映は已にケンブリッヂを卒業しまして別邸を構へて居り。女の方でも、姉は前田侯爵に、次は梨本宮妃殿下になられて居るので御座います。

男の方

男の方は四人學窓に居ますが、皆邸には居ません、これ迄は、十二才になる迄、邸内に一學舍を建てゝ、其處で養育して居るのですが、一人は未だ九才で御座いますけれども、兄等と共に塾に出して居ます。塾は貞次郎孝三郎は眞倚誠といふ人の許に哲雄(九歳の御方)は中尾増一といふ人の方で、皆宿許から學習院に通ひます。

直直は分家直彬の養子で、これも福井久藏といふ先生の方から、第一中學に通ふて居ます。

目的の定め方

皆銘々の志望に任せて、目的を定めます。而して、

目的に由て、其塾が違ふのであります。先に申した兄弟の中で、直直は政治、他は軍人志望といふことになつて居るので御座います。

平民的の名を付くる所以

孝三郎とか貞次郎とかいひまする名は平民的で御座ますが、これは矢張名前で、人の氣分が違ひますからであります。

さうしませんと。凡べて、大名風に育つもので、これを防ぐことが出來難いからであります。且つ下々の有様にも通じ、殊に軍人となるものは、格別剛健なる氣風が必要ですから、成る可く普通の名を付くるので御座います。

日曜日の氣休

この時自分が、貴公子の身で、常に塾にのみ御出でになりましては、甚だ御不自由で御可愛想でと申上げると夫人は丁寧に首肯づきて、

衣物洗濯は皆邸のものが往復して、仕て遣りますし。それから日曜日丈は、邸に呼んで遣ります。其他には一切往來を止めてあるので御座います。また

女の方

女の方は四人共華族女學校に在學して居ります。茂子信子は來年が卒業で、尙子俊子は未だなかなかで前途が遠いのであります。

昔は

昔は一人に四人の侍女が跟いて、老女が監督し。別に一家の如く仕て居つたので御座います。今は一人に一人の侍女で居間も二間より外充てゝはありません。

自分で御髪を結ふ

髪を結ふのも、自分でします。衣物の裁縫はいふまでもなく、時々は洗濯物も。

自分はこの時へーー左様で御座いますかと驚いた。夫人は尙言葉を次ぎ、學校道具などは、皆自分で片付けます。

家庭教師

家庭教師は、女二人で、四人は學校から歸つて後

此教師に英語と和文を習ひます。

食事の時

御食事の時は、如何でと自分が御尋をすると、夫人は直大と私と女子供丈は一緒でありますと答へられた。

世間を知る事

世間を知るといふのは。六かしい事で、大概私が伴れまして、音樂會や親族の許。別莊にも行きますのですが、尤とも、

梨本宮樣の方では、克く御招きにあづかりますから、其都度私が四人の姫を伴れて、參ります。

友達とはいへ、別に遊びには參ることは、少いで御座いますが、あの人方では、なか〳〵互に懷しいので暑中休暇などは。大變御文の遣取をします。殊に毎日學校で會つても、未だ御話があると見えまして、御手紙が來るので御座います。

御召物

衣服は質素を旨とします。西洋でも、娘の時には、毛織物であります。何處かに參る時に時計位を持せますが、其他の時は決して貴金屬の物などは與へません。

衣物は糸織銘仙位の所で御座います。而して其縞柄や質などは皆 私 が見立てるのです。

體 育

庭園で、テニスを致し、克く舞蹈を仕ます。それは、私も好で。皆一緒に仕て、樂しう御座います。その外體育に關することは、大概仕て居ますが、其中で將來のためにもなりて可いのは舞蹈かと思ひます。

夫れから、又學校に參りまするは、常に徒歩で御座います。尤とも雨降りの時には、車で送つて遣ります。

和 歌

直大も私も和歌が好でありますから。四人の子供達も矢張り好で御座います。

子供達とも。一緒に、歌道奬勵會や興風會に參

りまして、詠むのであります。
西洋の詩は、此前伊太利で少し稽古して見ましたけれども、言葉や何かゞ違ふので、中途で廢めて居るやうな譯で御座います。

外國語

直大と私は佛語、梨本宮妃殿下も佛語、男の小供の方では英獨に分れて居るのですから、一緒の時は面白くあります。
姫の方でも學校を卒へましてからは、交際社會に出ますする準備でもありますから、佛語を稽古させやうと思つて居ります。

慈善

慈善の心掛は可い事でありますから、私が注意しまして、姫達の手に出來ました物、或は其他の物品を姫の名で二葉幼稚園に寄附させせます。
この時自分は。大分時間もかゝり、尊い方を長く煩すのは失禮だと思ひましたから、此處で御辭儀を致しまして、御菓子を頂いて歸りました。（完）

冬の家庭衛生

醫學士　藤田斌

◎追々寒くなつた來ますから、冬の家庭衛生と云ふ事に付て、唯だ一寸氣附いた點丈けお話し致します、總じて氣候時候は、疾病に付ては大關係ある者で、極端論者は疾病の原因を以つて全く氣候に歸する者すらあります。漢醫の方では風、寒、濕、暑、此四者を以つて疾病の原因として居りますが、疾病の原因は唯だ此四者にのみに限りません、併し此の四つの者が絶へず、病原となる事は一般の能く認むる所です、然らば吾々は如何にして、此の四つの者に冒されぬやうにせねばならぬか、ソは唯だ衣食住の適度を以つて防ぐ丈けの事で、詮ずる所、衣食住を能く節して、其風土氣候に適應させて行けば、疾病に冒されないのです。
◎抑も我國は北の方北緯五十度五十六分に起り、南の方北緯二十一度五十三分に至り、殆んど三十緯度

に連亘して居るのですから、四時寒、温、熱の氣候を有し、從つて寒熱の侵害を受くる事が極めて少いのです、是れ必竟するに本邦は、四面環海で、海洋が能く氣温を貯蓄し、氣候に自然の調和を與へるから、激烈の寒暑が無いので、他の大陸諸國に比すれば、實に結構無比の邦土です。

◎寒くなつてから能く起る病氣は、我國では先づ秋季にはマラリヤ熱即ち瘧、冬季になると感冒が多い、其れから極寒くなれば、呼吸器病、氣管支病、肺炎などがある、是等の病氣は空氣が濕りて、肺中の温を奪ひ去るから起るので、我國は海洋の爲め、四時其恩惠を蒙むる代りに、又絶へず濕氣と云ふ大敵に苦しめられねばならぬ、故に我國では衛生上殊に濕氣を防ぐ事に注意するのが必要です、濕氣の侵害を防ぐに付ては、先づ高燥の土地に住宅を構へ、家屋の建築に適當の設備をなすのが第一だが、日常は絶へず室内の濕氣を除く事に注意せねばならぬ。

◎室内の濕氣を除くには、冬季は燃料の作用を借つて室内を暖むるが宜しい、そうすれば自然に乾燥せる空氣を以つて、濕氣を帶びたる空氣を除却する事が出來、自づから換氣法が行はれる、西洋人の居室には、檢濕器と云ふものが掛けてあつて、室内にどれ丈けの濕氣があるかを檢査する事が出來る、是等の器械は日本の如き濕氣の多い國には、殊に必要であらうと思はれます。

◎我國では未だ、室内の換氣など云ふ事に付て注意する人が極めて少く、寒くなると唯だ室内を暖くする爲め、戸障子を密閉して蟄居を樂しむ者が多い、是等は衛生上極めて惡るい事で、殊に夜間石油ランプを點して居る時などは、餘程空氣の流通を能くせないと、炭素末が室内に充滿してどれ丈けの害を與ふるか知れません。

◎衣服の事に付ても亦た能く注意せねばなりません、衣服は外氣の感作を防ぐ爲めの要具で、夏と冬とは全く其目的を異にし、冬は身體の温を保つと云ふ事が第一の要件です、體温を保護するには、温を

導く事の最も尠き者を撰ぶが必要で、木綿及び毛布は、其質柔軟にして温を導く力少きが故、冬の衣服は之に限ります、絹布は木綿に比すれば温を導く力多く、自づから寒冷を感じますれど柔らかで輕いから、老人子供の衣服は絹布を用ふるが宜しい、併し肌着用としては絹布は不適當です。

◎衣服は薄すきに過ぐれば寒氣に冒かされて感冒を起すが、其れかと云つて又、温暖に失すれば皮膚を弱くし、其れが爲め感冒に罹る事があります、彼の深窓に育つ子女の太抵が、虚弱にして病氣に罹る事の多いのは、全く衣服を着過ごして、自然と皮膚を弱くした結果です。

◎皮膚は之に寒冷を感ぜしむれば、啻に脈管を收縮せしむるのみならず、失温を補はんが爲め、體内に酸化作用を催進して、之を肥盛ならしめ、其れより物質の缺乏を生じ、從つて食慾を增進せしむるの反動を起す者であるから、常に少しく寒冷を感ぜしめて、刺戟を與ふるのは、亦た衞生上必要の事です。

試みに一例を擧ぐれば、歐米人は身體を被ひ包む事が多い、而して其結果包被した部分は機能遲鈍で露出した部分は極めて敏活である、即ち空氣の温度、攝氏の十五度なる時、露出の部分に二十九度二分の温を保つて居れど、包被の部分は僅かに二十一度の温を保つて居るに過ぎない、是れ必竟露出の部分は身體の機能が十分に其職務を盡くし、多量の血液を引いて其部分の放温を增進せしむるに因るので、是れによりて見れば、身體に取つて衣服は唯だ皮膚の作用を補助し、發温を節減せしめ、之に幾分の休息を與ふるに過ぎないのである。

◎襟卷及び手袋の如き、寒指を墜すとも云ふ可き土地に在つては、防寒の要具たるに相違無けれど、本邦の如き温和の氣候に在つては殆んど其要無く、之を用ふれば反つて皮膚を弱くするの恐れがあるから、コンナ物は斷然排斥し、成る可く寒風に吹き晒らされた方が宜しいのです。

◎帽子も衞生上から云へば全く不必要の品で、人の

頭部は天然の衣服、即ち毛髪で被はれて居るから、別に之を被るの必要無く、之を用ふれば唯だ頭部の機能を遲鈍ならしむるのみです、故に帽子の如きは成る可く薄くして輕ろく、空氣の通ずる穴のアイテ居る品を撰ぶが宜しい。

◎足袋、腰卷、股引等は衛生上必須の要具で、殊に婦人の腰卷などは、成る可く保温の十分なる毛布類を用ふるが宜しい、又椅子に掛りて事務を執る者などは股引を用ふる事が必要です、それと現今用ふる所の足袋は其筒が短かいから、之を長くした方が好からうと思ひます。

◎雨濕を防ぐ爲めに桐油紙、合羽類を用ふるは、氣孔塞り十分に換氣を行ふ事が出來ませんから、餘り



宜しくありません。

◎睡眠中は尤も注意を要す可き事で、此間は思考、運動等の動作全く止み、醒覺の時動作に依つて生じたる老廢物を排泄し、多量の酸素を吸收しますが、其酸素は酸化作用を營まず、唯だ内に貯蓄せらるゝのみですから、温を發する事が極めて少ない、故に能く寢冷へをして、其れが感冒の原となる事が多い、此寢冷へを防ぐには、先づ寢衣を筒袖にして、皮膚を露出せぬやうにせねばなりません。

◎皮膚を強くするには、冷水摩擦か、又は空氣浴を勵行するが宜しい、冷水摩擦は手巾を冷水に浸し、其れを絞りて皮膚の紅色を呈する迄摩擦するので、

空氣浴と云ふは、衣服を脱いで赤裸となり、寒冷なる空氣に皮膚を晒らすので、兩者共早朝起床後直ちに行ふが宜しい、其時間は凡そ五分間乃至十五分間を以て適度とします、此法兩者何れかを行へば着衣後は漸次に體温旺生して、皮膚に寒氣を感ずる事少く、屢ば行へば皮膚次第に強くなり、身體の健康になる事、實驗すれば直ぐに判かります。

◎浴湯は成る可く低温の湯に入るが宜しい、寒いからと云つて熱い湯に飛込み、快を一時に取るは極めて惡るい事です、西洋人は體温と同温位ゐの湯に、時間長くゆつくりと這入ります、併し我國では浴室の構造が不完全ですから、トテモそんな工合には行きません、ソコデ先づ我國では、四十度前後の湯が適當であらうと思ひます。

◎湯又は水に浴すると反對で、乾浴と云ふものがあります、之は清淨なる衣類を屢ば交換して皮膚の汚垢を去るので、平生湯水に浴する事を嫌ふ人か、又は湯に這入れない病人などには適當です。

◎食物も亦た氣候によつて、多少變更せねばなりません、元來人が食物を攝取するのは、身體を營養する計りでなく、體温を發生せしむる者であるから、食量の多少は直ちに體温の發生に影響します、夏は身體に多くの燃料を要しませんから、淡泊の食料を少量に採つても差支へないが、冬は體温の發生を盛んにせねばならぬから、成る可く運動して、滋養物を多量に食ふの必要があります。

◎食物の温度は、體温と同度か、若しくは少し高くして四十度か乃至四十三度位ゐを適度とします、寒いからと云つて無暗に熱い物を食ふのは不消化の原で、此上もない不養生です、併し粥雜炊などは五十度位迄は構ひません。

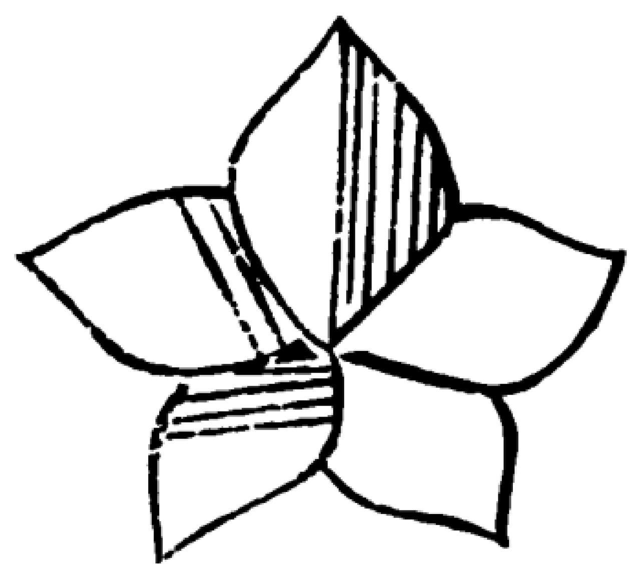
◎實に此家庭衞生と云ふ事は國家に取つて、最も必要なる事で、國民の強弱貧富も、詮じ來れば多くは其の衞生を重んずると否らざるとによつて岐るゝものですから、公衆衞生に注意すると與に、家庭衞生にも一層深き注意を拂はねばなりません、然るに

此家庭衛生に十分の注意を加へて、一家内に疾病無からしむる事を務むるは、實に内を衛る婦人諸君の職責で、此職責こそ一家を整理するに於て最も重んず可き任務かと思はれます。

造花

女子工藝學校教師　太田とみ子

次に結梗の縫方で有ります、之は前の縫方とはゞ同じ事で有ります、されども梅等よりも少しむづかしいのです、初め其(イ)の瓣から、やはり細き形の方よりいたしまして、先きの尖らぬ方に針を入れます、梅の瓣を縫し如く、半分づゝ縫ひまして(ロ)瓣に轉ります之は(イ)の瓣の細き方より針を出し、(イ)瓣のさかひに糸を渡すやうにしてはすに縫ひます、次に(ハ)瓣にうつる、之に(イ)(ロ)の瓣の集て居る所より針を出し、(ロ)瓣

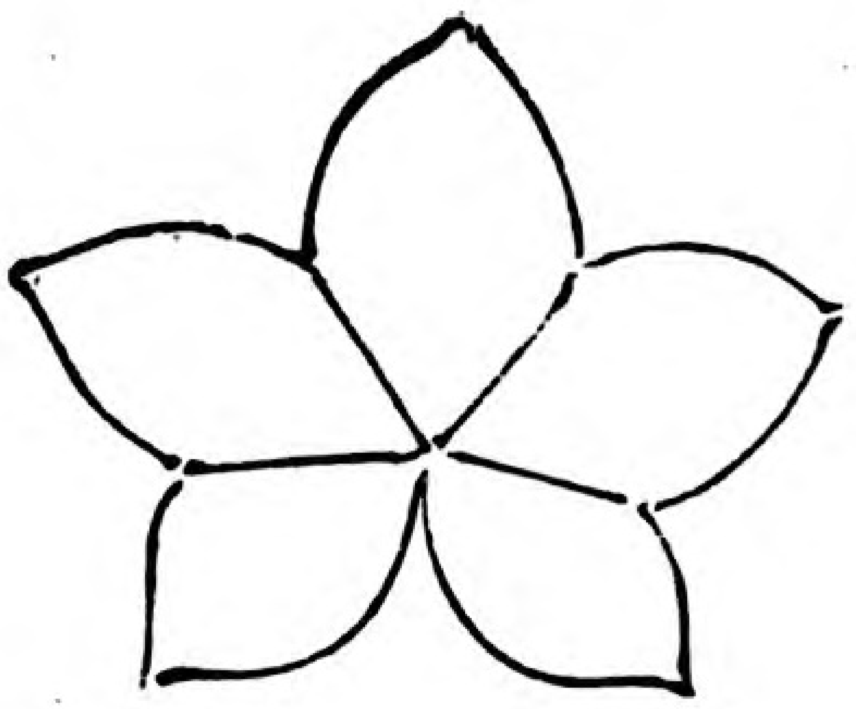


の縫ひ方のむき合ふ樣に、圖に有る如く縫ひまして(ニ)瓣に轉る、之もやはり三ツの瓣の集りたる所から針を出し(ロ)瓣のさかひに糸を渡してすこしはすに縫ひます、次に(ホ)瓣之は前縫ひました瓣の集りました所から針を出しまして、(ニ)瓣とむきあふ樣に縫ひます、初めの中はなか〳〵五瓣の集らぬものですから、能く注意して、あまり糸をつよく引きません樣にやはり適度に致します。

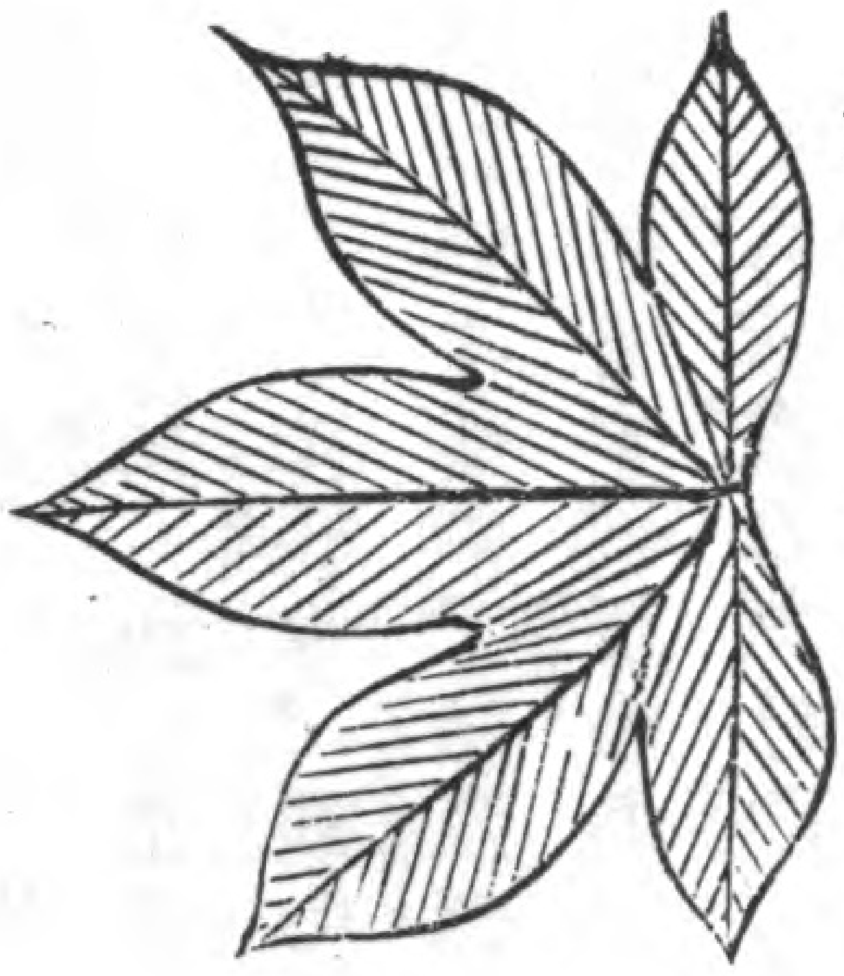
菊葉は前縫ひましたものとは、少し異て居ります、此初めは圖に有ります點の所より、針を出しましてはすに其葉脉と輪廓に糸を渡しまして、半分づゝ縫ひます、初めの中は針の短く成たがるもので有りますが、あまり短いと勢が無い樣に見へますから、成る可く長目に圖に有る程に致し、(ロ)に轉ります、之は針を外廓の方から針を出し、前縫ひました葉脉の所に、針を入れます、之は(イ)を縫ふて有ります針目の所と同し所に針を



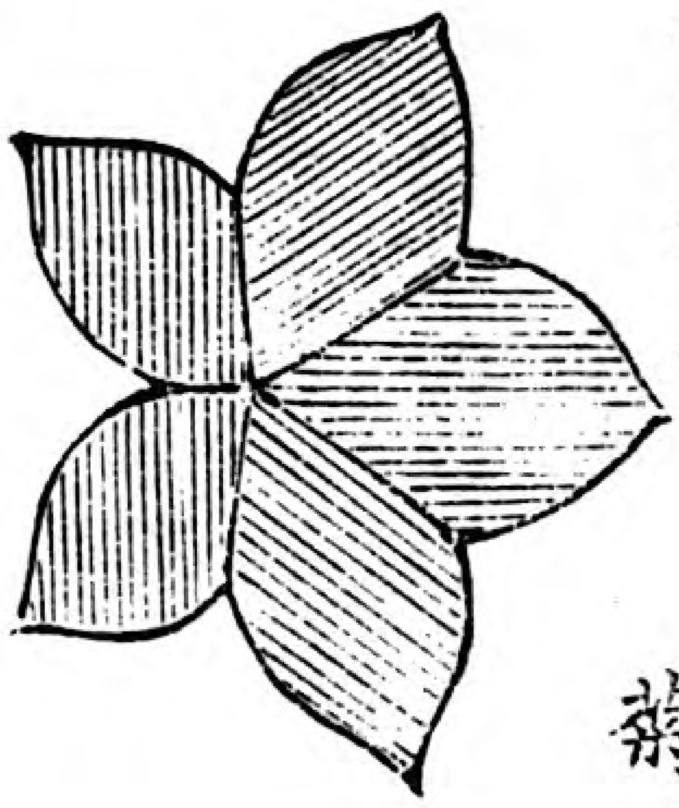
桔梗形



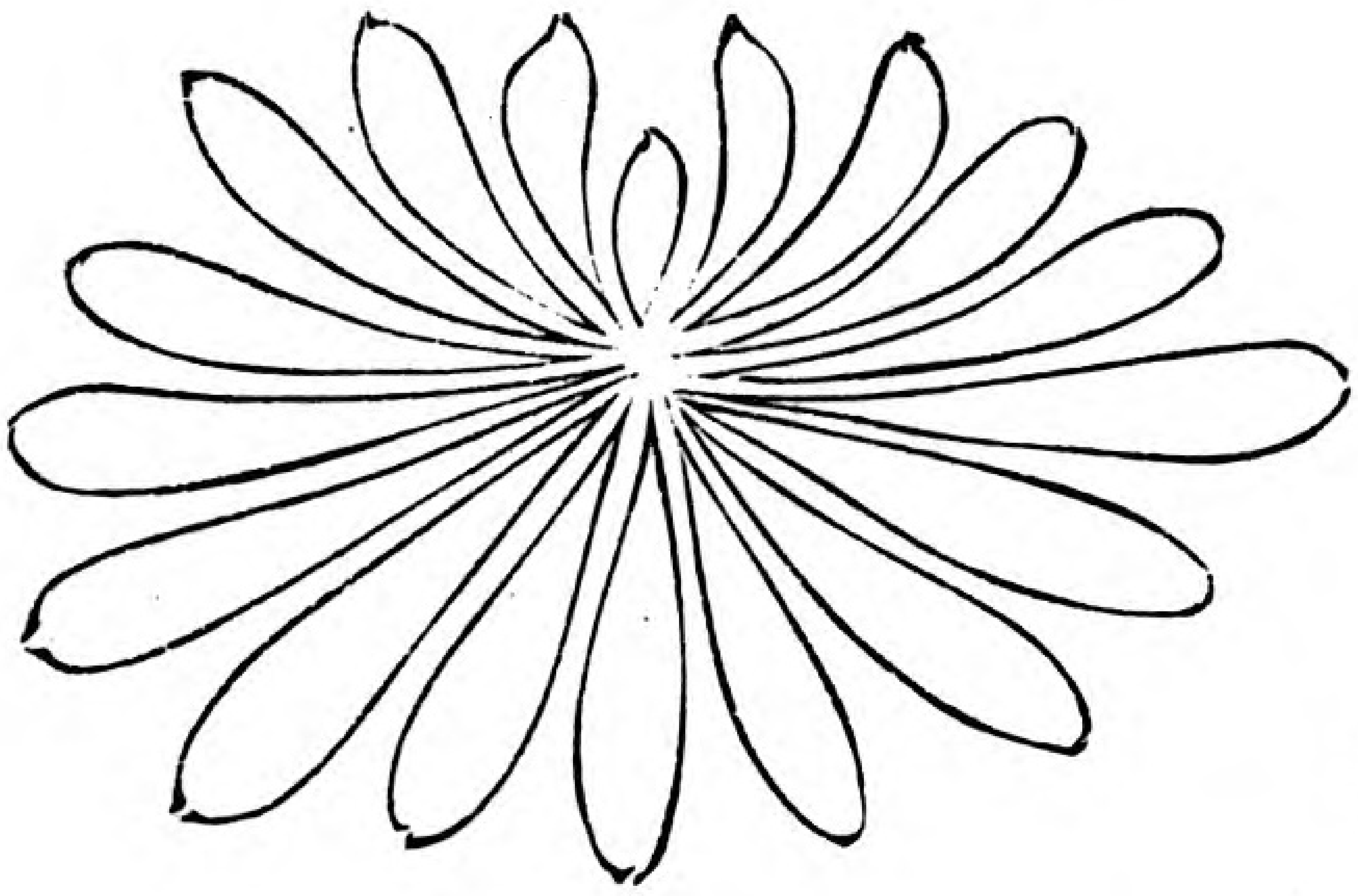
楓出來上り



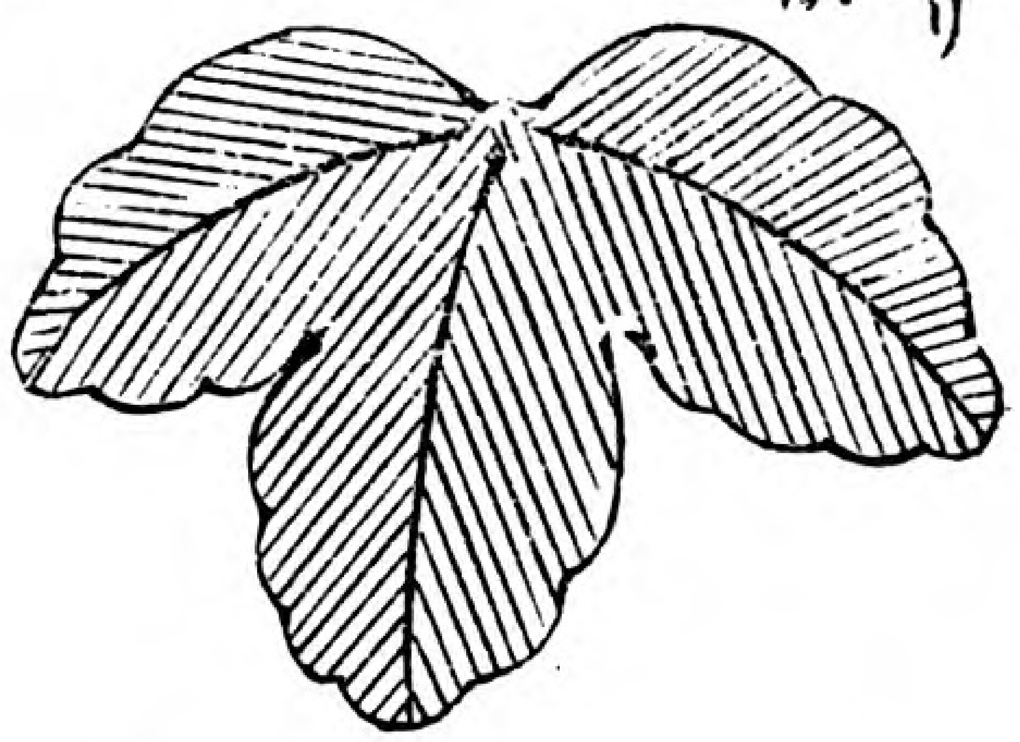
仝出來上り



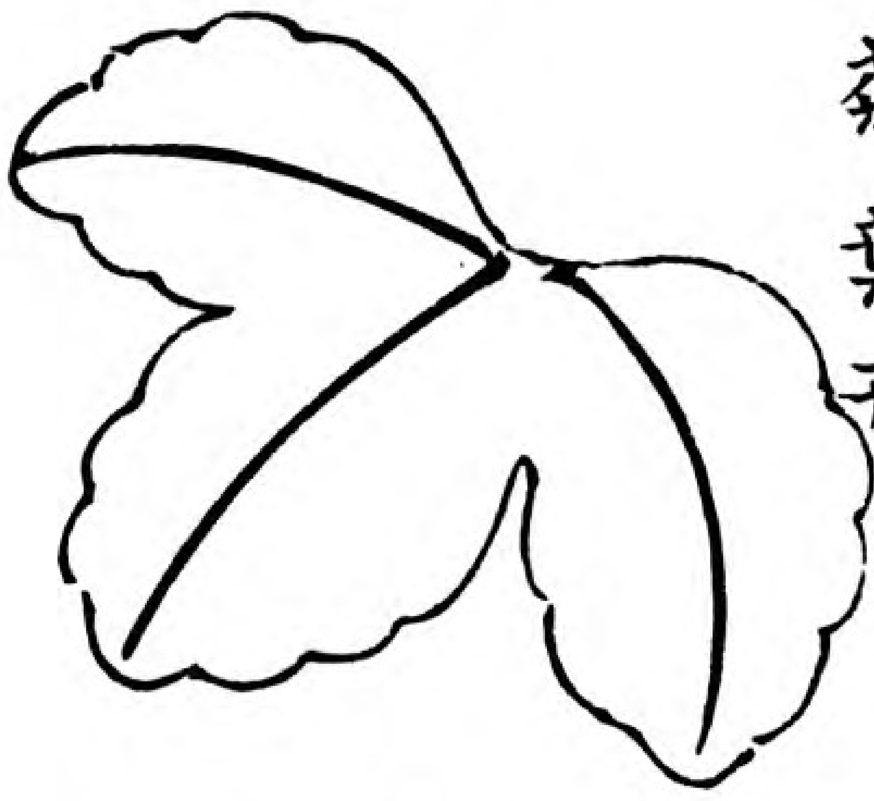
菊



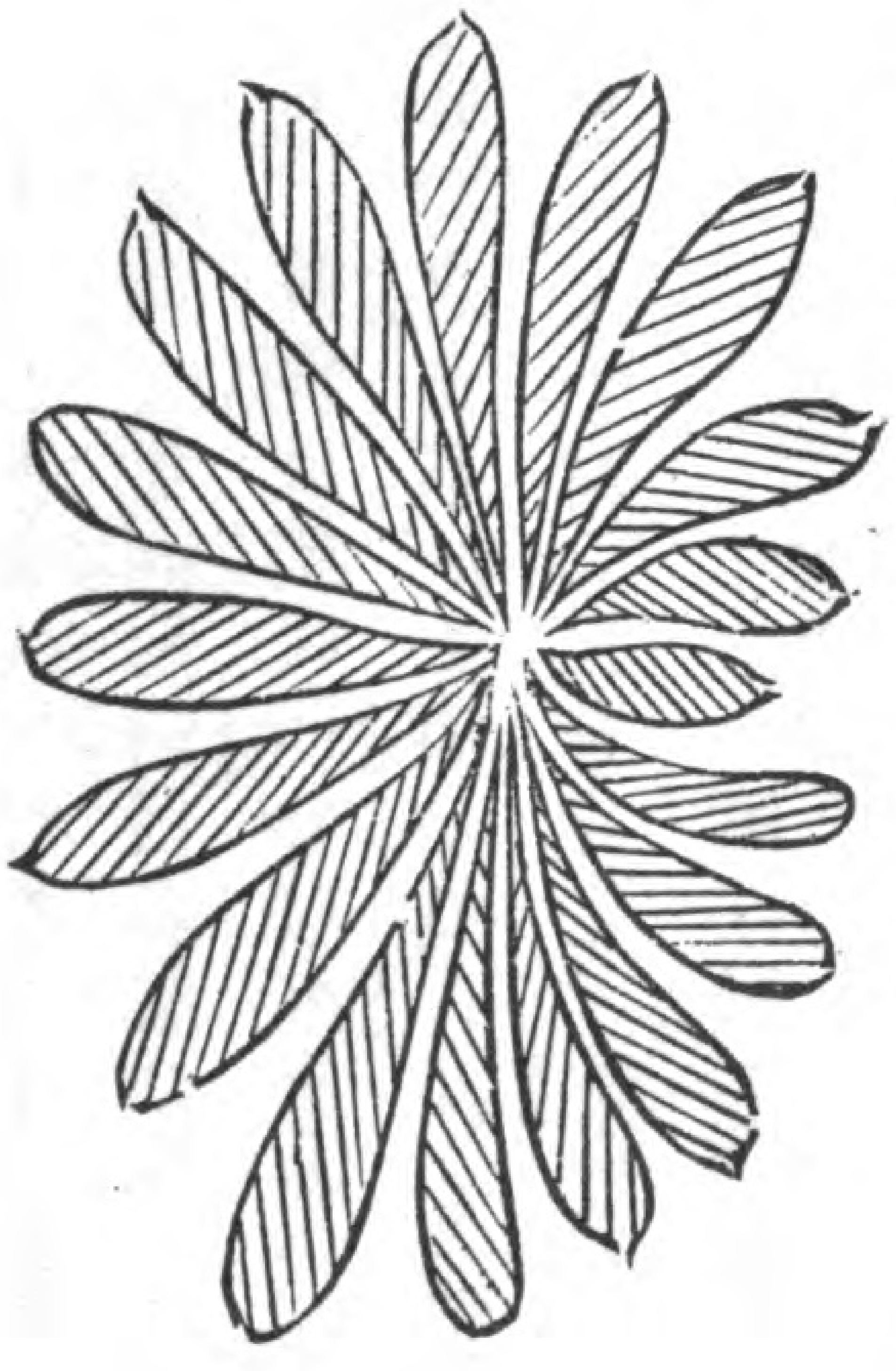
菊葉出來上り



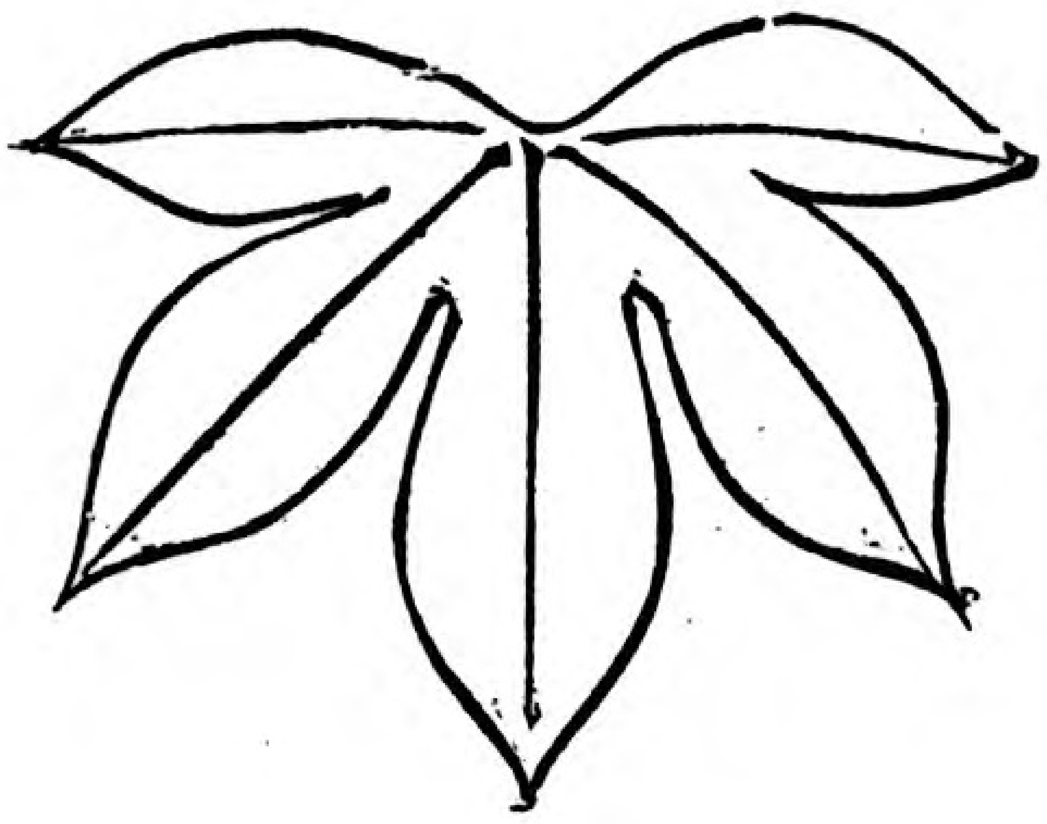
菊葉形



菊出來上り



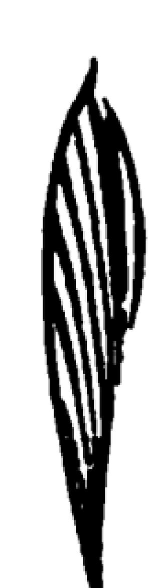
楓形



入れますと、脈の能く目立つものです、次に(ハ)に轉ります之も前と同じく半分づゝ縫ひます、(ニ)にすこし針目を長く致しませんと縫いにくいものです、次に(ホ)に轉り、前の縫ひ方と同じくいたしまして縫ひ終ります、脈及び葉のきれ目などは、よく縫へぬものです、脈のあまり曲ッたのは見にくいものですから、成るだけ曲らぬ様に、糸を長目に縫ひます所は重りたがるものですから、注意して致すのです。

楓は菊の葉の縫ひ方と異いません、只葉先きの尖りた所だけです、之は其先きまで縫ひました時に、針目をすこし長目にいたしまして、輪廓よりも外に出して縫ふ様にいたしますれば、尖る様に成ります、よく終りの集るやうに致します。

次に菊花の練習です之は木綿糸で致します。是が練習の終りで有りますから、手がすこしてみます、(イ)より初めます、針は内側の方から針を出しまして、はすに針目をして縫ひます、次に(ロ)瓣はやはり内側の細き方より針を出し、はすに針目を致しまして、圖に示して有ります如くに縫ひます、順に縫ひまして、其半分の瓣まで同じ針目のなびきで、縫ひまして針止をし、片側は前の瓣のなびきと、むき合ふ様に致します、之もながく瓣の集らぬもので有ります、針目を長くいたしませんと、集まりにくきものですから、圖に示して有る程に致します、之で木綿糸の最初の練習は終へましたのですから、次は金糸の練習を説明致します。



(つゞく)

冬の話(上)

清水橘村

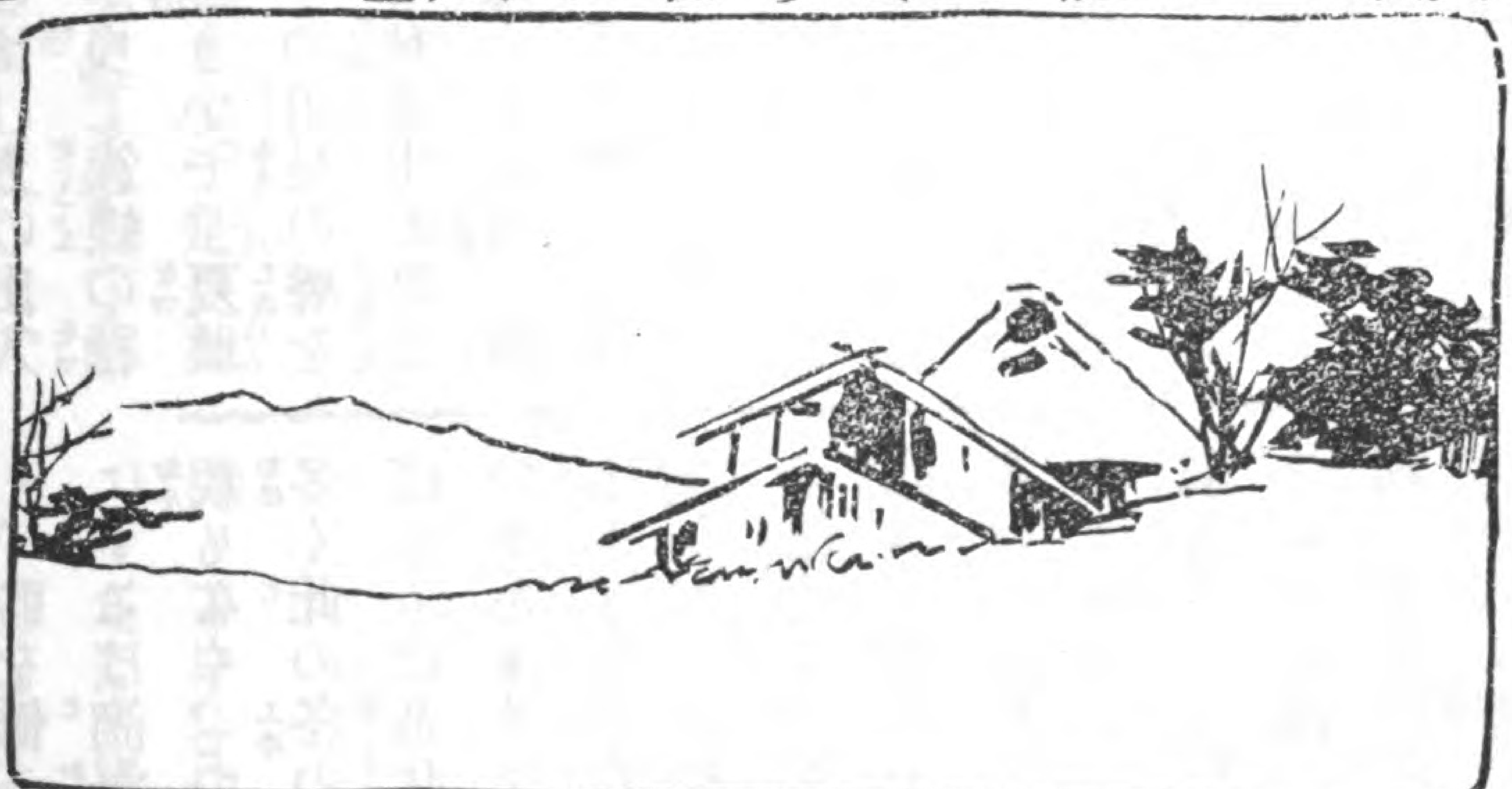
Reflectn, too, may love the hour.
When Nature, hid in Winters grave.
No more expands the bursting bud.
Or bids the floweret bloom.

人間が自然の御親、創造者の寵兒である春夏秋冬の四童子、それは自然の「懐」と云ふもので、人の出入に任してありますから、春は手弱女が曳く簇蝶の袖に縈はりて、天つ日の長閑き野邊に翔りいで、夏は青柳の綠子が戀する時、早苗とる四手の田長の聲を尋ねて、足引の山下蔭を迷ひあるき、秋は牛の鼻繫の淡紅なるを肩にかけたる伯陽女、織りなす衣の旗薄に招かれつ、人待つ蟲の聲を聽き、冬は簫琴を含む落葉の隱にありて、獨り寢の夢より結ぶ曉の霜、四面猛火充塞の地、八方貪慾愚の痴境を出で、白き蓮の糸に引かれて此の懐に迎へられ慈しまれ慰められ喜ばされ樂まされ、かくて神身の和樂を得、斯くて生命の長きを得るもの、蔭ながら造花の御神が、此の春夏秋冬の四童子、野の花草のとり〴〵に生ひ立しむるからで、厥が中にも、金谷の鶯梅に鳴き、淡雪の光紫春霞、若菜摘む日を初とし、青葉のかげ清き月、紅の紅葉の山、此是は山村水郭到る處天の榮光を耀す童子で、人の子の歡呼に迎へられるのに引かへ、獨り嚴冬の童子は、肌を覆ふ衣もなく、頭を飾る花もなく、空吹く寒風に曝されて、枕にするは湖海の氷、衾とするは野山の雪、友も無く親もなく、かくて春の背後に隱れ去るので、人も亦多く此の冬の童子を顧みぬ所から考へて見ると、冬ばかりは造化の神の繼子ではあるまいかと思ひ付たのであります。

去りながら自然の神は、萬有の父にましまして、一匹の虫、一本の草と雖も、何の特性もなくは生ひ立て給はぬ、況て一年を四季に分ちて春夏秋冬の名を賜ひ、其の美妙なる靈筆を揮つて、四の色彩を描きわけ給ふからには、各々平等の慈愛を垂れさせてあるに相違ない、爰に於て冬も全く人間が自然の御親、創造者の寵兒である、温かき「懐」と、吾人の心は元の通りに復つた、けれど人間の歷史あつて以來、我國に於て、花散る木蔭の朧月に夜を明し、一門の浮沈を外に春の日の立ち行くを惜み、或は「今日暮れて明日とだになき春なれば、たゞまく惜き花の蔭

哉」など、詠つた人はあるけれど、未だ曾て暮れゆく冬を惜み、一滴の涙を落した者もなく、野菜酴醾の神撰を供し、神樂を献じて收穫の秋を喜ぶ民は多いけれど、未だ曾て來らんとする冬の日の靜けさを欣ぶ者は無い、是れに依て之れを觀る時は、冬は造化の神の繼子たらずとも、確に人界の繼子であつて、今迄冬は冷然として迎へられ、悄然として去らしめ、春夏秋の三童子の如く歡呼聲裡に限りなき快樂を重ねて、愛し愛され而して歸り行くが如き平和なものでは無いので、冬ほど悲慘な生活を送る童子は無いのであります。

人には斯く繼子扱ひに爲れるけれど、然し造物主なる大神は、決して冬一つを別物にして置く譯では無いので、見給へ、冬の寂寥たる天然の中に、一種云ふに謂はれ



ぬ美なる現象が潜むで居るではないか、今又此れを仔細に檢點すると、多大の美觀が明白に現はるゝにもかゝはらず、我東洋の詩人は未だこの冬の美觀を發顯し賞讃し崇敬して居ない、唯支那邊りの淋しい光景は、常に朔北征戍の戰士を聯想せしめて、玆に些なからぬ詩篇を爲して居るばかり、吾人が知れる限りに於て、冬の美觀なり何なり、冬其の物を詠じた唐詩は、まづ見當らないで、手近い所で「雪淨胡天牧馬還。月明羌笛戍樓間。借問梅花何處落。風吹一夜滿關山。」など云ふもの許りで、我國近代の歌人などは、特に厭世的觀念を以て此光景に對し、悲觀的眼光を以て此の景象を詠じたから、千種一態、一も冬の與ふる感興に乘じて大なる自然の聲を爲したものもなければ、素

より深く考察したものもないので、譬へば「三吉野の山の白雪ふみわけて、入りにし人の言信もせぬ」など云ふ抒情に傾けるもの丶み多く、眞に冬を愛して冬の生命を捕へ得たるものはない。其處へいつては十七字の詩人である、豐富なる詩腸と透徹なる詩眼を持て、卑近なる事物より幾多の趣味ある材料を得來り、山川秀麗の氣に觸れて茲に錦繍の句をなし、或は抒景に自然の眞髓を探り、或は抒情に人間の心靈を窺ひ、新らしく且つ寂ある詞藻を以て、冬の自然の內部を視、繪にもものせん好個の品題を吟じては、各々冬の童子の面影を傳へて居る處、甚だ吾人の意を得て居る。

木枯やなにに世渡る家五軒（蕪村）
からびたる三井の仁王や冬木立（其角）
冬田刈る夕ぐれ人の一人哉（曉臺）
山は晴雨大根引くべく野はなりぬ（也有）

など少なからぬ詩篇を殘されたので、之れが爲め吾人は深き興味を覺えて、和歌に對する不滿心をや丶鎭め得たのであります。

猶冬に對する觀察こそが自然の研究の歩を進めんとするに先ち、爰に一言辯じたいのは、冬に於ける天文地理の現象である、それも全體に渡りて中々一二回の紙上の能く盡す所でないから、今は只その特殊なものばかりを擧げて、冬の現象の奇且つ美なる所をお目に掛けやうと思ふので——扨て四季の據て分る丶地球の公轉の事などは省略して——冬至の十二月廿一日になると、太陽は南緯二十三度半なる冬至線上に直射する、此日東京市に於て太陽を望む時は、地平上僅かに三十二度になるばかりだから、來射する光は斜めに投影は廣く、日熱は甚だ薄く、加ふるに晝間最も短かく、朝は六時四十九分に太陽が出て、夕は四時三分に暮れて了ふ、實に晝間は九時四十二分間なるに反し、夜間は十四時十分間有る、若し又地極圈內に至ると全く日光を見ることが出來なくなつて了ふ時がある、すると夜が長く續くのです。

魯西亞北部の北光環は、美觀として世界に名高い

のも、全く冬の日の遠くなる所から起る現象で、グリウランドは又有名な寒地である、此所は北アメリカの東北に位し、内地には山岳もあるけれど、又寂寥たる大氷源、白皚々たる天上地下、色もなく聲も無く、宛然月世界の高山上に佇立した樣な淋しい處であるから、未だ此土地が一大島であるか、それとも又氷で連續して居る一島彙であるか、判然と搜索を遂げてない、で土地は雪や氷を以て深く被ひ隱されて氣候が極寒なものだから、樹木や草蔬などは一本も生せず、唯最う眞白な中に、エスキモーの矮人種が、氷で作つた圓い小屋に住つて居るばかりで、此の世界に日の昇るのは、一年中極く僅かな月で、内地の三十日間位暗夜で居る時もある。

西比利亞の内地や、魯西亞のラプランド邊りへ這入ると、酷烈な大寒地であるから河の在る所は河の底まで氷つて了つて、所謂氷河を造つて了ひ、水のある所は見上る許りの大氷山を造つて、在來の高嶺でもあるかの樣に聳え、會さかにくる探險隊などの船舶が、其の氷山の爲め閉ぢ込められて船は破壞し、數十人の精靈は、氷雪の上を漂泊ふ樣なのもある、此の近傍に住む所の人種は、二重三重の毛衣で身體の全部を包み、馴鹿に橇を曳かせて氷の上を往來してゐる、此邊には又白熊が澤山居る、毛の白いのはこれ雪氷の白色に感化されたのです。（つゞく）

だいところ

女子美術學校教師　石井湧太郎

一椀　輪切り玉子
　　　さいまきゑび
　　　めうと柚子

一中皿　生鮭玉子たゝき
　　　　あんず砂糖煮

◎椀の仕立方

△其第一、玉子を撰びて、温湯の中に入れ、竹箸を以て始終そろ〳〵と搔き廻す、此の如くして凡そ

二十分以上に及べば、玉子は充分は煮拔く事を得るのである、又箸を以て掻きまはすと云ふは黄丸を眞中に置く爲めなのである、煮拔きの熟不熟を見るには先づ二十分を過ぎて後ち（尤も餘り茹湯の沸騰せざる樣注意すべし）金の目杓子にて掬ひあげ鍋の外邊に持ち出でゝ見るべし、玉子の水氣直ちに蒸發し去れば、其の充分なる事を得たるものなり、之れを冷水の中に浸し置きてなるべく冷えたる時を見て殼を剝き、小口より二三分の厚さに輪切りとなし、食鹽を少し振りかけ置くべし。

△其第二、鞘卷海老、之れは刀の鞘を卷きたるに似たりとて鞘卷と云ふ、芝海老の少しく大なるものにて車海老より小なるものなり、先づ煮立ちたる湯の中に少の鹽を入れ、海老は其の頭をもぎて此の中に入る（鹽湯にて茹るは海老の赤色を增す爲なり）五分間程にして全く赤色となりたる時一度水に取りて洗ひ、皮を剝くべし然して脊より半分にわり脊わたを拔きて用ふるなり。

△其第三、芽獨活、長さ五分位に切り皮を剝き、水に浸して後ち、之れをざつと茹でゝよし。

右を終りて椀のつゆを仕立つべし、割合は水五合を沸し削り鰹八匁を入れ上部に浮びたる泡を去りて、直ちに火より鍋を下し（此の間一二分間）尙また二分間程其のまゝになし鰹節の沈靜したる時、絹篩にて漉すものなり、而して此の五合の煎汁に醬油二勺味りん一勺五夕（一勺は凡そ盃猪口に八分目）食鹽一とつまみ程を入れ、一度よく煮立て置き、扨て前三品の中、うどに海老を皿に取りて此の出來上りたるつゆを入れて浸して後ち椀に盛り合すべし、盛り方は輪切り玉子二ッ海老一つうど五ッ或は七個位にてもよろし、柚子は一番終りに入れる方よろし、へぎ柚子、松葉柚子、結び柚子、等何にてもよろし。

◎生鮭玉子たゝきの仕方

生鮭四半身程を取りて皮を去り、骨をよく取りて、其の身を細かに刻み、出刃庖丁の脊の方にてたゝき、半分以上たゝきたる時、食鹽六匁砂とう八匁程を入

れてよく煉り合せ、然して後ち、玉子の黄味ばかり六七個を加へ、尚よく混じ置き、扨て蒸籠にぬれ布巾を敷きて此の中に右の玉子にて、たたきたる鮭を入れ、厚さ一寸或は一寸五分位に置きて蒸すべし、其の時間大凡三十分間以上充分蒸し上りたる時は、之れを取り出し、少時風に當て冷えたる時、布巾を取り去るべし、切り方は好に依りて自由なり、此れは味よろしく且つ手輕に爲し得らるゝものなり。

◎あんず砂糖煮

西洋のほしあんずを用ふるがよろし、先づあんず二合を使とすれば之れを水に浸し置く事二十分ばかり、柔らかになりたる時煮立たる湯の中に入れて茹る事四分間程之れを火より卸して、其の湯の内に浸し置く事尚二十分ばかり、後ち此の湯をしぼりて砂糖二十匁、味淋三勺、水四勺を加へ文火にかけて煮汁の詰るまで煮込み、火よりおろし、其のまゝ蓋をなして蒸らす事十分間程にして皿に盛り口取物、鉢肴、中皿物などの附合に用ふ。

◎今の料理

△茶碗盛　澄し汁の拵方は日外も精しく述べたる様に覺ゆるが只澄し汁のみにては興味薄ければ昨今松茸の旬を利用して其を茶碗盛に拵へる手順を説明すべし先づ鰹節を微温湯に浸けタワシにて能く擦り洗淨めたるを布巾にて能く拭き上皮を削り去り中身の赤味を鋭利なる鉋にて削き水一升を煮立てたる中へ四十匁を投じ蓋をせずして一度沸立たせ泡を除り鍋を卸して布にて漉す（右一番）又其煮殻を鍋に入れ水三四合を加へ再び以上の如くして汁を作る（右二番）是れにて適宜に鹽加减をなし斯くて汁は出來上るなり偖實はサヨリ松茸海老芹など宜しくサヨリはサンマイに卸して雑と鹽茹にす松茸は洗ひて鹽水に浸けるを宜しく車海老は茹てゝ水に冷し屢々水を取替へて全く冷えたる時皮を剝き竪に半分に割りて背腸を除き芹を茹て水に移してアクを出し絞りて好き程に切る而して材料整頓したる時實を茶碗に盛て汁を注ぐなり

雑録

水戸の婦人（二）

東臺小隱

義公夫人の靈慧

御簾中樣常に、都の鴨川の水と違ひ此方の水は惡く硯水に甚だこまり給ふと度々の給ひける、義公樣是を聞召あまり御口才なる事に思召加茂川の水を御取寄遊ばされ侍女に命じ給ひ常の水の如くにもてなし進せられけるに、夫人墨をすり給ひながら甚だ怪みて侍女に、此水は何國の水なるや、常の水に違ひたる樣なりと尋ね給ひけれ共、侍女矢張いつも指上候水に候と申上ける、夫人筆を執て書給ひ扨々不思議なり都加茂川の水に少も替りなしと宣ひける侍女しか〳〵の由申上ければ義公樣御感心淺からず夫人に角々語り給ひ、甚だ感ぜしと御稱美遊ばされけるとかや。

夫人名は尋子泰姬君と稱す近衞關白左大臣藤原信尋(應山)公の御女なり、承應三年四月御婚禮、萬治元年十二月廿三日御掩粧御年二十三歲、哀文夫人と謚し茨城郡吉田山に葬り延寶五年久慈郡瑞龍山に改葬す、御生前の美事善行枚擧に遑まあらずと云。

河野甚九郎の母

寶永四年五月十九日常光寺口御番、河野甚九郎鈴木宇太夫平戸淺衞門當番の時、甚九郎吾屋敷の茄子苗の花開きたる由語りしに宇太夫聞て、何方もいまだ開かざるに、それは虛言ならんと言ければ少しく諍言に及びしかども、御塲處柄と云平戸彼是なだめける故さまでの事もなく廿日明番にて歸りけり、河野つく〲考ふるに堪忍すべき事にあらずと思ひ、

途中より宇太夫が宅に至り對面して、昨日の事何れにも捨置難し覺悟せられよと言ふ、宇太夫言葉和らかずに答へける故、忽ち拔合せ戰ひしが宇太夫討負て即死す、かゝる所へ宇太夫の子林之衞門朝稽古より歸り、此有樣を見て驚きあわてゝ拔付しに鴨居に切付、ひまある所を甚九郎是も切殺して立歸り、老母にしか〳〵の由語り、身分如何いたすべしと尋ぬるに老母答へて、喧嘩はしのきといへば立逃ても苦しからず、然れども朋友を返り討に迄せし事なれば潔く公聞に達し切腹すべしと示敎せし故、則ち申出御下知を相待ける、同月廿八日甚九郎居宅にて切腹せしむ、檢使は御持頭中澤次郎太夫、御目付加藤傳十郎、御徒目付高久彥太夫下兩役なり、御馬廻り組頭櫻井與八幷に甚九郎姉聟渡邊與次衞門も坐に列す、庭にて切腹介錯は甚九郎願にて從弟河野五左衞門(御弓師)なりとかや、平戶も等閑の取扱御咎にて閉門仰付られけり云々。

茄子の花より喧嘩の花咲きてあたら武士三人命を隕す愚と謂はんも餘りあり、抑〳〵不慮の變事に遭ふて周章狼狽するは婦人の常なるに、甚九郎の老母、其子の大事を聞くも更に驚ける樣なく一に義によつて處斷し、其死生の如きは毫も意とする所なし、世に稀れなる女丈夫と謂ふべし、此の母にはして此の子あるを見れば賢母必ず良子ありとの說拘泥し難きに似たり、

戀の爲めに死す

世子恭伯君至極美麗なる御生れ付にて其頃天下第一と稱し奉れりとかや、御登城の時御駕籠の中にて風の御髮を吹き白雪の如き御顏へちら〳〵かゝりける御樣子わけてうつくしかりしと、斯く美麗無双なりければ御登城などの節は江戶中の老若男女我も〳〵と近づき拜しけるとかや、或日御登城の時町人の女年十六七許にて容貌衣服美麗なるが戀慕の思ひに堪かねけるが御駕籠へ飛掛る、近侍の人亂心の取扱にて其親に渡しけるに、彼女其日より狂氣の如くになり食を進むれども更に食せす、世子の御事を思ひ

煩ひ、死する覺悟せし樣子なれば兩親不便に思ひ、娘の願ひなればとて、奥の方へ便りを求めて世子の御手にふれ給ひし物を下し賜らん事を竊に願ひけり是に依て侍女の計ひにて御下着の御襦袢を下し賜ひけり、彼女御襦袢を喰さきながら死たりとかや。

恭伯公子は水戸藩第三代綱條公(諡肅公)の御嫡子御諱は吉孚、元祿十年六月大將軍綱吉公の御養女八重姫君(實は鷹司大納言有隣軒殿の御女なり)と御婚禮、未だ御相續に至らず寶永六年十二月御逝去、瑞龍山に葬りて恭伯と謚し奉る、天質餘りに麗はしかりしかば戀慕ひ參らせし幾多の婦女の生靈の祟り抔と當時噂せしとかや、上下の階級嚴重なる當時、素町人の女の身を以て四位の中將なる三家の若殿を戀するとは至極大膽の致方ながら、生命を犧牲として慕ひ參らせたる心根を憐れに思召され御下着は賜りしならむ、斯る仁慈の君の短命なりしこと天道は果して是耶非耶。

妻の爲めに家を亡す

天和三年八月十三日穂坂八郎衛門夫婦死刑に處せらる、此者祿八百石大番頭格にて執政なり。此時は實子なき者他人の子を養て嗣とする事を禁せらる、八郎衛門子なき故在番の留主に妻女、下女穩婆等とひそかに議して大野村下屋敷の民の妻孕みたるものにはかり、出產の時自ら產するやうに產所をとりつくろい、ひそかに彼の兒を引取、八郎衛門にも飛脚を以て是を告て大に喜び生育せしに、三四年過ぎ奴婢の言よりその事漏れ、御吟味ありて其事あらはれければ檢使を以て、八郎衛門事重き御役をも勤むる者なれば定めて覺悟あるべしとの命ありて自ら切腹せり、妻は由緒に御あづけ御仕置なり、右にかゝわりたる者までも刑に處せらる。

哲婦城を傾くと云ひ、女さかしふして牛賣り損ふと云ふ、是皆小才氣ある女子のさし出事に害あるを戒めたる金言にして穂坂の妻の如きは其甚しきものか、此の文意によれば夫たる八郎衛門は何事も知らで唯妻女の一了簡より大事を惹起せるも

の丶如し、女のいらざる猿智惠の爲めに夫には耻辱の詰腹を切らせ、名家を斷絶せしむ、入郎衛門が最期の無念は如何計りなりけむと思ひ遣られて哀れなり。

小兒の樂園（つゞき）

紅綠生

此で斷つて置きますが、箱は蓋をしてあるのです、鍵でもなければ又た其んな錠などではありません、黄金の紐が大層混亂れて括た結び目であります、此の結目は全然終りも端もないのです、澤山の糸の中に潜つたり出たりして糸口が無いのですから、如何な上手な人でも此を釋く事が出來ない樣に出來てるのです、其れが却つて又た珍らしく見えるので御花に如何樣工合で此んなになつてるのだらうかと檢査する氣を起さしたのです、御花は二三度箱の上に屆んで拇指と人差指の間で結目を持て見ました、併し其れを釋く爲めでもなかつたのです。

御花は獨りで言ひました、

『妾は實に如何な風に結んであるかゞ了解つて來た樣に思はれます、其れを釋いても後に元の通りにする事も出來ませう、そうしても惡い事は無いでせう、確かに、太郎は私を責めないでせう、妾は箱は開けません、妾はあの沒分曉の子に斷はりなしに開ける事が出來ません、縱令此の結目が釋けても』

御花に若しも他の仕事があつて其の氣を紛らすことが出來るとか又は只だ此の箱ばかりに夢中になつて居りませんでしたらば大層に宜しかつたのです、けれども「苦惱」は未だ世界になかつた時には小兒等は安樂に暮らして居ましたから、餘り暇があり過ぎました、彼等は何時でも花の森に隱れん坊をしたり、目の上に花環を當てゝ盲ごつこをしたり、又た外のいろ〳〵な遊戲ばかりをして居るとは出來ません、只だ遊戲ばかりが仕事である時には、勞働も實の遊

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縱六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選抜し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿園著

歴史小説 **山崎合戰**

菊判洋裝

定價卅九錢
郵税四錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰是れ我神州空前絶後の英雄豊臣秀吉があらん限りの智惠と力とを振ひし花も實もある大戰爭なり。之を例の戰鬪小説に獨特の妙ある塚原澁柿先生が江戸紫の粹且高尚にして押出よく、色も艶も古今獨歩の彩筆を執て叙述されたるものなれば、猿面重瞳の羽柴筑前、虎頷猥顧の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演するが如く、雲漠々、雷殷々、砲火閃き劍光迸る、舞臺一轉すれば衣冠束帶の豊臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大德寺燒香場の活動寫眞。

幸田露伴編

四季物語

袖珍總クロース頗る美本

定價金五拾五錢　郵税金四錢

柳浪氏の鏡のうらは春曉鶯を聽き、素影氏の歸省は夏雲奇峯多く、煙村氏の傑作は秋風索寞鶴伴氏の初陣は雪華繽紛たるに似たり、編者露伴子題していふ、これは不老門中の春夏秋冬なれば、見る人心ゆたかに欣賞し玉へかしと、以て本書の内容如何を知るべし。製本亦美麗にして殆んど珠玉の如し、机上の粧飾として燦然光彩を發するを見ん。

塚原澁柿園著

小牧合戰

菊判洋裝美本全一冊

定價五拾五錢　郵税拾錢

堀内新泉著

家庭小説 **女樂師**

菊判洋裝

定價卅五錢
郵税六錢

一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤繩を結び、音樂の効により陰鬱柔濡なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむと云ふ趣向斬新の家庭小説にして春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫婦一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭教育を裨益することと疑ひなし。

發行所　東京々橋區築地二丁目　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

主筆 三宅青軒

文華

毎月一回 一日發行

第壹卷第拾參號 十一月一日發行 定價二十錢 郵税二錢

此文華なる一大文學雜誌は曩者に文藝倶樂部の主筆たりし三宅青軒氏の創刊せしものにして、詩、小説、演壇、社會、譚叢、藝苑、奇談、風俗、勝地、墳墓詞藻、時報等の各欄を有し、卷を開けば百花妍を爭ふの觀あり。

◉奇談には△迷の火の玉△天狗岩△怪物屋敷△瀧の澤怪談△狢のおばけ△お萬が井△髮の血◎名勝には△鎌倉山の秋色△華藏寺山△奈良の名勝◎風俗には△京都の消防夫△尻捻り地藏祭△毘沙門天祭△アイヌ人△東豫の方言△伊勢崎の花柳◎東京の墓

半年分七冊 前金郵税共一圓四十二錢 一年分十四冊二圓七十八錢

東京 文泉館發行

材料は總て當代第一流の名家に囑して、其鏤心刻意と成れる美文を選み、裝飾は、亦是れ當代美術の精粹を極めて、誠に千紫萬紅の一大樂園、夢ならずして華胥の國に遊ばんとするものは、請ふ此雜誌を讀め。

發賣元 東京築地二丁目 株式會社 國光社 電話 特新 新橋 八六二 八九三

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

●新刊●

佐藤天風編

クレヲパトラ

四六判洋裝美本定價廿五錢郵稅四錢

嫣笑一番英雄シーザーを擒にし啼涙百行豪傑アントニーに殉したる彼女が埃及王國の爲に婦人の武器を揮うて擒縱殺活縱橫自在の働きを記したる本書敍事の雄大且つ悲哀なる何人も興懷を催ふさゞるを得ざる也

大町文學士著
常磐御前
全一冊　四六倍判三ツ切　定價十三錢郵稅二錢

國府犀東著
靜御前
全一冊　四六倍判三ツ切　定價十三錢郵稅二錢

長田偶得著
顏世御前
全一冊　四六倍判三ツ切　定價十三錢郵稅二錢

小林文學士著
勾當內侍
全一冊　四六倍判三ツ切　定價十三錢郵稅二錢

濱田文學士著
袈裟御前
全一冊　四六判三ツ切　定價十三錢郵稅二錢

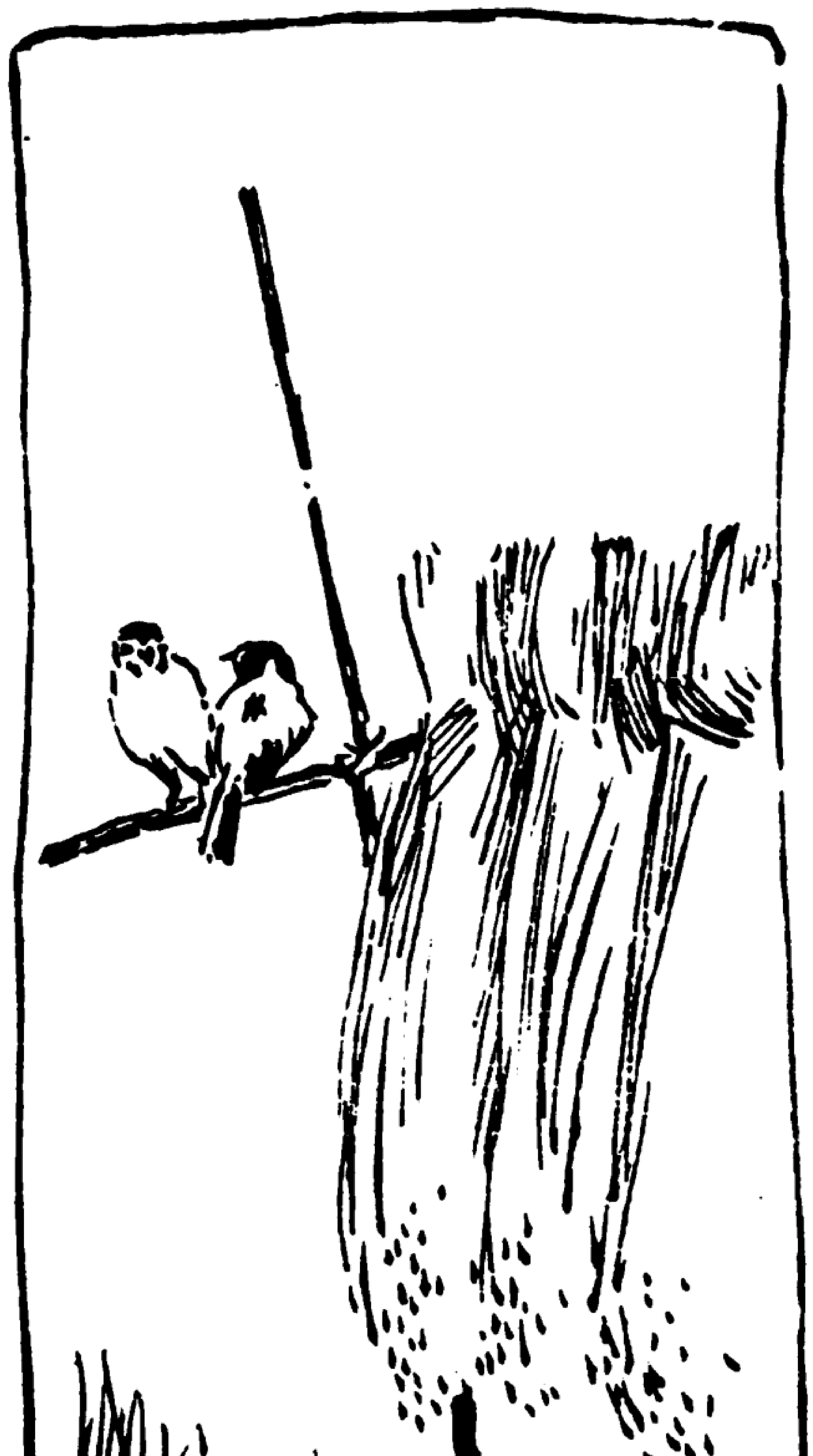
女鑑編輯局編纂
ひめかゞみ
全一冊　菊判洋裝　定價廿五錢郵稅四錢

梅澤和軒著
清少納言と紫式部
全一冊　四六判洋裝　定價卅五錢　郵稅六錢

發行所　東京京橋區築地　株式會社　國光社

戯です、其の勞働と云つても小屋を少し掃いたり叩いたりするとと、何處にでも澤山に咲いてる花を集めて花瓶に挿す位ゐのものです。

憫れなるお花の一日の仕事は其れで御仕舞です、そして其他の時間は只だ箱の事です、どうしても此箱はお花の爲めには爲めになる物でありません、何故といへば此箱が來てからお花は其計りを考へて閒人があれば其話ばかりをして居るからです、お花は機嫌のよろしい時には箱の周圍の美くしい艶と其の樣に書いてある人の顏や小枝を賞めて居ますが心持の惡い時には其れを推しやつたり小さい足で蹴たりするのです、大變に澤山蹴るのです、併し此の惡戯な箱が蹴られても仕方がない理由があります、其



れは追々にわかつて來ませう、又若しも箱の爲でなければ私共の此の活潑なお花さんは迚も此んなに根強く時を潰す樣な事は爲やしまい、其れは箱の中に何が入つてあるかを想像る事は限りのない用事であつたからです、何でせうか、何だらうか、一寸考へて御覽なさい諸君、諸君は若しも室の中に大きな箱があつて其れを諸君がクリスマスか又は御正月の贈物として何か美くしい新らしいものが入つてあると思ひなさる理由があるなら、諸君はどんなでせう、諸君はお花よりも不思議がらないと思ひますか若しも箱丈けあつて誰も居ませんでしたら蓋を少し開けて見たいと思はないでせうか、諸君は決して其んなことを爲さらないでせう、けれども此中に乾度

玩弄具が入つてるのだと思つたらモウ矢も楯も溜らない程見たくはなりませんか、著者はお花が玩弄具を當てにしたか如何だか知りません、何故ならば此時分は世界が其時の小兒の大きな玩弄具であつたのですから別に玩弄具なんて無かつたのです、只だお花は何か大層に美くしい貴といものが入つてあると信じて居たのです、ですからお花は著者の御友達の御孃さん達の樣に一寸一目でも見たいと思つたのでした、イヤ一目では少ないかも知りませんが二目か三目位ゐの處でせう、どうですか著者も確に請合はれません。

此の得難い日、お花の好奇心は毎もよりも大きくなりました、とうとお花は箱に近づいて出來るなら開けやうと決心しました、實に愚かなお花です、先づ最初に箱を持ち上げやうとしました隨分重いので瘠せぎすのお花には迚も駄目でした、併しどうやら箱の片方丈けが少し持ち上がつた樣でしたがお花は直きに手を放してしまひました、けたゝましい音をさせて落しました、すると直ぐに箱の中で何かがさがさ動く音がした樣に思はれましたそして又た何か呟く聲がする樣にも思はれたのです、是は只だお花の耳が鳴つたのか或は心臟の鼓動であつたか此の子には何か眞實に聞いたのか聞かなかつたのか決める事が出來なかつたのです、けれども何方にしてお花の好奇の心は前よりも強くなりました、お花がオヤと思つて頭を引きました時に黄金の紐の結目が留まりました、此の結目は大層巧妙く結んでありました。

『どんなに上手に結んでも妾は釋けると思ひます、妾はせめて結び目の兩端丈けでも見付けませう』

とお花は言ひながら黄金の結目を取りました、そして出來る丈け早く釋かうと引張りました、此時は殆んど夢中になつて居ますからお花は自分で何をしてるかも知らない程に氣が忙しくあります、丁度此時輝いたる日光が窓から射し込んで來ました其れと同時に遠くの方で遊んで居る小兒等の樂しい聲が聞えました、此の聲の中に太郎の聲も混つてるのでせう

お花は耳を欹てゝ聞かうとしました、此日は何と美くしい日でしたらう、若もお花が此んな無益い結目を其儘にして置て箱の事なんか考へずに外へ飛んで出て小さい良い御友達と遊んで居つたら眞實にモッと御怜悧ものでありませんか、併し此の時はお花の指は心も空に結目に忙しかつたのです、そして此の不思議な箱の蓋の上に花で圍かれた顏を見ると、此顏はお花に頷く樣に見えて何か樣子ありげに思はれました。

『妾が惡い事をしてるもんだから妾を笑つてるのでせう妾はもう逃げて行つてしまひせう』

とお花は考へました、併し丁度其時に全く不意の出來事の樣に、お花が紐を一寸推した時に大變な事がありました、黃金の紐は魔法使にでも釋かれた樣にバラ〳〵と自然に釋て結目も何もなくなりました、

『妾は此んな不思議な事を見た事はありません、之を見ましたら太郎は何と言ひませう、妾は元の樣に結んで置きませう』

《つゞく》

日比谷公園の菊

笠木鷲里

秋やうやく老いんとして、昨日まで色香競ひし花野のけしきも、降るや夜毎の露霜に、果敢なや見るかげもなく荒れわたり行く淋しさ哀れさ。誰をか招く尾花の袖も、寸斷〳〵に破れ、仇めき立ちし女郞花も嬌顏何時しか移ろひて、露の床に伏し沈み、あるは萩桔梗苅萱なんど、いづれも老ひさらぼひて、人も世もみな落寞を感ずる今日此頃、金光燦爛として野分にやれし賤が垣根、虫の音弱る野の草叢に、四邊の塵を拂ひて、超然と淸香高く咲き出で、瓊葩玉英、秋の天地を我が物顏なる菊の花の姿形こそ、げに言ひ知らず床しくめでたきものなれ。況てや內外幾十種の聚芳姸を爭ふ日比谷公園の菊花壇そも如何ばかりぞや、

公園の正門を潜つて右に、色つき初めし雜木林の下道を、うすら寒き風に吹かれ、回り〳〵て辿り行け

ば、東の隅、心字の池のかたへ、平坦なる地を占めたる菊花壇に出でむ、抑も此花壇は菊のみを聚收せしにはあらで、あらゆる内外の花卉、幾百種を植付けて春と云はず秋といはず、四季折々花のかげ絶えざらんことを勉めたれば花壇も廣く、其の配置も栽付けも、遺憾なく、面白くぞ眺めらる。くるめて構造を云へば、幾何學的の花壇なり、即ち二重の正方形を畫き、内側の方形の四隅を切り



去り、八角形となし、中央に圓形を入れたるものにして、何方の邊に佇立むも、一瞥すれば一齊に花の姿の集まり來らん樣に築きなせるなり。而して中央圓形の蘇鐵樹を回つて、八角に切りなされたる芝生の

椽に沿ひ道を通じて、其の外正方形を以つて、花卉の壇に充て、植ゑ付けも意を用ゐ、丈低きものより、順々高きに及ぼし、隱るゝ花の無からしめんとせり。菊はげに二段目の位置を占めて、凡そ三四十種の黄菊白菊、さては野菊外つ國のもの、數を盡して幾千株となく正しく列べられたる其の眺め、えこそ筆には盡されね。

今ぞ菊の花盛り、小春日和の暖かく、天澄みわたり風清き、此のころの好時節、諸孃子よ、あたら深窓の下に垂れこめて、徒らに有耶無耶の裡一日を過さんより、心おきなき學びの友をそゝのかし、或は弟妹老幼を携へて、雪駄ちやら〳〵靴音輕く、袖袂を連ねて、新公園の新花壇、あらたに咲ける菊の花を行て訪ひ給へかし。其處に詩あり、歌あり、文あり又繪あり。

靜に想ひやれ。心字の池の噴水高く白霧を吹きわけ殘壘の松の蒼龍、低く池面に垂るゝ壯嚴なる景を右に見て、壇の正面より幾萬となく咲きの盛りの花の清容に接しなば、浮香天地をこめて仙境に入るが如く、此の隱君子の高潔温雅なる風丰、そゞろ人を動かして、置く露を打ち拂らふにも千代は經ぬらんと咏じけむ、古詩人は愚か、我れも何時しか、人の世の愛をわすれて、塵界を脱したる心地やせむずらん。訪ひ給へよ諸孃子、「此花開盡更無花」。實や菊は其年の花の見收めにて百花の殿なるぞかし。

寸鐵物語（つゞき）

阿多廣介

◎婚姻は人間一生の運命の決する所なれば、最も愼重なるを要す、從來の緣談を考ふるに第一兩親の撰擇に一任せられたるものと、第二兩親が本人の同意を求めたるものと、第三本人の自由に任じたるものと、第四本人が兩親の承諾を得たるものとの、四形式に歸するものゝ如し。

◎前四形式の内容に付ては、種々の事情あるべけれ

ど、第一形式によるものは、相方の家格と財産と本人の性格とを主とし、本人の愛情の如きは、次ぎにせるもの丶如し、故に往々夫婦和熟を缺きて、離婚となることあり、第二形式によるものは、第一形式に基き、本人の同意を求むる譯けなれども、多くは一面識のなきものをして所謂る見合ひをなさしめ單に容貌と動作位を瞥見して、決定するものなれば、互に性情を知悉せず、爲に第一形式と同一決果に終ることあり。

◎第三形式は、本人が互ひに相知り相親みて婚姻したるものなれば、一時愛情の滿足はなし得べしと雖も往々兩親と親戚との和熟を缺きて、離婚することあるのみならず、多くは年少血氣の過ちとして、單に色情に基きたるものなれば、後年に至り、互ひに缺點を覺り、終ひに後悔して離婚することあり、第四形式は第三形式に基き、更に兩親も同意したるものなれば、夫婦相和するは勿論、一家親睦する譯けにて、婚姻の尤も完全なるものなり。

◎我邦婚姻法は上流のものは第二の形式を取り、下流のものは第四の形式に據るもの丶如しと雖も、多くは形式のみにして、兩親の壓制によるか、若くは本人の强請に由るもの多し、是れ離婚者の多き原因なり。

◎儒敎主義にては、第一若くは第二形式を斷行するものにて、殊に女子に對しては嚴峻なる制裁を加へ二夫に見へずなどの敎へあることなれば割合に離婚者少けれども、本人一生の不幸之れより甚しきは無かるべし。

◎西洋にては、主に第三若くは第四の形式を取ると雖ども、兩親を疎んずるの傾きありて、一家の和睦は到底出來難き譯けなり、從て夫婦あれども、兩親なきの決果で終るべし。

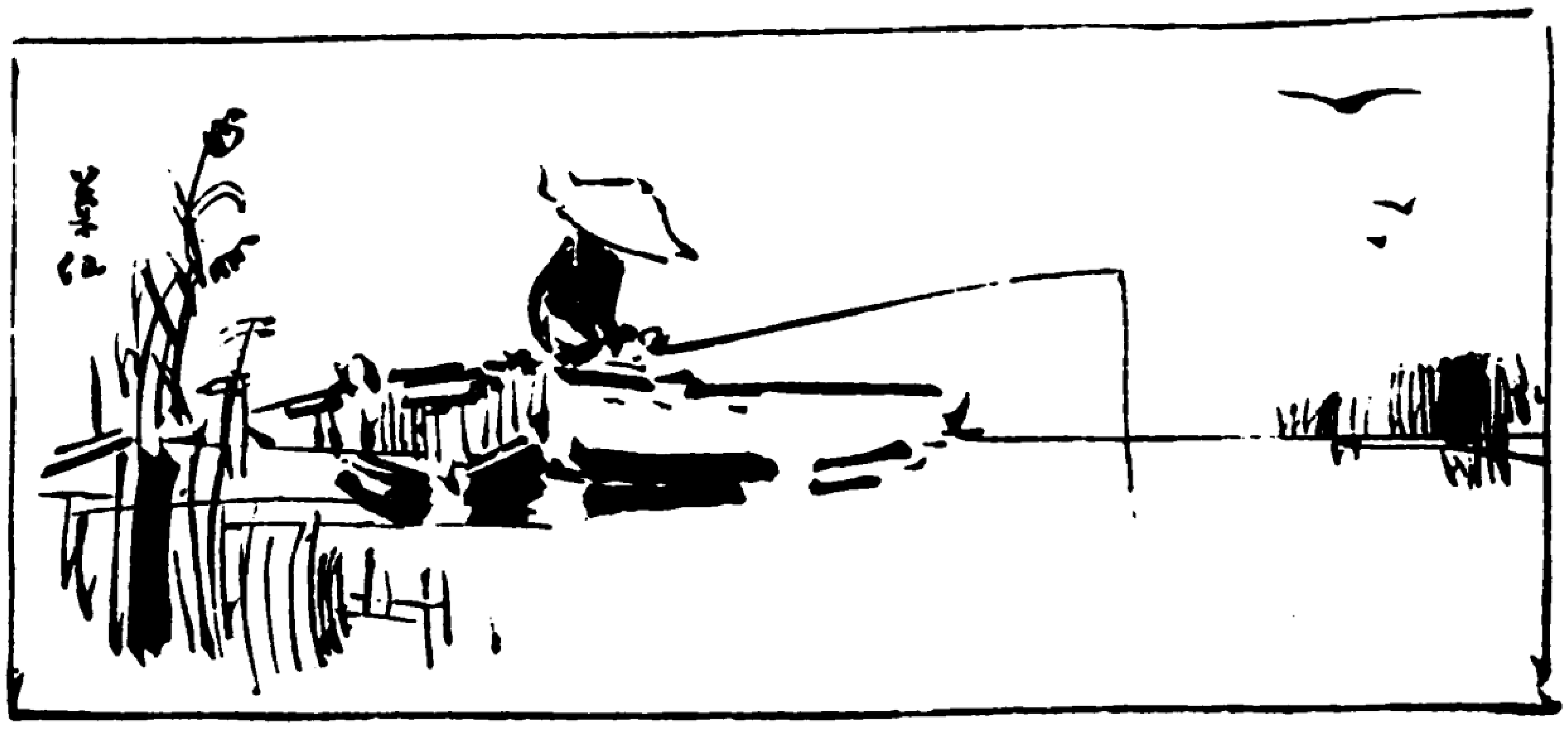
◎親子孝慈の道を蹈み、夫婦和合の理を盡さんとせば、婚姻法に最も注意せざるべからず。

◎婚姻法の最良法は前述第四形式にありと雖も、今日の我邦の男女交際は、餘りに冷淡に過ぎ、且つ年

頃の男女子の交際は危險なりとして、擯斥さるゝのみならず實際に又危險なり、されば我國人は到底最良の婚姻をなすを得ざるものなるか、父母は勿論教育家の如き、大に研究せざるべからざる問題なり。

◎夫婦和合せざるの原因は、其の他にも少からず、例へば男女の教育程度の大に隔絶すると、交際法の大に異るが如し、則ち今日の女子の教育は淺薄にして交際法は餘りに迂鈍なるが故に、婦は夫の理想を迎ふること能はず、從て夫は家にありて、妻女と共に樂むを欲せずして、讀書するにも、他に閑靜の居を撰んとし、友に交るにも、料理屋か待合かに於てして、甚しきは賤業婦をして、妻女のことを司らしむるに至れり。

◎飲食は人間の一大私欲なり、而かも朝夕侍する所



の妻女は、夫の口欲に適するの料理をなすことを得ず、音樂は人間高尚の欲望なり、而かも同棲の妻女は、夫の滿足する音曲を奏するを得ず交際は人間生活の最大事なり、而かも今日の妻女は、夫の友人に對して、愉快の興味を與ふるを得ず、爲めに今日の婦人は皆な其權力と、愛情とを賤業婦に奪ひ去らる。

◎今日の男子の欲望と興味とは餘りに野卑にして又不經濟なり、之れを矯正し、之れを改良するは、男子當然に勉めせざるべからざることなれども、妻女たるものも、大に自ら省み、己れの特權を恢復せざるべからず、徒らに爭ふときは、却て嫉妬心として排斥せらるゝ譯けなれば、大に修養する所なかるべからず、女子教育に從事するものも、亦注意せざるべからざることなり。

女子大學の運動會

浪滄生

目白に立てる女子大學は、去る月二十四日、秋季運動會を催されぬ、此日は秋空拭ふが如く霽れ、風も起らざれば、小春の天候今日に過ぐる者なしと思はるゝに。前日來の振込と華々しかりしためにあらん。近頃珍らしき人氣立ち、午前十時前後には早くも三千の來客を數へ午後は五千三十八人の多きに達しぬ。今當日擧行せられし三十二番の中より、重立たるを左に紹介せん。

一　軍樂隊

運動場の入口に、一分隊ほどの軍樂隊あり。午前八時に及ぶや、彼等は、一切に劉喨たる音を高めて賑々しく開場を報ず。この時、美しく衣て活潑なる同校生徒は、思ひ切つたる歩調にて運動場に現はれ來りたるは、心地克く見られき。

三　白妙　（和蘭遊戯）

同じ色のハンカチーフを以て、動作毎に、喜怒哀樂の情を示す。

國文科の生徒五十有餘人正々として動作したれども、泣くことのみに成功したりと沙汰せらる。他は未だ一入の研究を要すめり。

八　御給仕　（日本新式）

盆と拭布を持ちて、御給仕の動作を遊戯的に爲すこれも前と同じく五十人斗りの一組なりしが、只其高等女學校第二年といふ人達丈にあどけなく、一樣にリボンを飜々させ、楓の如き手を揃へて、桃色の拭布を懷中より取出して盆を拭く眞似。甚だ愛らし。

十一　案山子競走　（女子大學特有松井文學士考案）

十人宛四組に分れ、各組一人の案山子を携へ、日章旗を持つたる一人は本組を離れて立ち、先づ各本組より其案山子を其旗手の側に据へ、これより弓矢などを持たするに何れか早きかを競走す。

國文科の生徒四組に分れて、赤白黄紫、一生懸命

に競走す。一番早く成功し丶赤組の最後の一人が誤つて、日章旗の竿を引倒したるなど、反つて益々滿場の喝采に波を打たせぬ。

十二　にんぶ（希臘式）

女神に使ふ故事を採つて、拵へたる遊戯、前半部で筋肉を緊張し、後半部で之を融解す

英文學科の生徒四十餘人珊珊として歩を進めて出で、天を仰ぐときは、天女の御空に祈るが如く手を連ねて一方に傾くときは、あわや今に福音の其手に落つるにも似たり、之を演じ丶者の巧拙は兎も角も其趣向甚だ氣高し。殊に理想を追ふ裏若き婦人方には最とも氣受可く、其處此處に喝采湧き返へりぬ。

十三　輪抜競走（白井教師の立案）

二組に分れて、長竿を以て道を造り、其中央に輪を置き、雙方の組より、一人宛馳つて、其前方の旗を採る。

高等女學校の生徒二十人斗りにて演じ、甚だ面白かりしも、場内の笑聲餘りに高くして、何が何やら分らざりし。

十四　辰宿列張（米國式）

赤白の布を以て、揺歩に由つて現れ、巧みに兩方に開展して遊戯す。

大學普通豫科の生徒五十餘人にて美しく行列し、揺歩の動作に先づ喝采を得て現はれ、運動半ばに及ぶや、六人宛組合ひて星を爲す、此處なか〳〵の上出來なりし。

十六　容儀體操（デルサート式）

亞米利加に流行するもの、辯士、俳優などは是非に稽固し置くものにて、舞踏の初歩。

大學部の生徒二十四名、白妙の洋裝に、白蝶のリボンを髪に付、悠々乎として、練出し、群衆の目も綾に打守る間、彼等一同は軟かに體を反らして天を仰ぎ、これより、幾多の變化を經て最後に二人宛一組になりて、調子克く引退きぬ。物珍らしき遊戯なり。

十九　長竿體操（佛國式）

佛國に流行し。八尺斗りの長竿を四人宛にて持ち

力の平均を試む。
高等女學校の生徒東西に分れて爲し、可なりに出來ぬ。されとも、動作に變化尠なかりき。

廿二　球竿體操　（英國式）

二人宛球竿を有つて、現はれて動作す、今回始めて之を女子大學にて試む。
大學豫科生四十名餘にて爲したるが、始めての遊戲丈に一寸珍らしきものなりき。

廿七　あまぞん　（羅馬式）

羅馬古代の勇婦、アマゾンの戰鬪したる有樣を眞似たるものにて、專ら歐米各國に流行す。
高等女學校の生徒百餘人、嬋娟たる姿容に、十字の襷に、白の後鉢卷を締め、殊に未だ十四五の無邪氣なる方過半なりしため、凡ての動作、甚だ快濶に、運動は終始弓を射、石を抛げ、刀を振翳す眞似にて、滿場の觀客、皆拍手し、當日第一等の遊戲と賞しぬ。

廿九　花賣　（佛國式）

佛京子女の喜ぶもの奢侈の傾きあれども、都雅なるを以て稱せらる。
高等女學校五年生徒四十餘名、一樣に菊花の籠を頭上に頂きて、種々に都雅なる手踊を爲す所、宛として都踊りの活潑なるに似たりき。

三十　自轉車　（マーチゲーム）

八本の竹竿を、場の中央に立て十名斗りの運動手が、自轉車にて、其間を螺旋的に馳け違ひ、其間各自赤黃白の土蜘蛛を其竿に抛り掛るものなり。
土蜘蛛（二百條の條を集めたるもの）材料は能狂言に使用して、高價なるもの、一回に五六圓はかゝるとなん。
高等女學大學二科の生徒十名にて、自轉車動作は普通の出來なりしが、其土蜘蛛を吐き出す如くして抛り棄てゝ竹竿にかけたる樣はなか／＼に壯觀を極め何れも喝采を湧した。
尙演せられざる虹霓舞の如きは、甚だ立派なる遊戲なれども、差閊ありて。來年に繰延ばしたり。遊戲の過半は、和洋折衷したるもの多し、否らざれば國情に伴はざるの嫌あればなりと。

米國婚姻事情

在米 澁谷馬頭

ミッセス、グラッツ問

馬頭近頃取調事項がありまして、暫くミッセス、グラッスの家に寓して居ります。此家で餘程面白い事を見出しましたが、何れ取まとめて皆樣へ御披露申す考で御坐います。私、國許に妻子がないとも云ひ聞かせませんでしたけれども、口髯を奇麗に剃り落して今年取つてやつと二十五歳だと申して居ましたので或日ミッセスからをかしい問を受けました。それは『若し君が米國婦人と結婚する場合には先づ母上の承諾を得なければなりませぬか』と申しますのです。私『勿論の事です』と答へました。ミッセス又問ひますには『支那では金錢を以て女子を買ひ取つて妻にすると云ふ事ですが、日本でも左樣ですか』と申ました。私『それは途方もない事です。日本ではそんな事はちつとも有ません』と答へました。尚は色々それに就いての話を致しました。

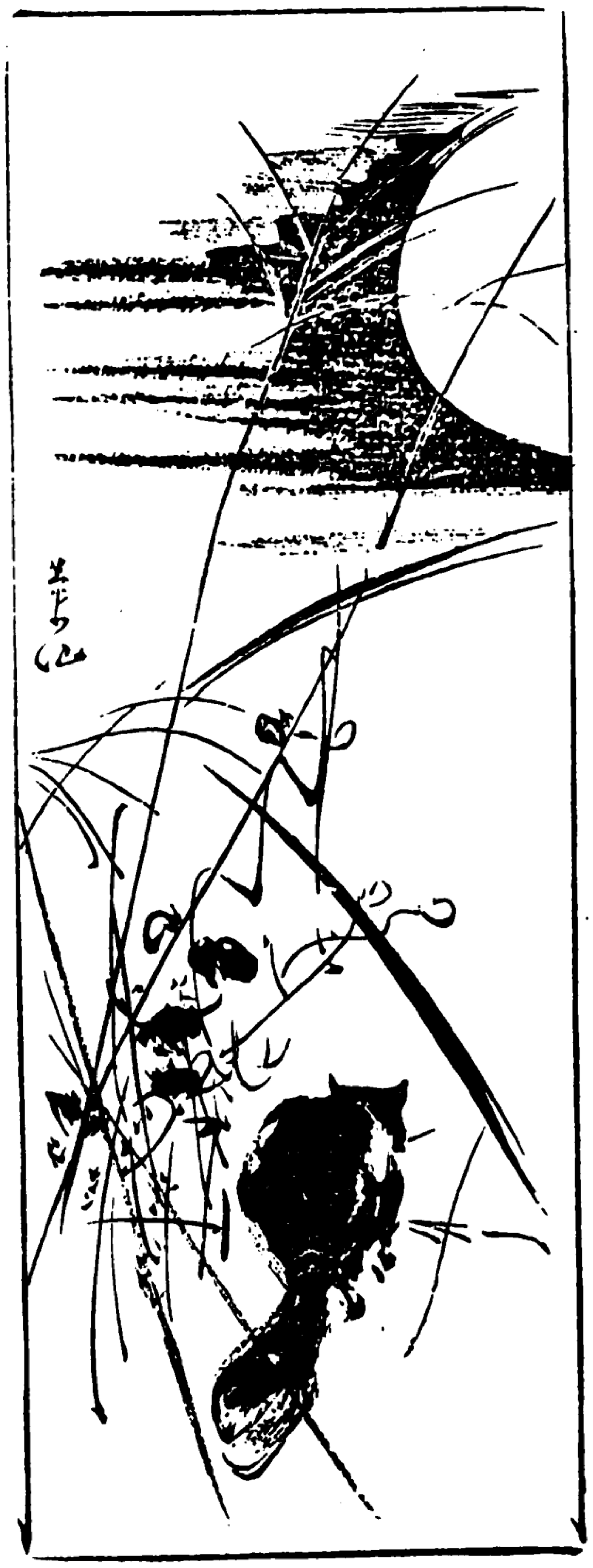
米國女子を妻にして居る日本人

それは隨分有りませうが、此シヤトル近邊では私が知つて居る所では五六人しかありません。奥田某、松浦某、大工某、某、某等ですが、其中には妙な夫婦があります。或る家族へ下男として住み込んだ日本人が、其主人アラスカへ行つて歸つて來ないので、下男が主人に直つたと云ふのがあります。どうも高嶺さんの奥さんの樣な立派な方はめつたに日本人の手に入らないやうです。

支那人の妻になつて居る米國女子

これは大へん多う御坐います。私の新聞社の隣家の支那人も米國女子を妻にして、料理屋をやらせて居ます。米國の政事家は國會議事堂に立つて滔々と支那人入國拒絶の演説をします。併し米國の女子は江

戸兒よりも南京さんを好きます。それはまたどうした譯でせうかと尋ねまするに、南京さんの男ぶりがいゝと云ふ樣な野卑な好みをするのでは有ません。誠に神聖な戀であります。即ち米國人一般に一日に三度づゝ禮拜する此上もない尊い所の『金』と云ふ者を支那人が澤山ポッケットに持つて居ますので大に支那人が難有がられますのです。支那人は自身の國で金錢で妻を買ふばかしではなく、米國へ來ても金錢で米國女子を買つて妻にしますのです。



支那人に買はれる女など一寸聞えは惡いやうですが中以下の女は嫁に行く仕度の爲めにこそ苦勞して居るのです。それが爲めに婚期がおくれて、あッたら花ざかりを機械場の隅にくすぶつて過すやうの次第です。それが支那人に買はれて妻となりますればいゝ衣服を着て、馬車にも乘られ、遊山にも出られ、芝居も見られ、樂して甘い物食へると云ふわけですから誠に仕合せと云はなければなりませぬ。支那人との間にばかし金錢上の婚姻をするのですかと申しますと米國人同士の婚姻も大抵十の八九まで金錢が出雲の神さまの代理をするので御座います。公園に若い男女の散歩のついでに、共同椅子が取もつ緣かいなで、初めて出會した其の一時間に肝膽相照して、戻り路に寺院へ立寄つて、最早夫婦になりま

すとは誠とに慾氣のない、奇麗な、あつさりした婚姻のやうに見えますが實は、『私はいくらの金、いくらの地所を持つて居ますが』と云ふが話の眞先に立つのが通例で御座います。婚姻するに母上の指圖を受ける必要も御座いませんですべて自由で、自身の理想通りの人と夫婦になる事が出來るのですから其撰みまする所を見ますれば其人の理想が高いか卑いかわかります。米國女子の理想はどこに有るので御座いませうか。とにかく私どもの考へて居ます所の

　江戸兒肌の、意氣の

なんど云ふ事は米國女子の心を引くに足らぬのみか却つて野暮の其又野暮でございますと云ふ事を心得て居なければなりませぬ。

　『一金』

と申しますのは日本に於ても近頃左樣に成つて參りましたと聞きますが、それでも日本の婚姻は母上なり兄弟親類なりが相談に加はつて成立ちますから離れる時には何のかんのと六かしい關係が起きますやうです。米國では萬事一身の自由ですから、結婚するにも早いかはりに離婚するにも早いのです。離婚の數の多い事は實に驚くばかりです。其離婚が裁判所の判事の手を以て決定されます、其件數は、每日新聞に出ますがシヤトル裁判所區内ばかりで日としてない日がない位です。先年、

　離婚周旋株式會社

と云ふ者が米國に設立されて有ると云ふ事を、私は佛國の雜誌の中に見出しまして、地方の或る新聞紙上に抄譯して載せた事がありました其時はマサカに其樣な事はあるまい、佛人の戯談でせうとは思つて居ましたが、今日實地此地に來て見まして成程と思ひあたる所がありますのです。さて米國婦人の惡口ばかり申上げず一つ在米日本人の狀態も御耳に入れませう。

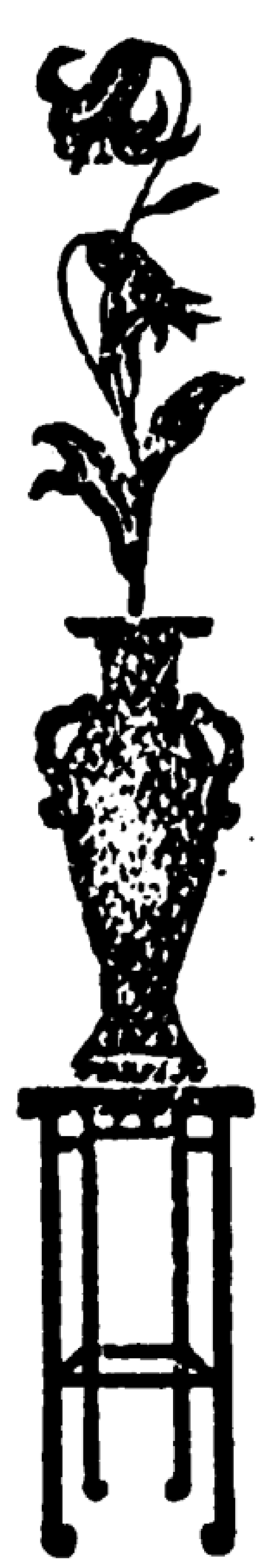
　支那人は妻を買ひ、日本人は妻を賣る

のでございます。此地で日本人同士出來合夫婦になつた者も澤山ありますけれども、中には遙々と國許

から妻を呼び寄せた者もあります。其妻をば賣ると云ひました所でとく御分りになりますまい。ハッキリ申上ますれば其妻にきたない商賣をさせるのです其夫を此地ではピンプと號して居ます。ピンプの數は中々多いのです。其樣な不義理不人情不都合な事をやつて居るピンプと云ふ者が、此地では金を持つて、よい身なりをして、紳士仲間に入つて、威張つて居るのです。こんな事を此地では聲高に批議する事が出來ません。立派な紳士でマサカピンプなどではおるまいと思はれる人が、後に他からピンプであると聞いてビックリする事がありますから滅多な事をシャべられません。惡口上手の馬頭も此地では口を閉ぢて居ます。昔の人は思ふ事ある時には地に穴を穿ちて云ひ入れましたもんだと、世繼の翁が書いて置きましたが、馬頭は國許への通信に、不平の一端を洩らします。もとより『かいやり棄つべき』者なれば沒書籠に投げ入れられましたとて、聊も編輯記者に怨みなしでございます。

妻を賣つた金を學資にして高等學校へ入學

すると云ふ學問熱心のピンプも御坐います。此ピンプは熊本縣の者で、私が來米の時に其ピンプ夫婦と同船して來ましたのです。可愛さうにあの若いおかみさんは、賣られて居るのです。其夫は此九月の學年の始めから、知らぬ顏で當地のハイスクールに入學致しました。日本入學生間で此件に就いて紛擾が持ち上りましたが、まだ決着つきません。其うちに學校へ知れましたら、此上ない不體裁です。誠に寒心の至りです。まだこんな事ならいくらも申上る事がありますけれども、いゝ加減にして切上げませう。





小説

月影

卜部観象軒

鐘音に秋の夜風一入冷たく覺ゆるので、夏ならばまだ人通り盛である九時少し過ぎに、もう寂然として人影少なく、軒を並べた下宿屋の二階で、時々どつと笑聲のするのが、一ト際耳立つて聞ゆる程物靜な湯嶋天神町の通を、とある横丁から出て天神の方へ向つて行く十三四の下女風の女がある。

氣早の人は新調の袷を着る頃とて、單衣に羽織は普通の樣、殊に夜であるのに、一寸使に出たとも見えぬながら、身に着けたは單衣一枚、それも極めて身窄らしい形で、髮も一週間も前に結つたまゝかと思はれる程亂れて居る。

折しも天神の方から、十一二の美しい女の兒を間にして、何やら話してはさも樂げに笑ひつゝ來る立派な夫婦連の人達があつた。以前の娘は、近寄るにつれ此有樣を認めて、さも羨まし相に見やつて居たが、擦

達ふ際ふわりとえならぬ香のするに、殆ど魂を奪はれたかの如く、恍惚として彼の三人の後姿を見送つて立つて居たが、彼の人達はそれとは知らず、やはり面白相に話し合つては一歩々々遠ざかつて行き、二間、三間、五間、七間、はては十間以上も隔たつて、其姿も殆ど見えない樣になつたので、娘も初めて心付いたやうに歩み出したが、太息をついて、

『あゝ、眞實に羨ましいわ。私は何故此樣に不幸だらう。お父樣はもう死亡つたから仕方がないけれど、眞實のお母樣には幼少い時別れて顏さへ知らず、今は東京に居ると云ふことを聞いたから、飛立つやうに嬉しく思つて、やう〳〵の事で來て見れば、何處に居るか少しも當はありやしない。東京を斯んな廣い所とは知らずに、たゞ行きさへすれば分るだらう逢はれるだらうと思つて來たのは私の考違ひであつたが、それかと云つて、村の者だつて何處に居ると確には知らないから詮方はないけれど、旦那も搜して下さると云ふのに、心當りも無い處を見ると、ことによると居ないのか知ら、若し居ないとしたら私如何せう、國へ歸つたつてあんな繼母の側には厭だし、さうかと云つて他に行く所はなし、今の旦那の所も隨分厭な家だし、あゝ、如何したら好いだらう。』と呟きながら、思案に餘つてか時々立止つては、又頭を垂れて徐々と歩き出したが、蝸牛の歩も侮れない如く、身は何時か天神の敷石の上へ運ばれて居つた。が、左や右とまだ物思ひを續けながら御手洗の邊まで來て、不圖人の居るに我に返りて見ると、一人の女が敷石の上を行きつ戻りつ、熱心にお百度を踏んで居るのであつた。常には行還の人散歩の人など可成り居る此境内も、今はいと物淋しい上に、目前に斯ういふ人を見ては、何となく凄く感ぜられて、邪魔にならないやうにと敷石の外へ寄り、如何いふ願で斯かる事を爲るのかと思ふと、身に餘る思を抱いて居る自身のつまされて、便ない悲しい心が起ると共に、不知不識足は神前に進み、手は自と拍手をうち、首は自叩頭い

て『何卒お母樣に逢はせて下されませ。』と、幾度となく繰返して祈ると、少し落着いて、幾分か頼みあるやうに覺え、以前よりも心丈夫になつたので、步を轉じて女坂の方へ行かうとすると、何時の間にか彼の女も自分と並んで何か一心に祈つて居つたから、俄に薄氣味惡く感じて、足疾に女坂の下り口にある瓦斯燈の方へ進むと、如何した機會か、樹の根に跌いて、ハッと思ふ間もなく、したゝかに地上へ倒れた。流石泣聲は立てないが、痛さを耐へて起上らうとすると、後から抱起して吳る者がある。誰だらうと見ると、以前にお百度を蹈み、後に何時か自分の傍へ來て拜んで居た彼の女であるので、身に寒さを覺ゆる程怖く、如何されるかと思つて居ると、

『何處も怪我はしませんか。』と、優しい言葉をかけられたから少し心が落着いて、

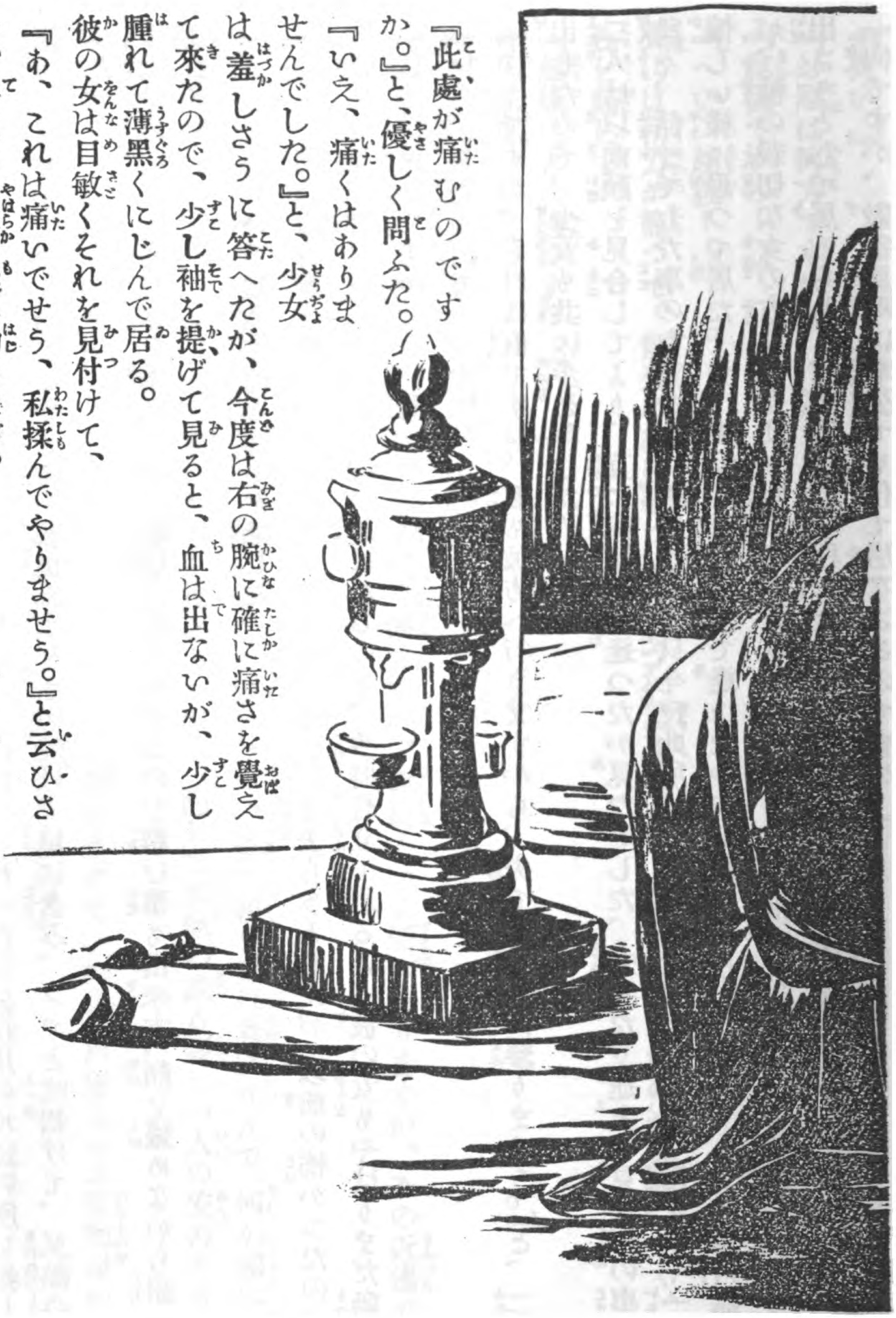
『いえ、別に……』と、自分でもよくは知らず斯く云つたが、額の痛むやうなのに、そつと手を當てゝ見ると、彼の女は、

『どれ、其處が？。』と、我手で少女の手を退けながら、其額をつく〴〵見た。

十八日頃の月はもう其處にある木の梢を離れて淸く下界を照して居り、傍には目映い程きら〴〵と瓦斯燈が輝いてるので、其處らは晝も及ばない位明るく、疵はおろか塵の付いてるのも見逃さない程である。で、少女も初めて其女の顏を見ると、三十五六の年恰好で、色も白く、目鼻立も美しく、顏は艶々して、眼の中に優しい光を含んで、可懷しく覺ゆる上に、繪で見たのか、逢つた事があるのか、そこは分らぬが、何所かで見た事のある人のやうに朧氣に思はれるので、一層可懷しく、しげ〳〵と其顏を見詰めて、前に何處で見たかを想出さうとして居ると、彼の女も自分と同じ考でも持つて居るらしく、一入可懷しい樣な、面して又疑のある樣な樣子であつたが、額には撲つたらしい處もないので、



『此處が痛むのですか。』と、優しく問ふた。
『いえ、痛くはありませんでした。』と、少女は羞しさうに答へたが、今度は右の腕に確に痛さを覺えて來たので、少し袖を提げて見ると、血は出ないが、少し腫れて薄黑くにじんで居る。
彼の女は目敏くそれを見付けて、
『あ、これは痛いでせう、私揉んでやりませう。』と云ひさま、手はもう柔に揉み初めたが、



『一寸、あの、彼處迄いらつじやい。』と、男坂の上に設けられて在る公衆用の水道の所を指して、其所へ伴ひ、自分の子でも撫恤るやうに、敏捷く水を手に受け、口に含み、フッと吹掛けて、又熱心に揉んでやつた。

少女は以前より倘痛さを増したが、親切に仕て呉れるのを辭む事も出來ず、顏を顰めながら耐へて居ると、頓て、

『もう大抵宜いでせう?』と、手を離した。

『えゝ、どうも有難う御座います。』と、娘は禮を述べて立去らうとしたが、以前の怖かつたのに引替へて、今は何となく別れるのが惜しい樣に思はれるので、少時佇立で居ると、彼の女もやはりまだ動かないで、

『お宅は遠いですか。』と、問ひかけた。

『いえ、數寄屋町で……』

『さうですか、それは直ですね。私も彼方へ行きますから、夫では一緒に參りませう。』と、二歩三歩步み出したので、少女も共に步を移した。

二人は以前顏を見合してより、互に何所かで逢つたか見たかした、夫もたゞ途上で見た位の事ではなく、段々、話までした事のあるやうに思はれて、只今夜此所で知り合つた間にしては、何となく一倍戀しく可懷しい樣に思つて居た。で、少女は只管何處で逢つたか夫を想出さうとばかりして、兎角無言勝であるが、彼の親切な女の方は、やはり想出さうとはして居るもの丶、世馴れて居る丈け、話の中から其緒を見出さうとして居るらしく、步みながら種々と少女に對つて話を仕掛けた。

『何ですか、數寄屋町に奉公でも仕て居なさるのですか。』

『えい。』

『お國は何方ですか。』

『越後ですの！。』

『へい、越後？。』

聲には稍力が籠つて、幾分か緒に近づいたやうに思ふと共に、未だ知れないのが懊惱つたく、一層好奇の心を起して、

『越後はどの邊です？。』

『中蒲原です。』

『中蒲原？。』言葉には益々力が入つた。

『私も中蒲原には知つた所がありますが、何ですか、津島といふ所がありますが、あの近邊ですか。』

『私、津島ですわ。』

『えッ、津島？。』

聲は少し驚いたやうな調子を帶び、眼は怪しく輝いたが、急に頭を垂れ考に沈んで、何か頻に求める如く、少時は默つて居た。が、遂に求めあぐんだといふ風で、而して又他の或る親しい人の安否でも氣になつて、早く問ひ訊したいと云ふ風で、餘程急込んで、

『あのう、津島に荒川作造……あゝ、斯う云つては分りますまいが、美戸屋といふ荒物屋が在りまして、其處に丁度貴女位なお作と云ふ娘がありましたが御存じですか。』

『えッ。』

娘は只斯う云つたきり、外に答ふべき言葉も出ない。實に驚いたといふ風で、女の顏を穴のあく程眺めて居る。

夫も道理、荒川作造とは我が無き父、美戸屋とは我が家、お作とは我が名である。で、少時は呆れて居たが、斯くまで詳しく自分の家の事を知つて居るのは、若しや自分の捜すお母樣ではあるまいかと思ふと、急に悲しくなつて、眼はもう涙で一杯、其人の顏も見えず、我知らず近く寄つて聲を顫はせながら、

『私、其のお作ですの！。』

『えッ、貴女……お前……お作、あの、美戸屋の？。』

婦人も實に驚いて、其言葉は語々切迫して居る。で、自分の斯う云つた答に、もう言葉を出し得ないで、涙ながらも首を上げて此方を見ながら點首く娘の顏を、月の光につく〴〵見たが、見れば見る程幼な顏の俤あるを認め、もうお作に相違なく、今迄の疑問の一時に晴ると共に、涙溢れ、ひしと抱き締る外に言葉も出なかつたが、漸くにして、

『お、お作、お前、如何して東京へ來たの！。』

『……………』

『え』

『わ、私、眞實のお母樣を、さ、捜しに來ましたの！。』

『えッ。』

婦人は此樣云つて、耐へ難い程身を悶えて居る。

『わ、私、お、お父樣の、い、生きて居た内は、い、い、厭でも辛抱してましたが、きよ、去年、お、お、

お父樣が死亡つてからは、お、繼母が、ま、毎日〱叱言を言つて、ぶ、打つたり、つ、抓つたり、か、か、か、身體に、き、き、疵の無い時ちやありやしないもの、で、は、眞實のお母樣が、と、と、東京に居ると聞いたから、い、い、行つたら逢はれるだらうと思つて來たら、ど、ど、何處に居るのか、ち、ち、少とも分らないで、わ、わ、私、ど、如何しやうかと思つてました。あ、あ、貴女は、わ、わ、私のお母樣ですか。え、え、……』

『おう〱。わ、わ、私は、じ、自分で、お、お母樣だとも云へない身だが、と、と、歲端も行かない者に、そ、そんな辛い思をさせて……お、お前は嘸、わ、わ、私を、う、う、う、う、怨んで居たらうね。』

『う、怨むなんて私、わ、私や、お、お、お母樣に逢つて、う、う、嬉しい。と、どんなにか、う、嬉しいわ。わ、私や、も、もう、は、は、離れはしない。』

二人は女坂の下から四五段上の少し廣い所にひしと抱合つて、歔欷さつゝ語つて居たが、漸にして互に心を沈め、泪を拂つて、切通下へと出て、とある蕎麥屋へと入つた。で、二階の一番人の居ない樣な處の衝立の陰で、母は其娘に東京へ來てからの事、今居る家の事など色々尋ねると、お作は東京へ來てからは方角も分らず、又何處と當も無いが、諸方所も知らず歩いて居ると、一日兩國とか云ふ所で、一人の四十斗りの男に話しかけられ、其人が捜して呉やうと云はれたので、連れられて今の小那屋といふ半料理屋風の家へ來て、下女のやうに使はれて居るといふ事の一伍一什を話すと、母は其家の事を知つてゝも居るか、悚然としたといふ風で、

『あゝ、私が毎日のやうに天神樣へお參りするのも、お前の爲を祈るばかりであつたが、天神樣の御利益か今日奇遇てほんとに好かつた。もう少とお前が其家に居やうものなら、如何な辛い目に逢はされるか知

れやしない、ほんとに危險い處であつた。』と、歎息して、お作が其理由を聞いても、それには答へず、『是からはもう私が善い樣にして上るから、必心配しないで、今夜から家へお出で！。』と、云つて、お作の喜ぶのを見て滿足な笑を浮べた。

頓て二人は此所を出たが、數寄屋町の方へは曲らうともせず、晴れ渡つた空に笑ふ如く美しく輝いて居る月影に、地上へ横はつて一歩一歩進むに從て移り行く黑影の一つに合つて、二人のとは思はれぬ程ひたと寄り添つて、睦げに鳴連れて來てさツと下りた一群の厂が、安らかに今宵の夢に入るだらうと思はる、不忍の池の方へ歩んで行つた。

（完）

◎今の料理（甘鯛味噌漬）

甘鯛は柔かき魚なれば取扱に注意し鱗、エラ、腸等を除くにも成可徐々として手暴くすべからず下拵へ出來れば全体に鹽を撒り（エラの處と腹部は特に能く撒るべし）少時經て鹽の利きし頃を見計ひ水洗して水氣を去り味噌を味淋に溶かしたる中へ漬け三時間位經て後に屈曲を附けて串を打ち裏表共烈火にて燒くなり裏返す時に串を廻し置き燒上りたる時に板の上に取り串を廻しながら拔くべし一疋附なれば頭附にて体裁好し附合には松蕈の輕燒と生姜位を用ふべし。



エバンジェリン（つゞき）

ロングフェーロー氏作

河越てる子譯

（五）

園生の花は粲めける
朝日に露の湯浴して
誇り出すなる香の清さ

「おさらば我が娘よさまよへる
放蕩息子をば連れ返れ
花婿來る其時に
愚かに眠りし花嫁と」
聖は送りてほゝゑみつ
「おさらば君よ」と少女子は
善きベッシルに導かれ
楽しき望に満たされて
朝日と共に出つるが
日もやう〱に過ゆきて
山郭公しはなけど
戀しき人の影はなく
疲れ〱てアデーヤスの
街の宿に着きしとき
あはれ尋ぬる其人は
一日の前に家を出で
草原さして行つると
おぼつかなくも聞にけり
オザーク山の麓なる

草原深くゲブリエルは
獵人さそひて入つるが
後慕ひ行く少女子は
朝に彼方に立つ烟
それと急げば夕には
殘れる灰の跡ばかり
斯くて迷へる父と娘が
山の麓の谷蔭に
ブラック、ローブが傳道所の
わりとし聞けば疲れたる
心の駒に鞭うちて
行くも甲斐なや「客人よ
おなじ悲しき來し方を
物語りつる其人は
六日の前に爰を出で
獵へと遠く行きつるワ
されど果てなば雁と
共に歸らん秋の日に」

聖の言葉に力得て
翁の少女を殘しおき
家路をさして歸り行く
待てど甲斐なく秋も行き
冬と過して新玉の
年は歸れど歸り來ぬ
戀しき人の音づれを
そよと聞しは夏の日の
日ぐらし來なく夕にて
はるか北なるミンガンの
森林に君は入りつると
知りては一日も急がるゝ
心の腰に帶しめて
長き旅路を追ひ行けば
悲しや又もゲブリエルは
はるかに去りて獵人の
かりくらしたる跡ばかり

いたくも年は過ぎ行きぬ
望に滿ちて少女子が
さまよひ出し其かみを
思へば花は盛りなる
若き春にてありつるを
望は失せて身の光澤
日毎にしのび去りて行く
老の年齢の曙に
いつしか容色はうつろひて
神々しくぞなりまさる

偲ぶも悲しきアカデヤの
昔に似たる國なまり
デラウエル川の岸邊なる
とある街に望なき
足を止めてエバンジェリン
惠の友と幾年を
靜に送りてありつるが

折しも長月夏の頃
狂ふが如き疫病の
果より果まで襲ひ來て
富もへつらふ力なく
強きも防ぐ詮なけん
朝な夕なに人々が
斃るゝ樣のすさまじさ
まして友なく家もなき
貧しき民は彼方なる
廓の外に立てられし
濟貧院におくられて
ものすさまじく果て行く

惠の友と幾末を
心にちかひしエバンジェリン
なつかし人の面影も
死せるが如くに偲ばれて
今は涙も絶え果つ

安息日の朝の事なりき
荒れし街をよこぎりて
濟貧院にと行きつるが
折しもほのかに聞ゆるは
クライスト、チヨルチの鐘の音
身に徹み渡る清けさに
心はとみに靜まりて
「終を告げぬと何者か
ひそかに胸に囁きぬ

光き滿ちてエバンジェリン
やをら内へとさし入れば
昨日見つるは今日無くて
死に行く樣のうたてさよ
熱き口唇したしやり
もたる花の香かゞせつゝ
心靜かに歩みしが
やせにやせたる老人の

寢所の前に佇立むや
アッとばかりに驚きて
「オヽ、ゲブリェル、我夫よ」
聲高らかに呼つれば
あはれ疲れし其人は
聞えやしつる何時しかも
顏に光りのさし添ひて
樂しかりける古昔を
夢に見つゝぞ涙ぐむ

戀しき人の面影を
目には見つれと聲出ず
立んとすれば力なく
悶へに悶ゆるかたはらに
靜に伏してエバンジェリン
熱き頭を抱き上げ
其口唇に接吻すれば
光りはとみにうつろひて

眼は見えずなりにけり
望も恐れも悲みも
なべての迷ひ永久に
晴れ渡りたるエバンジェリン
和らかき胸に命なき
頭を又も推しあてゝ
静かに神に祈りつる
「謝し奉る。オヽ父よ」

（完）

菊池武則

里時雨

つくばねをはなるゝ雲は葛飾の
里にふりゆくしくれなるらん

松上霜

初霜をいたゞくときぞ唐崎の
松はおいきのすがたなりける

池水鳥

一つがひはなちしをしを友として
あまたむれくる池のみづとり

河千鳥

鴨河のかはらのやなぎ霜見えて
寒きあさげにちとりなくなり

霧中雁

笠木鴛里

大そらの月もかくれてたつ霧に
聲のみわたる夜半のかりかね

海邊月

照わたる月のかつらの花かげに
數さへみゆるあまのつりふね

山家月

夕げたく伏家のけふり末はれて
月おもしろしあきのやまさと

教の庭

十一月十五日兼題

正三位子爵黒田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

落葉

天

殘りなくきゝの木の葉やちりぬらむ
にはにきこゆるこからしのかせ
千住町四丁目五十一番地　佐々木八重子

地

あらし山ねくらはなるゝむらとりの
かすにましりてちるこのはかな
秋田縣由利郡本荘町圖書館内　古瀬陸子

人

共立女子職業學校寄宿舍内　八尾いへ子

神なつきしくれせぬ日もわかやまの
木のはのあめのふらぬ日はなし
松山　梯たけ子

甲

このころは風にしくれにさそはれて
のきのもみち葉ちらぬ日そなき
東京　三好珍子

けさみれはにしきのなみもたつ田川
夜半のあらしやはけしかりけん
長野　山本直枝子

あさな〱朝きよめするほともなく
木のはちりしくにはのおもかな
和泉　福原菫子

あかつきのねさめさひしきまきの戸を
たゝくしくれは木の葉なりけり
肥後　徳永多瑠子

木からしにもみち葉ちりて龍田やま
木すゑまはらになりにけるかな
東京　金原玉城子

いか斗りにはにおちはのつもるらむ

よもすからふくこからしのかせ
東京 甲藤若子

吹すさふあらしや木きをはらふらむ
にはにおちはのおとそきこゆる
熊本 田代綾子

すか〳〵にはらひつくせし庭の面に
またもおち葉のつもりけるかな
東京 石川孝子

ちりつもり芝生もみちもわかぬまて
おち葉かさなるにはのおもかな
三河 服部正子

くれていにし秋のかたみとみむものを
しくれにつれてちるもみちかな
名古屋 木下春子

なかむれは吹としもなきあらしさへ
木の葉みたるゝゆふまくれかな
東京 鹽谷とし子

こからしのふくにまかせて庭のおもに
よそのおち葉をあつめてそ見る
東京 山崎文子

ちりてこそ世にはいてけれたに川の
なかれのすゑにうかふもみち葉
東京 大町律子

もみちゝる庭のにしきはつゆしもを
たてぬきにしてかせやおりけん
秋田 小島いわ子

むら鳥のねくらあらそふ羽ふきにも
もろくみたれてちる木の葉かな
東京 下田しげ子

こからしに紅葉ふきまくたにかげは
むくらのやどもにしきなりけり
東京 松内郁子

雨とちる木々のもみちのしからみに
なかれもあへぬたにかはのみつ

乙

こからしにふきみたされてあすかゝは
ふちせもわかすちるこのはかな
秋田 古瀬とよ子

拂はんもこゝろなしとてもみちはを
ちりしくまゝにながめけるかな
長野 岡田千穗子

吹く風にみきはのもみちあとたえて
神戸 玉井かた子

みつのおもこそにしきなりけれ

入相のかれのひゝきはとほく消へて　河内　竹内敬子
ゆふかせさむくもみちちるなり

きのふみしたつた川らのもみちはも　大阪　小山ふさ子
よはふくかせにちりはてにけり

あまてらのいつ本もみちいまは早や　河内　小山橋子
ひとはふたはとちりそめにけり

炭かまのけふりのすゑに日はくれて　東京　川和晴野子
おち葉さひしきやまのしたみち

こからしをうらむも知らて庭の面に　伊豆　佐藤春子
おち葉をひろふをとめ子もかな

小倉やまみれのあらしにさそはれて　東京　山田靜子
もみちふりくるやまかけのさと

大そらはくもりてふれとそてたにも　松山　上原のふ子
木の葉のあめはぬらさゝりけり

ちりつもる山とやならんあさゆふに　東京　河合象子
はらふひとなきにはのもみちは

玉すたれ吹きまくかせにさそはれて　横濱　小泉はる子
つくゑのうへに散るもみちかな

さえわたる月かけなからしくるかと　三河　服部萬子
みれはのきはの木のはちるおと

杣ひとのつゝれにかえしおち葉やま　東京　川瀬たき子
たとゑたもとやにしきなるらん

足ひきのやまへに住めはあめの日も　東京　川村松子
あめならぬ日もふる木の葉かな

村すゝめねくらあらそふゆふかせに　若松　川島謙子
しはしもみちもみたれてそちる

朝ほらけねくらはなるゝむらとりの　攝津　森本みち子
かけにまかひてちる木の葉かな

神無つきふくこからしにもみち葉は　攝津　大岡花子
おちてこけ路のにしきなりけり

むらからすねくらあらそふ梢より　上總　高石とよ子
みたれ〱てちる木の葉かな

木からしによその紅葉もふきよせて　東京　安井京子
おち葉うつもるにはのかよひち

きのふみし紅葉のこすゑあらはれて　東京　安井みし子
にしきをしきぬこけのしたみち

村しくれふるやのゝきにおとはして　東京　安井あや子
もらぬは木々のおち葉なるらん

夜あらしのこゑしつまりて今朝みれは　東京　安井しゆん子
にしきしくなりにはのもみちは

置わたすしもよのつきのかけふけて　東京　岩谷淺子
おちはまとうつこからしのおと

木からしにのき端のはゝそちりはてゝ　東京　山本茂子
たかねのゆきのまとちかくみゆ

こからしに時雨に木々のさまかへて　熊本　日高かず子
きのふもけふもちるもみちかな

有あけのつきにしくるゝこゝちして　大和　栗山たか子
ひとむらふるは木の葉なりけり

ふく風にくもはゝらへとすむつきの　羽後　三浦せつ子
くまとなりつゝちるこのはかな

丙

おもしろき庭のけしきもふゆかれて　東京　松村あさ子
木の間木の間のいとゝさひしき

月夜にもあめやふるかとおとろけは　長崎　岩田春子
今朝見てさとるにはのおちはに

木枯しにちるもみちはのくれなゐに　あれしかきれもときめきにけり　大阪　桝田益子

おく山のおち葉うもれにすむいほは　ひときはたちてあきそかなしき　陸前　前田河千年子

露しもにもろくもおつるもみち葉も　ひとのゆくゑもかくやあらなむ　陸前　前田河千年子

風のふきあつめしもみちを散ひ　とふひともなくとふへくもなし　陸前　前田河みさを子

あふき見る高根のもみち散りそめて　わかころも手はにしきしにけり　東京　山田ふみ子

おく霜にあさひかけさすこすゑより　つゆとこほれてちるこの葉かな　沖縄　仁保しま子

わか門の木々のこすゑもふきあれて　かきあつめてもつもるおち葉を　東京　神戸ろく子

こからしに又ふきみたすもみち葉の　おちはにうつむやまさとのには　東東　神戸壽惠子

入あひのかれのこすゑさへしくれつゝ　ゆふへさひしくちる木の葉かな　東京　積山きやう子

あれはてし庭もちりしくもみち葉に　はるにもましてみことなりけり　横濱　米原琴子

我にはのこけのむしろをもみち葉の　にしきにかせのしきかへてけり　三河　永井さい子

風ことに散るや木のはのかす〳〵に　こゝろくたくるあきのゆふくれ　横須賀　上田雪子

しくれふる頃をわか世とちるもみち　もろきをそらにならひたりけむ　山口　村上操子

秋されはきゝのもみちのちりしきて　にしきおりなすこゝちこそすれ　筑後　鏡山増代子

うき雲はよそにさそひてたかれより　しくれをそめてふるこのはかな　筑後　武田亀子

さそはるゝ風にそむかぬもみちはは　ちれとやはなのをしへたりけむ　筑後　武田外代子

夕されはねくらあらそふむらとりの　羽かぜにもろくちる木のはかな　鳥取　大塚信子

昨日までつゑをとゝめしもみちはの　もろくも散るか今日のしくれに　出雲　藤川春子

いく度かうちはらひてもにはの面は　おち葉つもらぬひまなかりけり　松山　梯京子

はきよせしかひこそなけれまたも吹　かせにみたるゝにはのもみち葉　名古屋　木下鶴子

冬きぬと木々のこつゑはしくれつゝ　にしきにまかふやまのもみちは　下野　山中つぎ子

秋たけてもみち葉もろくなりにけり　こすゑより散るいりあひのかね　神奈川　敷島花子

流れゆくあきをしむらんたつたかは　もみちのにしきかくろしからみ　神奈川　笹子茂子

とくおきて塵をはらひし庭のおもに　またもちりくるきゝのもみち葉　東京　荒井満武子

外やまもよわのあらしにふきちりて　ふみわけかたくおち葉かさなる　東京　荒井幾久子

流れての水もはよとまぬたつたかは　はなかとまかふおつるもみちは　東京　荒井あさ子

庭もせにきゝのこつゑもふきあれて　あめかとおとすおつるこのはよ　東京　荒井こと子

そよ〳〵と吹く秋かせにたゝ知らす　にはの木の葉もちり初めにけり　東京　荒井せい子

まつたかは風にふきちるはなもみち　おつるもをしきたにかはのみつ　東京　荒井はな子

秋の部

流れゆくきよきみつもにおちばして
かくろゝかはのすかたほそたに　東京　荒井幸子

ちりしきろおちはも心ありぬらむ
ふせいそそゆろやまさとのてら　東京　荒井ろく子

うすくこくにしきいろとろもみちはも
かせにさそはれちりにけろかな　東京　荒井千代子

朝なゆふなにははくものもかこちけん
あきかせたちてこのはちろ日は　東京　荒井けい子

しくれかと窓あけみれはふゆかれの
にはにおちゝろこのはなりけり　美濃　稲葉ひさ子

風さむみ夜半の寝さめをおとろかし
おとなふこゑは木の葉なりけり　長野　山本基子

吹きすさむ峰のあらしにはら〳〵と
木のはちりしくやまのしたみち　長野　小泉みつじ子

庭の面はこけのみとりにしきかへて
もみちのにしきうろはしきかな　三河　鵜野久和子

木からしの風にちりしくもみちはに
にはのこけ路はうつもれにけり　三河　本多きさ子

いねかてのよはのあらしの跡みれは
ちりしこのはのやまとなりけり　三河　伊東千代子

ゆきてみぬ高嶺のもみちそめはてゝ
ふもとにみするろ山おろしのかせ　三河　河合ぬひ子

あはれますそらたに寒きゆふくれは
おちは見さへものをこそおもへ　下野　長しま子

はらへともはらへともまた落葉して
おくつきところゆふさひれゆく　三河　秋野みつ子

ふみわけてとふ人もなくあらしやま
うらみかほにもちろもみちかな　宮城　大槻初音子

もみちゝろ小倉にかよふやまかつは　宮城　大槻慶子

[illegible]

さひしくもしくれをさそふ山さとの
みにためしなきにしきゝぬらん　陸前　鈴木千代子

柴ひともふみまよふらんもみちはの
こゑにこほろゝうすもみちかな　宮城　杉田哲子

やまてらの鐘もひゝきて木からしに
ふりかくしたろきそのやまみち　東京　戸塚てつ子

をしと思ふもみちは庭にちりしきぬ
ちろもみち葉のかすそしられぬ　東京　内田きみ子

せめてわか庭にとおもふにそら高く
ふろはしくれとゆめにきゝしか　東京　吾妻とみ子

千早ふろかみなつきとやなりにけん
もみちをさそふかせそつれなき　下野　菅沼せつ子

へやちかきにはの梧桐の吹くかぜに
おちて木の葉のおとのさひしき　下野　菅沼淑子

そよ〳〵と吹やあらしにさそはれて
散りにそめけん文机のうへに　下野　菅沼とく子

ほろ〳〵と紅葉散りしくさま見れは
三つ四つ五つつ散ろ木の葉かな　壬生　岩岡寿子

あらし吹くかた山かけのこすゑより
つゝみのうへそなほしのはろゝ　壬生　岩岡寿子

今朝見れは路もなきまてうつもれて
もろくも散ろか木々のもみち葉　下野　岩岡みと子

なにとなくなかめさひしき夕かせに
紅葉ちりしくにはのおもかな　下野　村田かれ子

ふく風のおともさむけくかみなつき
あはれをそへて木の葉ちろなり　下野　戸田折香子

やむ母のみとりのまゝに小夜ふけて
しくれにましり木の葉ちろなり　東京　白井よし子

おちはきくみそかなしかりける

看經のこゑもとたえてしはのとに　おとさはかしくちる木の葉かな　出雲　岩倉頼子

ふく風に木々の木のはの散りしきて　こすゑまはらになりにけるかな　北見　中川伊代子

しけくちる落葉になれておとはかり　きけはしくれとおもはさりけり　東京　河田いし子

いくたひかこすゑさはかす風ふけは　おちはのあめにおとろきにけり　東京　小杉きよ子

こすゑより袖にたむくろぬさとして　ぬかつくそてにおちはしてけり　東京　小杉うた子

はゝ木とり立いてゝみれは散しきし　おち葉はかせそふきはらひゆく　肥後　佐々有鄰子

はけはまたおなしにしきを織しきぬ　木からしさそふ木々のもみち葉　肥後　佐々小琴子

山さともきよきくもゐをみる夜かな　もみちゝりしきつきそさやけき　肥後　内藤富子

こさめするのきはにちかき夕まくれ　かれもあはれに木の葉散るなり　三河　堀田伊勢子

さら〳〵と時雨にあらておとなふは　かせにみたるゝ木のはなりけり　横須賀　上田雪子

あけかたの寒さも見ねてめつらしく　おちはのうへのけさのはつしも　福井　平田そう子

はら〳〵とおつる木のはの音さえて　ねさめわひしきふゆの夜半かな　横須賀　岩橋花子

ふむもをしむくらのやとの庭なかに　もみちのにしきちりもたゆまぬ　肥後　德永臏子

朝戸出はかよふみちさへなかりけり　よはのあらしに木の葉つもりて　肥後　德永萬壽子

もみち葉の枝にわかれてちりゆけは　のきはにのこるこからしのこゑ　埼玉　前野ふさ子

おもかけをのちにしのへとたつた山　かせにまかせてちるもみちかな　武州　前野壽賀子

ゆふへ〳〵風に木のはをはらはせて　見ゆなるやまはちゝふならまし　埼玉　横田音羽子

やまそひの枯生つゝきのしもとはら　わかるゝみちにちる木のはかな　埼玉　横田やな子

わか山はふゆかれはてゝぬなからに　あさまの御たけ富士もみるかな　埼玉　横田秋子

窓のとにあめかとはかりおもひしは　にはの木の葉の夜たゝちるなり　水戸　酒井壽惠子

けさみれははや紅葉はゝ散りにけり　にはのたきみついろかはるまで　水戸　酒井壽惠子

なにこともおくれかちなる山さとの　おち葉はかりはもみちなからに　鹿兒島　添田あき子

時雨かとふみよみさしてまとの戸を　あくれはにはのおち葉なりけり　鹿兒島　添田みつ子

はれわたる空にはら〳〵ちりにけり　あらしのやまのみねのもみちは　攝津　鹽見文子

時來れはおのすから散るもみち葉を　なとかあらしの吹きさそふらん　攝津　大岡幸子

風ふかぬあさけにちれるもみち葉に　よのまのしものふかさをそしる　攝津　駒井登雄子

木の下にさけくみかはすみやひをか　おもほてりそへちるもみちかな　熊本　田代艷子

折しはのさはしはしはにはらへとも　おちはをのする八瀨のさとひと　東京　岩谷梓子

もすのなく枝よりもみちゝりぬるは　ことりにもにぬ羽かせなるらん　美濃　吉村せむ子

さよあらしふきしつまりて此あさけ
みわのにしきをわかやにそ見る　東京　清水　はろみ子

たかねより間なく紅葉のちるころは
かせもいろあるこゝちこそすれ　東京　篠田　まとか子

秋ふかみ吹く木からしにさそはれて
をしくも散らすにはのもみちは　丹波　大槻　ふさの子

いりあひの鐘はかすかにおもむろに
この葉ちりしくやまもとのさと　東京　山田　秋　子

ふけぬるか峰の夜あらしおとさねて
をりくまとに木の葉をそきく　秋田　和田りつ子

吹くかせに枝あらはにもおちはして
さひしく見ゆるうふすなのもり　東京　山田せん子

やま寺のねよとのかれのひゝきにも
おつる木の葉のおとそさひしき　東京　數島うた子

よもすからちりし紅葉のをしまれて
はゝきもけさは手にたにもせす　東京　戸　木　貞　子

あかさりしこすゑのもみち吹すさふ
ゆふへのかせにちりてゆくかな　香川　大　山　豊　子

風にちるにはの木の葉のおとさへも
みゝにしみぬる夜半のさひしさ　大和　栗山　しゆん子

小夜更けて軒のかけひにおとなふは
しくれにあらて木の葉なりけり　信濃　秋　菊　子

たにかはのみかさまさりぬ吹く風に
ちりしおち葉やせきとゞむらむ　東京　林　環　子

けふもまた峰ふきはらふこからしに
ふもとのさとはもみちふるなり　東京　林　艶　子

いろかへぬ松をあらはにもみちはの
ちりゆくさきはにしきなりけり　東京　椎　野　薫　子

足かきをすくろあらしにさそはれて　東京　椎　野　鋭　子

あらしふく峰のもみちやちりぬらん
あるしをかへてちれるもみちは　東京　椎野ぬき子

ふく風によそのもみちをさそひきて
にしきをかさにかさるたひひと　東京　椎　野　秀　子

はらくと音するかたをなかむれは
みとりのまつもあきそしらるゝ　東京　土田たけ子

さらぬだに寂しきよはをこからしの
かせにおちはのちるにそありける　東京　牛　山　素　子

ちりつもる庭のおちはのしけゝれは
おとにましりてちるもみちかな　東京　牛　山　素　子

あまつ風ふきのまにくちりしきて
とふひとまれになりにけるかな　陸前　佐藤　かほる子

夕ひかけてりそふやまのこのもとに
もみちにうつむもりのしたみち　東京　大　枝　膺　子

はらへともあとより落てこのころは
にしきと見えてもみちちりしく　静岡　竹内みつ子

もみちはもにしきの雨とふりくれは
木のはにはそうつもれにける　東京　山　口　琴　子

山さとはゆきよりさきにみちたえて
かせふくひこそたのしかりけれ　羽後　佐藤かつ子

ましはかるしつの乙女もこのころは
おちはふみ分けとふひともなし　羽後　三　浦　ふ　さ　子

山かつかつゝれのころもうちきても
つちふまぬまておちはしてけり　羽後　三　浦　さ　わ　子

うなゐらか庭のこのはをひろひきて
みちはもみちのにしきふむなり　秋田　古　瀬　惟　子

ちりつもる落葉はらはむきくのはな
はろやふすまのうらおもてなく　東京　比田井　もと子

さきぬとつけしとものこぬまに

まゝならば落葉掻きつゝたか砂の　おいのふう婦をわれやまなはん　羽前　佐藤きよ子

惜まるゝこずゑながらももみ葉の　かぜにともなふさまのをかしき　神奈川　森田はな子

吹わたるおともさひしき木枯しに　ふたつみつちるつたのもみち葉　肥後　仁保基子

庭の面は木ずゑあらはになりにけり　かぜのこゝろにおち葉つもりて　肥後　吉弘周子

ふりくやとさけし木蔭にふりくるは　しくれぬもりのもみちなりけり　肥後　吉弘新子

やまさとのいほの柴戸をおとつるは　夜半のあらしにちるもみちかな　東京　萩原ひさ子

ゆふくれにねぐらあらそふむら鳥の　はかせにちりぬ木々のもみちは　東京　小林とめ子

木からしに木々のもみちの散はてゝ　にしきおりなすたにかはのみづ　廣島　山村ため子

さひしくもいりあひつくる山てらの　かれにさそはれ木のはちるなり　千葉　岡田とき子

ゆふへまて見えぬ月さへ見ゆるかな　にはの木ずゑの木の葉ちりては　東京　石川ゆき子

さよあらし木々の紅葉のちりしきて　にしきしてけりわかにはのおも　東京　平島なほ子

おくやまにましは苅る子の笠のへに　にしきにまかふもみちちりけり　東京　波多野みつ子

野も山もからくれなゐに見ゆるかな　よへのあらしにこのはちりしき　埼玉　池田もゝ子

谷かはのきゝのきなかれにおつる葉は　なかれなかれていつちゆくらん　東京　星野はる子

十一月十五日兼題

華族女學校敎授　井上頼圀先生撰

菊花を贈る文

地

本郷區東片町四丁目下田方　すゞしろ子

小春の空、麗かに晴れ渡りて、こゝの野邊、彼處の山に、只管そゞろありきのせまほしき好時節とはなり侍りぬ。されば二葉の頃より、土かひ遣水怠りなく養ひ育てし庭の黄菊白菊、この程より蕾ふくらかに見えそめたりしが、時雨の後の好日和に、昨日今日俄に綻びそめて、ひま洩る風もいと床しう薫り侍り。葎はふいぶせき庵のつぼ庭に、聊作たるのみなれば、元より浪のよするかと見る程にはあらねど、池の底にもうつしたらむは、さこそをかしからめと、花より先きの身とも知らで、匂ふ限りはなど、ひたすらにあくがれ侍べるを、我ながらあやしうこそ存じ侍れ。御園生にも定めて、天つ星かとあやまたる斗り、美しう作りなし給ふべけれど、こゝなるも唯己が腰折のよすがにのみなしはつるも、花のため

わたらしき心地せらるれば、初咲を先づ一枝露ながら折りて參らす。幸に御文机の友ともなりて、御誘詠もあらせられなば、花もさこそは千代の香のはえあらめと、あつかましくもかくは一筆かきそへ侍りぬ。かしこ。

人

共立女子職業學校寄宿舍　八尾いへ子

伏屋の庭に生ひ出てたれば、何の風情もはべらざれど、よそよりは早う咲きたるをなんよごとをきくの御ためしにとて、一本二本根こじて御らんぜさす、御垣のすそにうつさせ玉ひ、御學びのひま〳〵に、ゆかしき君が御袖をふれ給はゞ、花もさこそは榮ある心地し侍らん。此月の末つ頃なん。とり〳〵匂ひ出づべう、覺え侍れば、御母刀自ゐて、必ずならせ玉はん事をいのり奉る。かしこ。

人

横須賀中里山田方　岩橋花子

時雨に暮るゝ昨日今日、さらぬだにわびしき秋の物うきにと、み空の景色かこたるゝ折柄、如何に過ごせ給ふらん、今日はからずもおやみし晴間見え渡り侍るに、窓おし開き眺むれば、垣根に咲ける菊の花、雨になやみじ風情もなく、いと〳〵清けさに、愛らしさ堪へがたう、下り立ちて手折り侍るに、色も香も中々にいみじく、一人のみながむる事のをしさに、二もと三本參らするになん、露に染み風に色香をさらせども、うつろはぬ花の心の貴さは、實にわらは等が女の道の、かゞみにて、そゞろかへり見られてなん、清く床しき君が文机の下に、朝な夕な眺め給はらば、いとゞうれしくこよなき幸になん、實に類ひなきは菊の花よ、千代のかざしとたゞへられ、かしこきをみなが心ばせともてはやされ、世に時めくも理りなりかし、御いとまもあらせ給はらばとひ給へや、參らせし花の同胞垣根のまゝに見せまゐらするになん。あなかしこ。

優等

出雲　藤川春子

秋ふけて、虫の音もよわりゆく此頃のさびしさ、きみにはいかに暮させ給ふらん日頃聞え侍らざりし罪よしなに許させ玉へかし、さて去年より前栽に土かひし菊のあはれさ、白きは芳野の雪の如く、黄なるは玉川の露にも似て、いと花の美はしきいろ〳〵、今を盛りと咲き香ふ床しさ、獨り眺めてもいと心なきわざなれば、一もと送りまゐらせぬ、あはれ君よ萬代の霜にも枯れぬ此菊を、文よむ窓の友

として、いそしみはげみ玉はゞ、いかに姿もうれしからん、かしこ

和泉　稲原菫子

秋草のあまたあるが中に、いみじうあはれにおぼゆるは、霜にも挽ます、時雨にもうつろはず、冬深くまで咲きのこりて、色香美しき菊の花になんある。さればにや、唐國人の、花の隠逸なるものとめでしも實にことわりなりけり。去年一叢植ゑ置きし前栽の菊、此頃白あるは黄色の、美はしきとり〴〵、薄まじりに咲きいでゝ、かをりさへたゞならねば、獨りながめんは中々に本意ならず、けさしも露ながら三枝四枝手折りて、色をも香をも知る君にと贈りまゐらす、あはれとみそなはせ玉はらば、こよなき幸になん。

下野　戸田折香子

秋もはや、酣を過ぎ候て、露を命の蟲の音も一しほあはれさいやまさりて、庭の面に咲きほこりし、萩桔梗など、あはれ見る影もなくなり侍り、獨り菊の香床しき時と相成り候。扨て老人事、いたく此の花をめで、老後のなぐさみにと、先つ年培養致し候ひし、心づくしの甲斐ありて、こん年は、やれがきの、黄菊白菊におく露の香ひ愛度、人まち顔に今を盛りと咲きいでゝ、朝露もこちたき此の朝或は雪かとばかりうたがはれ、或は黄金の色にまがふ好き眺めを、鹿の音ならでは音づる者もなき奥まりたる伏屋に、只獨りにて徒らに見過さんも、本意なくと存じ居り候まゝ、今日はしも、君の御誕生となむ、いと愛度き吉日と承り候故、色をも香をも知らせ給ふ、君の御あたりにと、今朝しも、千代のかをりのいと、深きをえらびて、限りなき菊の齢にあやかり給はん様にと、有明の月影宿す内に、二枝三枝手折りつゝ、今日の御祝ひの印迄に參らする事になん。例のたくみなる、生花の片端にも加へて、眺めさせ給ひなば、花も如何計か光りを添へ候はんのみか、老人も定めしよろこび申すべき事と存じ候、常にしき島の道に勝れさせ給ふ、君の御事故、何卒御歌一首之につき、御もらし下されまじくや、左候へば姿もいかばかりうれしう侍らんに。かしこ

松内郁子

千々に咲たる草花の降りつゞく秋雨にうつろひ、虫の音もかれはて、日々にさびしさいやまし、木々の梢はうすもみぢして、見る物哀ならぬはなきを、ゆかしくもやれ垣が根に、白菊の香の深く咲いで、さかりの色の清らかに、例なく珍らかなるを、我身と共に、かゝるわびしき山家にくちなんこと、限なういとをしうて、都なる君がもとに參らせなば、親しかりし事など、忍び給ひ、瓶などに物し給ひなば、花のめんぼく此上にこそ、かくもいみじう咲たる物をと、立寄て露深く見處よきを一枝手打てなん。

長野　松澤まつ子

とり〴〵に色をきそひし七草も、此頃の霜にみなしぼれはて候を、唐國人の女郎花と申せしは、げにさる事にて、まがきが下の菊のみ、操をまもりて、朝にはつゆをやどし夕には月にきほひて、にほひ侍るを一人めではやさん事のあたらしう、且は、御心から此花に似通はせ給ふ君に、見せまつらまほしうて、二三枝手打り、さゝげ參らせ候、御机の端に、おかせられ、やがてゆかしき言の葉のつゆをもそゝがせ給はゞ此上なき花の面目にこそ候へ。倘又これをしるべに園に殘りしをたづね來給はゞ、軒の勝栗のみならで主も笑みこぼれつゝ、木枯に落葉のつもる御物語致し侍らむを、嬉しき御返り事承はり度候。あなかしこ

熊本　日高かず子

花咲かは主とならんなと、待せ給ひし菊の、昨日今日やう〳〵ほころび初めつれは、父の心せきて、とくたいまつるべうそゝのかし侍るに、おくれてはと、三株四株根こちてまゐらするになむ。色も香もまだしければ見處なう侍れど、うるはしき御園にうつし植ゑたまひ、朝な〳〵結へる露に御筆ぬらしたまひて、言葉の花そへたまはは、嬉さは花のみかは、盛も自から久しかるべくなむ。かしこ。

東京　藤澤文雪子

霧草と云ふなる花の、匂ひ出でぬるが、昨日今日はいと色濃くて、蓬生の露のやどりも、すこし光ある心地しはべるに、獨りのみまもらんもあたら惜う、はた夜の間の嵐も、うしろめたうて、折からの暇日を幸ひ、例の觀菊會相催し候處、特の外の盛會にて、夕暮近く迄芳姿を眺め興じ候、即題は題陶淵明菊圖と申すにて、御妹千樣の、故鄕に歸りて見れば五つ本の柳の影に香ふ菊かなど申すが、相替らぬ御秀逸にて、一同感吟いたし候、只君の不參こそ、赤壁の東坡、古今の貫之を、かきたる心地にて、あたら花の香うすき事よと、皆皆評し居り候、餘は花の傍の、深山木なれど、詩士の友一とじ御覽に入れ候、扨此一本は、千代の薫と申し、山田文子樣御培養のものにて、當日の出品中、最優等のものに御座候、御友情厚き文子樣の御心添へにより、私培養の白菊を添へ、使にて御贈り申し候、めでたき御わたりの、御心やりにもならば、文子樣の御喜びは申すまでもなく、私のよろこび、此花の面目、又いかばかりになん。

安藝　和住千鶴子

いつしか月日すぎゆきて、ことしもはや、くれ近うなりぬれば、散りくる木の葉の一つ毎に、寒うなりゆく昨日今日、龍田姫の心づくしもいたらづに、散りすぎなむを、いかに見そなはせたまふらむ。こゝもとにても、移ろふ花野の錦、みるごとにいと口惜しう侍る、さればにや父が手植しゝら菊のみ、うら淋しき庭のもに、咲きいで侍るがなかしきまゝ一枝おくりまゐらす、手入の程も届きかね、あはれなる花にて東籬の種ならねば、見るかひもなく侍れど、御さし入の料にもなし給はらば、花もこよなきはえと思ふらむ。そのうれしさは門もる犬のみならで、またるゝ初霜ものかは。あなかしこ

東京　比田井　もと子

ふりつゝきたる秋の雨の、けさうらゝに晴れわたりて、いと心地すがすがしうおぼえ候まゝ、野邊のほそ道そこはかとなく、たどりゆき候ところ、けさ咲き出でし、野菊の一もと二もと、いとほそきが露重げにふしたるさま、なかなかにあはれふかう、いでやさしき君にとて、一枝手折りまゐらせ候、みことのはの花にもそへさせ給はらば、いかにうれしうや存じはべらむ、かしこ。

東京　林　艶子

さかり競ひし、女郎花藤袴なども、はやかれうせて、虫の音さへいとよはりゆくけふこの頃のさびしさに、獨りいや高き色香を身にしめて、さきいでたる菊の花よ。あはれ、日の本の御しるしとなりてはほまれを外國にほこり、ならびなきかをりは高き操にも比べられ侍る。乖て老人の手すさびにて、垣のもとにうゑおきけるが、けふしもいや深き大君のみめぐみの露にうるほひて、紅白とりどりにさき出で侍り。さるにても、かゝる賤がふせやの庭に、そのまゝにくち終はせんことのあはれさに、この二株鉢にうつしてまゐらす。あはれこの花、君が御園生にうつりて、朝な夕な君が厚きみめぐみをうけ、盛り久しく匂はなんには、その面目いかばかりなん。かしこ。

東京　篠田圓子

その後は暫く御音信も仕らざりしが、御わたりにては如何にすぐしたまふらむ。爰許にては、いとすぐよかに物し侍れば、御心易う思し給へかし。然ば今日しも、小春日和にあくがれ出でゝ、庭の遠近さまよひ歩りく程、袖ふく風のえならぬ匂ひを送りつれば、さてはと思ひつきて、菊畑の方へと至り見しに、實にさもありぬべし。事にまぎれて一日二日よそにせし間に、白きも黄なるも、そこゝにれたきまでさきそめてけり。殊更に見せまつる程の花にはあられど、霜枯の庭に、ひとり時を得顔に咲き匂ひぬる樣の、さすがにすてがたければ、徒に露におかるゝよりはと、いさゝかわかち參らす。幸に千年の友ともみそなはして、御秀詠もあらば、花の面目さこそとしのばれ侍れ。先は是のみ。あなかしこ

東京　山田秋子

萩の下葉もやうやうに色づきそめて、うら淋しきの色は日に日に深う相成り候折柄、御姉上樣には、如何おはしますらん、とり出で御あたり懸しう思ひやられ、御氣色承はらまほしうてなむ。さる

にても御妹御樣の御病、未だに御快うおはしまさゞる由、友どちより聞き傳へ候まゝ、ふつゝか乍らも日頃の御憂さを御慰め申上げ度と思ひ候て、何かと心を痛め居り候ひしに、あなゝつかしや、母君が御手づけの前栽の白菊は、葉末の露に月影を宿し候に、一しほ麗はしう咲きそめ申し候、姿はそこはかとなう氣高く、げに聖の人の面影を殘し候優しさ床しさ、いと心樂しう覺え候ひし故、「これこそは」と徽かに口誦み候て、暫しも早う御姉上樣の御目にかけまほしと思ひ候が、何分にも夜分の事に候へば、心殘し候て、朝明けを待ち遠み、今朝ほど初咲きの二枝三枝を御贈り申上げ候間、御心に叶ひ候はゞ、御巧みの御手づから、御花籠へなりとも、挿し給うて、幾しほとなう淸き薫を愛で遊ばされ、御妹御樣の御病をば御慰められまほしう、これのみ念じ上げまゐらせ候。かしこ

神奈川　森田はな子

庭前の松に、まつはれるつたもみぢも、いろいと深う、なかむろころ、君の御すまゐ、さだめし、いろ〳〵の、御見どころ、をかしう候ひなん、例のもみぢ山の御けしき、ゆかしうしたはれ候、いづれ其内に御伺ひ申ばやと、申くらし候、さても去年よりいろ〳〵手をつくし候ひける庭の菊の花の、やう〳〵二三日の陽氣にめづらしくもわらひを、もよふし、人をもよろこばしむるに至りしは、實に丹精のかひあらはれてといともうれしく、せひ君にも、このよろこびを、くみて頂きたく、中にも好ませ給ふ白菊御進め申上候、御まなびのひまの、友としなし給らば、菊もうれしき心の、やかて、おく露のふかきにほひに、あふれなん。あなかしこ

大阪　桝田益子

御代長月の御ほぎ言は、いとふりたれど、秋なき時も咲ん限りは、倚古の偲しうて、雅の庭の光と、朝な夕なの侍き草にてなん。昨日今日怪しの垣ほに、ゑみ初侍るを、はえなき色香も露ながら、憐れ知れらん君の御前に、御覽ぜさせ侍る。此菊やいと上れりし世にも、時雨の雨に、賢う面を興し、久方の雲の上には、星の光も唯ならず、綾のみ袖にくゆり、妙なる御言の葉に薫りて、風流夫の情けを運び、いみじき御邊の御しるしは、言新らしけれど、貴人の御調度に、御殿の名にさへ口惜からず、愛で玩められ。唐人も小瓶の酒に、まが事の醉を覺して、命延ぶとか黒方に造ては冷香と、仙人の樣に、延壽客、隱逸の花と稱へ、將あがたの流れ、谷の下水、病を癒しぬとて、怪しう世のいうそくにも、唐倭の歌人にも甚じう、らうだくもて騷がるゝなん、人の國のけ疎き、高麗うどながら、いとおむがしう、憐れの花の契りやと、思う給へらるゝを、そこにはうら〳〵しからぬを、疎ませ給ふらんや、なまめかしからぬは、さる物にて、君が千代の數、見給ん御料にとなん、口さがなき海士さえづりも、本の根ざしと、花の思はん程もやさしう、心盡しの深さ、淺さは渠の淵に汲ませ給へや、あなかしこ

新潟　佐藤民子

過き行く駒の足はやく、去歳の此頃、弟妹打ち連れ、御前樣と五十公野山に茸狩に參り、途すがらかなたこなたに、二つ三つ咲きける花摘みつゝ、或は袂に或は籠に入れ、殊に野菊の愛らしければ、かざしとせんなど、散歩唱歌をうたひつゝ、元氣よく參り候も、いつしか昔話と相成申候、さらぬだに物さびしく覺え候を、來十一月廿日は亡妹由美子の一周忌に相當致し申候生前には、別けて菊花を愛で居候事に御坐候へば、せめては手向の華と致さばやと存じ、今春二三種の苗を小裏の畑に培養致し候處、昨今に相成り中々面白う咲き初め申候、偖て御前樣には、可憐なる由美子をば一方ならず御愛で下され、いつも老母と語り合御噂申上居候、就てはいと卜作のものとは存じ候へども、三株差上申候間御慰み下され度、さあらんには、彼の子もさぞ〳〵泉下に滿足致すべくと存じ申され候、あはれ御講學の御閑もあらせられ候はゞ、佛の方へ、紀日までに一章御咏み遊ばし下され度、さ候へばひとり妾等の本懷のみかは、げに在天の生靈永しへに瞑す可き事と存じ上げ奉り候。あら〳〵かしこ

東京　下田しげ子

もろこしのなにがし人を、かならずまれふとにはあられど、心の友と見ましとて、ひとむらうゑおき侍りつる菊の、この頃の日和に、三つ四つ二つ、ほころびそめたるに、朝露のこちたくそほちたる、なかなかにとりつくろはぬ色に、おのづからなる千代もこもりて、げに老もしぞきぬべきこゝちなむせられ侍る。されば一人のみ見侍らむも、あたらしう思ひたまうれば、いとしたりがほには侍れど、色をも香をも知る人にこそとて、露ながら一本折りてまゐらせつるになむ、あなかしこ。

肥後　佐々有鄰子

今年の春よりは、學校にて農業の事をも、餘課にいれられたりければ、女生徒も其業すべくなりぬ。耕耘の術にも、女のできうろだけは、運動せねばならぬゆゑに、妾もかたはしより、二三の術を敎師より傳習なし侍ぬ。春夏秋冬の菊の種子まく方法にも、いろいろのおきてあれば習ひえて、時候をあやまたず、蒔つけし物から、枝葉うるはしくしげりあひ侍りて、夏菊は已に花さき黄白けんをあらそひ、美事に園にかをりあひたりし。めでにめでて學友どもよりのこりすくなになりとられ侍りしゆゑに、師の君の御もとに進呈のことをばおこたりまゐらせしが、來ん秋にはいちはやく奉らんとまちて、育たてし、御代長月の菊の節會の今朝しも、うるはしく露のしら玉かざしあひし、笆のもの、黄紅紫白色々、とりつかれて、使者をはて奉りぬ。御宴席の花かめの料にもなし給はらば、こよなきめんぼくにこそ。冬のも花さき出なば、根こしにして、献上せんと、心かまへおき侍りぬ。あなかしこ。

肥後　徳永廣子

ふみにて申上まゐらせ候、今朝しも起出候ところ、昨日までつぼみの菊も、一ひら二ひら咲そめ侍る、かれて此菊は、御許樣の祖父君の、いとも愛させ給ひて、ねもころに、つくり給ひけるを、妾の父がこのめるまゝに、一二本めぐませられし苗の、ひろごりしものに侍るよしに候、昨秋の花の盛りはいとうるはしく、近隣の人々をもなぐさめ候ほどにて、今年もいと勢よく延びて侍れば、御許樣には此早咲の花二三枝差上候、祖父君の御靈前にさゝげさせたまはらば、定めてめでたまふらん、又妾が身にとりても、いかばかりの本意になん。あなかしこ。

信濃　小林芳子

木の葉さそふ、秋風の、さむき頃なるを、かぜなひき給ひそ、さて妾の日毎にはに、おり立ちて、めでそだてし、園生のきく、あさなあさなのおひ立ち早きに、遂此頃より、つぼみあまた生じ侍りしかば、今にや咲かんとまちにまつうち、今朝も又早く朝露ふみわけてせめては、一りんも咲きつらんとて、見わたすうちに、西の方の君のいつか遊びに來給ひし時、根分けせし菊二三輪ほころびそめたるを、あまり好ましきまゝ、まづ、君に見せばやとて、常々君の好み給ふ、白菊手早くをりぬ。殊更つぼみ多くつけて侍り、人も花もつぼみのうちが、たのしと思ふまゝ、見給へかし、一てんのちりなき白菊を、御氣に召させ給ふらんには、君がなれたる御手もて、床に生け給へかし。わらはもまゐらす甲斐あり、又、菊もさぞ、はえある事に思ふらんに。幸明後日、日曜にし侍れば、御用御くり合せて濟子樣と來給へかし。何かともなけれど、めづらかなるきくのちそうに、一日遊ばんに。

出雲　吉田ちぎ子

日頃御咄し致居候、活花會けふこそと、御招き申上しに、御用御在します候由、殘り惜く存候、濟子の君、雪子の君も、來られ申候、然れど、君在されば、何となく、床も榮なき心地致され候、其内御當家御老人の、御手添されし、菊花、二瓶は、いと面白く拜見仕候、一は御自身、御培養被遊し、庭前の菊花、是は氣高く美しき姬の御粧したらん如く、今一は御存居候、舞老翁が、胸の自れ生なれども、今日の會あることを知りて、持參致候ものに候、是はまた自れ生なる處に、又一入艷なる處ある由に、何となく、氣高きところも見えて、さながら、よき人の物なれたりし如く、見うけ申候、思々の心

の花げにもと、此處に、二種の菊とりまとめ御送り申候間、御活け被下度、今日御越しなかりし君が心をなぐさめなば、こよなき榮にこそ。

見北　中川伊代子

木の葉ちる音の、はら〳〵と、ふく風も身にしむ、今日此頃、君にはいかに、すぐさせ給ふらん、彼の同窓會の折、たがひにかたり交せしより、もはや、一月あまり、音信もせですぐせし、罪いと深うはあれど、いかでゆるし給ひてよ。さてもわらはが、今年こそはとて、朝夜に、丹靑せし、おそさきの菊、此頃やう〳〵、さき出でたれば、一本まゐらす、御文机のもとへなりとも、生給はらば、花のみが、わらはもいと、うれしうこそ。かしこ

東京　岡田柳子

秋深うなり侍るまゝに、千草の花も枯れ〴〵て、眺めすくなうなりぬる昨日今日、かなり床しう咲きいでしまがきの白菊、わざと造りたてたるにはあらぬものから、自づからなるけ高き姿の、げに捨てがたう、獨り見んも本意なく侍れば、一本おくりまゐらす、哀れ君が朝な夕な、親しみ給ふ文机のみもとにだに、置かせ給ひなば、さこそは面目ならめと、花にかはりて、嬉しさきこえまつるになむ。あなかしこ。



秋の庭

横田秋子

日本女子大學校秋季運動會にまかりて

桃さくら花もにほひもとり〳〵に
　きそふこゝろの花さかりかな

西ひかしもゝとさくらの花くらへ
　きそふや御代のにほひなるらむ

肥後國菊池郡城北村立木野尋常小學校教員　佐々有鄰子

女鑑教の庭撰文の賞として家庭小説女樂師といふ書籍を賜りければ女樂師　椿紫（ツバキユカリ）女を詠る

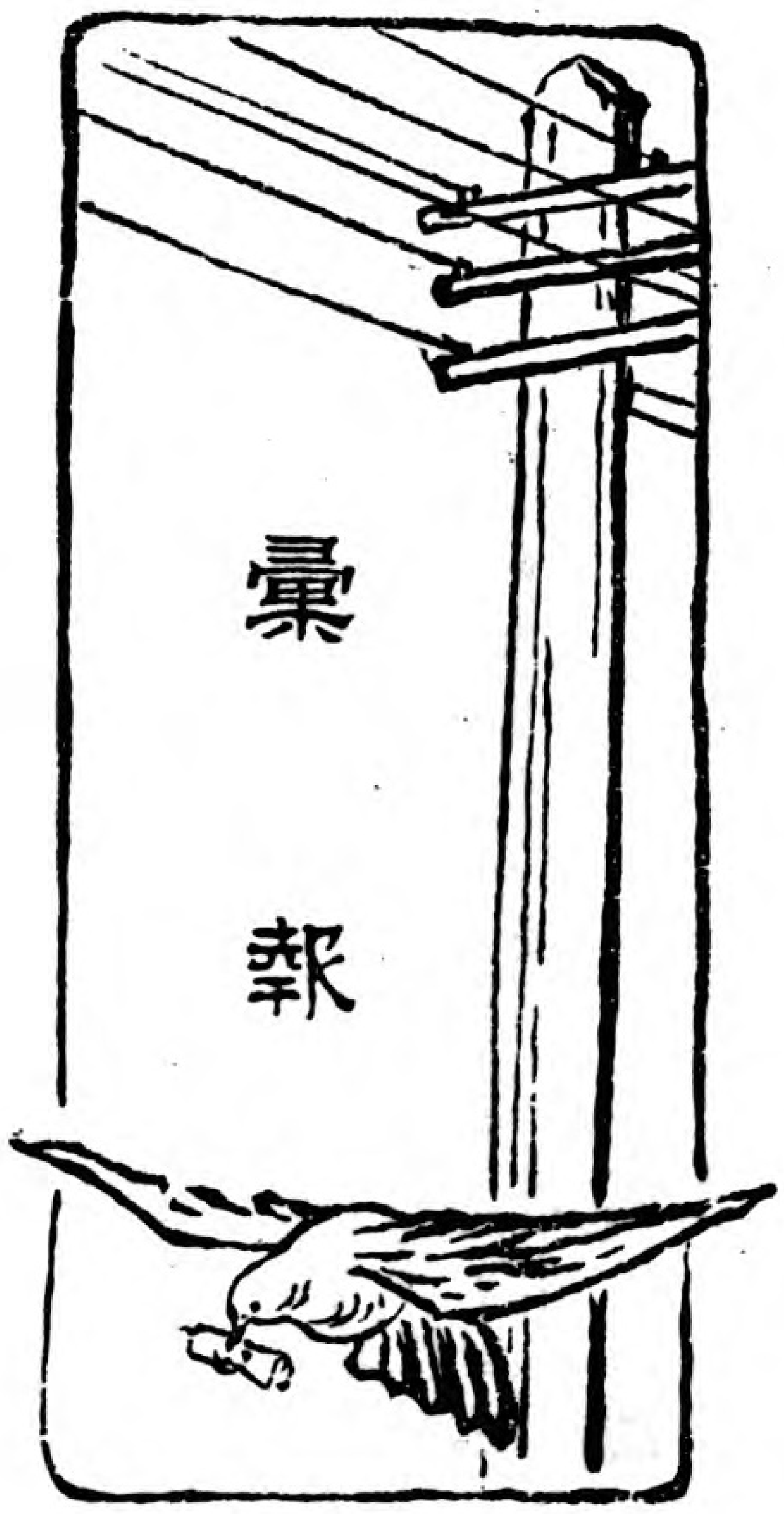
國のため夫（つま）をはけます琴の音は
　ほめぬ人こそ世になかりけれ

荒妙の藤のゆかりのいろふかき
　こゝろつくしの琴の音あはれ

女鑑兼題豫告

十二月

	歌	文
一日……	遠山雪	冬の家庭
十五日……	寒月	歳暮



○天長節御祭典

豫て仰出されたる如く宮中に於ては嚴かなる御祭典あり午前九時奏樂中に賢所皇靈殿神殿御開扉各掌典神饌を傳供し岩倉掌典長の祝詞あり諸員起立中に天皇陛下御代拜侍從日根野要吉郎氏御玉串を奉り次に皇太子殿下御代拜東宮侍從本多正復氏次に皇太子妃殿下御代拜東宮主事心得子爵錦小路在明氏順次御玉串を奉り次に宮內省勅任官總代勝間田圖書頭同奏任官總代足立御造營局技師幷に着床諸員及掛判任官等拜禮あり再び奏樂中に掌典神饌を撤し引續き御閉扉各員退出同十時十分當日の御祭典を終らせられたり

○觀兵式行幸

天皇陛下には觀兵引御擧行の爲め同日午前八時三十分宮城御出門同九時廿分青山練兵場に行幸あらせられたり式場の各方面に早くも參着し居たる當日の諸兵指揮官奧東部都督幷に參列の第一師團長伏見宮貞愛親王殿下、長谷川近衛師團長以下在京各步兵旅團長、澁谷第一騎兵旅團長大隊長等は奏樂聲裡に奉迎す陛下には君が代の奏樂中に岡澤侍從武官長の御先導にて式場正面の玉座に着御、軈て御愛馬初來に召させられ寺內陸軍大臣、岡澤侍從武官長、大山參謀總長、野津教育總監、兒玉參謀次長幷に外國武官等數名の諸氏は何れも乘馬拔刀にて扈從し奉り奧諸兵指揮官の御先導に依り順次參列諸隊を天閱あらせらる此時步兵隊の軍旗は聯隊の先頭中隊の右翼に騎兵隊の軍旗は第二中隊先頭小隊の右翼に位置し陛下の前面通御の際には各旗手最敬禮を行ひ奉り陛下に

も一々御會釋に相成り各隊は捧銃捧刀立槍の諸敬禮を表せり右終りて玉座に復御續いて步、騎、野戰砲兵、工兵及輜重兵は各種の縱隊に依り指揮官の號令に從て順次分列式を行ひ樂聲の急なるに從つて速步となり急速步となり暫時にして終了し十時五十分還御仰出されたり當日は外國公使、貴婦人幷に扈從武官等多く殊に服裝の美、昔時の甲冑に齊しき正裝もあり我國の各將校が白羽の前立一樣に薄の穗の如く立駢びたる中に青紅黑白の羽毛を色々に飾れる種々の禮帽を戴ける樣燦然人目を眩するばかりに見受けられたり

○豊明殿御宴

天皇陛下御觀兵式臨御の後、十一時過ぎ御還幸、御座所に於て各皇族方千種の間に於て親勅任官に謁を賜ひ一旦入御の後正午十二時再び豊明殿の御宴會に臨御、同零時七分奏樂中に豊明殿の玉座に着御あるや大山大勳位、桂總理以下各大臣、東久世樞密院副議長以下各顧問官、親勅任官幷に白國公使アルベルダヌタン男以下各國公使一同最敬禮を表したるに陛下には左の意味の勅語を賜りたり

朕は敬愛する内外の臣僚と共に本日の佳辰を祝するを喜ぶ

三宮式部長は之を佛語に譯し外臣一同に傳へたるに桂總理は群臣一同を代表し恭しく左の奉答を爲せり

臣太郎本日の佳辰に際し御宴に列するの幸榮を得たる上優渥なる勅語を拜す眞に感激の至りに勝へず謹んで群臣を代表し茲に奉答の蕪辭を奏上し併せて陛下の萬歲を祈り奉る

右終るや本邦駐剳公使中の古參公使白耳義國特命全權公使アルベルダヌタン男は外國使臣を代表し佛語にて左の意味の答辭を述べたり

外臣等本日の佳節に會ひ親しく名譽ある御宴に召させられ特に優渥なる勅語を賜り恐懼感謝の至りに勝へず茲に外臣一同に代り恭しく奉答の辭を奉り陛下の聖壽無疆と帝室の御繁榮を祝す

三宮式部長再び之れを意譯奏上したるに陛下には御

氣色殊に麗しく各員と御宴を共にせさせられ同五十分ごろ各皇族方扈從、德大寺内大臣、田中宮内大臣以下供奉して入御相成りたり式部職伶人は例の如く絶えず歐洲樂を吹奏したりと云ふ

○東京府第三高等女學校開校式に就て　二十萬圓の巨金を以て麻布區北日ヶ窪町に新築されたる同校は去月三十日を以て開校式を擧行せられたり余も招待せられて席末に列したるを以て少しく所感の一二を陳述せん

當日は雨天なりしも久保田新文部大臣を初めとし千家東京府知事其外知名の紳士淑女數百名は定刻に來校し午前十時を以て式は開始せられたり儀式の順序などは特別の事もなかりしも久保田大臣の告辭の番に至りて少と風變りの光景を呈したりき大臣曰く、祝辭は別に認めあれども後廻はしにせんとて愼重の態度を以て今日は十三年前に詔りせられたる勅語發布の當日なるが其の國民の紀念とすべき日を以て本校を開校せられたるに付ては一層の感じが起る國民は爾後深く勅語の主旨を奉戴して知德の修養を勉めし譯なるが諸子は一層勵精して聖旨に適ふ所なければならぬが茲に特に諸子に希望することは女子の體育の事なり我邦は日進月歩の勢を以て文運を發達し諸般の事は敢て泰西諸國に劣ることなきに至りしも體格の點に付ては大に遜色あり其矮少なること虛弱なることは實に席を同ふして赤面に堪へぬ果して强固なる精神は健全なる身體に宿るものとせば實に寒心の至りなり而して子孫の體格は母體の如何に關係すること尤も大なるものなれば女子敎育上に於て體育の必要なることは未來國民の心身改良の基本なれば諸子は學校に在りて體操遊戲を熱心に勉むべきは勿論家庭にありても常に運動を行はなければならぬ且つ妻たる人も母たる人も常に其の心を以て大に女子體育の奬勵を計らざるべからざる事なるが殊に學校に於ては先導者となりて其の奬勵を勉められんことを希望すとて壇を下りて告辭は松浦秘書官をして代讀せしめられたり告辭祝文など形式上の虛禮を去り

て質實なる女子體育の急務を大臣自ら訓戒されたのは生徒は勿論來賓一同にも感動を喚起さしめたり斯くて儀式を終はり小林校長の案内にて校舍の參觀をなしたるが輪奐の宏壯にして優美なることは實に帝國首府の高等女學校として申分はないが校舍の立派なることに付ては余は別に意見あることなれど茲には其意見を吐露せざれども總ての設備に付て用意の周到なることは實に全國高等女學校の模範として見るも可なるべし今其の瞥見したる二三を列記せんに玄關の正面には直徑六尺の大地球儀あり之れは平常は生徒の運動場に設置しありとのことなるが小林校長と教員との考按製作になりしものなりと云ふ生徒は運動遊戯の際日常之れを目撃して如何に刺戟を受くることならん理化博物教室地理教室の如き器械標品など過半は校長教師の蒐集製作したるものにて其手際の如きも中々立派なりキンストレーキ箱の臺の引出しにして運搬の便利を計りたる地圖に商品の小片を附着して輸出入の關係を明かにしたる窓掛の伸縮機械を利用して歴史年表の掛圖を工夫したる其他標品器械の取扱ひ法や習字圖畫作文の教授法等皆特色あり詳細は他日詳かに參觀の上のことにすべけれど要するにみな小林校長と教員諸君、熱心勉強の決果にて感嘆に値ひすといふべし參觀終りて生徒及び來賓諸君の唱歌奏曲ありて後別席に於て立食の饗應ありたりき（因にいふ同校は昨年四月一日工事を始め本年八月二十五日に竣工し敷地坪數五千六百五十二坪餘建物總坪數九百四十三坪餘ありといふ）

○淑女協會　京都淑女學校內の同會大會は去る三日天長節の式後に擧行せり始めに唱歌あり次に田島校長の演辭、萩原市視學の祝辭演說、生徒總代中田小瀧子の祝詞あり唱歌を以て式を畢りたり尙三日四日の兩日は同校生徒の製作品展覽會を開き出品は習字、圖畫、作文、詠歌、押繪、編物、造花、挿花等千五百餘點を陳列し外に音樂合奏、點茶の催しもありたり二日間の來觀者は三千餘名にして當日の來賓中大森京都府知事夫人は生徒の成績優良なるを感

賞し同校へ金一封、校長へ菓子一折を贈られたりといふ

○東京電燈の女子採用　近來會社や商店が女子採用に意を傾くるに至りしことは大に喜ぶべきなり東京電燈會社の如きは去日の重役協議會にて女子採用の事を決し先づ試驗的に十名丈け雇ひ入れ内五名は計算係に他は電話手及給使として用ゆる由にて其結果良好なれば單純なる事務は悉く女子を用ゆべしと

○女子出札員の採用　鐵道作業局にては今回出札掛(切符賣)に女子を採用する計畫にて目下選定中の由なるが近々中に先づ新橋驛に於て男子を廢止し女子を以て勤務せしめ結果良好なれば全線出札掛員を女子に爲すべしと云ふ

○女子大學の運動會　去る二十四日の女子大學運動會は、女子運動會の模範となるべく、大に研究した結果で、種々の遊戯を演ぜられたり塲内の裝飾は紋切形の廣目屋式なりしが來賓観覽席の設け等は中中整頓し、大體から言ふと大出來であつた先づ生徒が運動塲に入塲する時は、軍樂に表出的步調を揃て入塲する所など餘程趣があつた、生徒の全部運動塲に達すると、軍樂はピヤノに替ツて、遊戯は大方舞踏的遊戯であつた、體の動作は甚だ良く揃ふて居たが足踏みの拍子が輕〳〵行かぬのは殘念で有る、體操は表出體操が大部分を占めて居た樣に見受たが、是れは誠に申分がなかツた、それに音樂と動作との拍子が能く取れて、力が這入て居たのは全く平素の練習に依る者で有らふと感ぜられた、其の詳細は雜錄欄内に記されてあるからこゝには略してたゞ案山子競爭の歌を紹介して置く

取るや弓矢の束の間も
　雨にも風にもたゆみなし
守りておのがつとめをば
　動かぬ案山子のゆかしさよ
一度ひけば野なふるひ
　二度引けば天ゆすり
鳥獸しどろに逃げまどふ
　鳴る子の音のゆかしさよ
たり穗豊かに我れら野の
　千五百秋にみのり行く
やがてしろしと見ろ時は
　ゆかしからずやまた更に

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

醫學博士森鷗外著

新刊 長宗我部信親

菊判半切 定價金十錢 郵稅二錢

本書は著者森博士が、土佐出身の某子爵の需に應じて作られたる琵琶歌なりといふ。吟誦一番すれば戰國武士の面影の勞然として躍るが如きを見るべし。嗚呼中津留川原の血潮に骨を曝らしめたる此の若武者の芳名は、靈山の頂と共に高く、戸次川の流れと共に長し。

水主天姥著

千古靈魂 石田三成 及其時代之形勢

四六判洋裝 定價三十錢 郵稅四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶも其寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや恰も秋官の刑を斷するが如く。毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間又難ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ケ原を過ぎて、鬱葱たる松尾南宮の諸山を望みし者此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、睚裂け、腹斷たざれば已まざるべし蓋し近來の快著なり

在法科大學矢田七太郎著

幕末之偉人 江川坦庵 全一册

四六判洋裝定價卅錢郵稅四錢

清藤正輔編

西鄉從道 全一册

菊判洋裝定價廿五錢郵稅四錢

清藤正輔著

聖德太子傳 全一册

四六判洋裝定價十錢郵稅二錢

東京市京橋區築地

發行所 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

白浪庵宮崎滔天著

三十三年之夢

全一册 菊版洋裝美本 定價金三十三錢 郵稅金八錢

滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異樣の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する學的理想を以て直に地上に施かんと欲して運籌計策する所一二にして足らざる也唯憾む天時人事共に未だ可ならず菲島の獨立に參翼して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して曰く半生夢覺めて格花を懷ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す本書は實に彼が半生の懺悔錄也彼今身を浪花節の群に投じ乃ち張扇を弄して東海道に在り抑も何の觀ずる所ありて然る乎嗚呼其人既に奇也其文豈奇ならざらんや乃ち情事あり哲理あり諷刺あり經綸あり迂餘曲折多作多趣讀去り讀來て活躍せる一篇の長恨詩を誦するに似たり然り而して半面より是を見る眞に是東亞の秘密を藏するの寶庫也

寺内淳二郎譯 ▲奢侈亡國論 菊平切洋裝 定價郵稅廿二錢

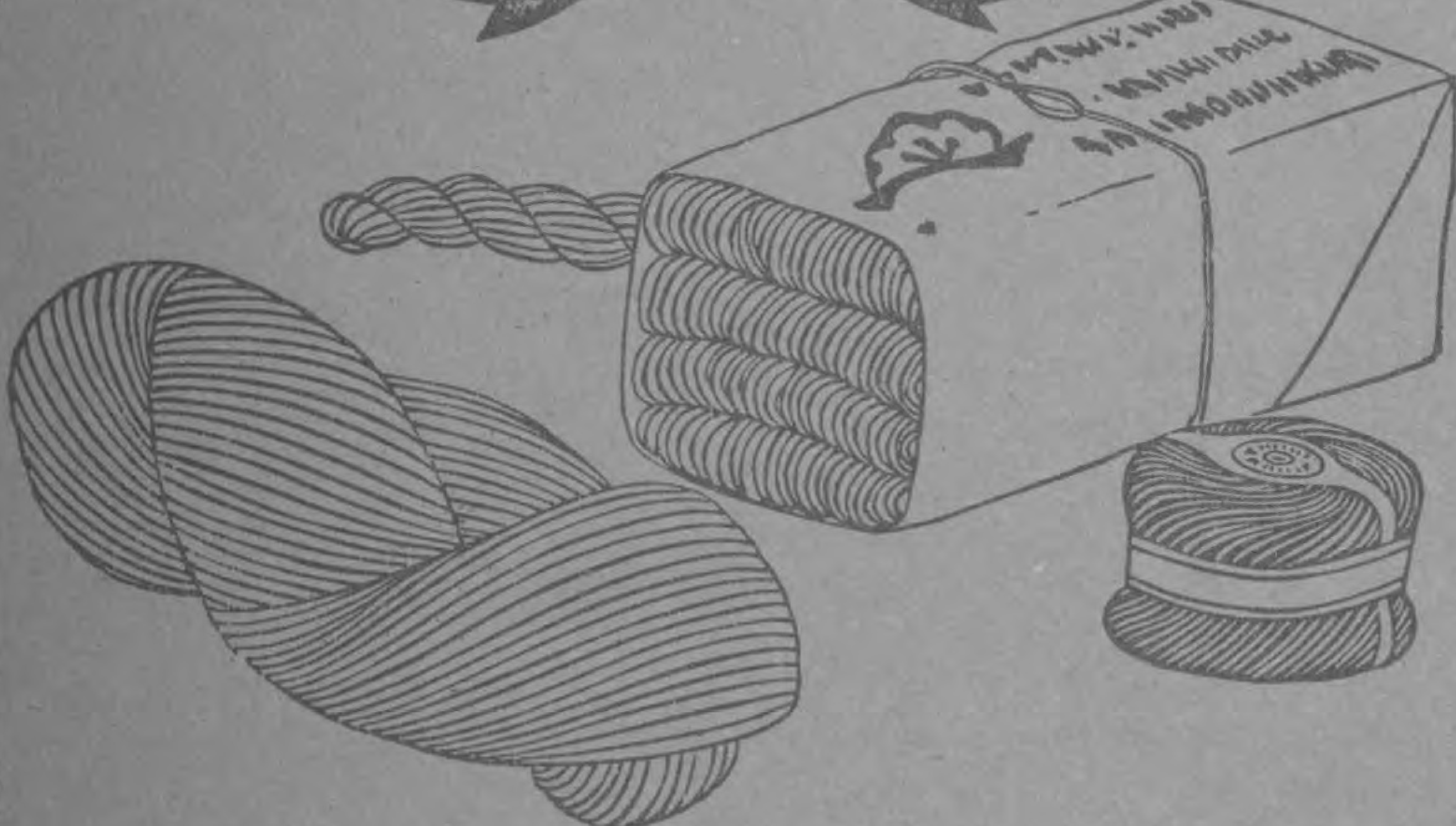
白浪庵滔天著 ▲狂人譚 四六版洋裝 定價二十錢 郵稅四錢

弘田正郎編 ▲豪吟集 菊平切洋裝 定價八錢 郵稅二錢

清藤幸七郎著 ▲天佑俠 菊版洋裝 定價三十錢 郵稅四錢

發賣元 東京々橋區築地 國光社

明治三十六年十一月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
第拾參年第廿貳號



營業科目

一舶來毛絲カタン絲、アイスウールレース、リボン及毛糸附屬品一式

一肩掛、洋傘其他貴婦人裝飾品及小供帽子各種

一服地、袴地、舶來織物類各種

一香水、香油、石鹸其他化粧品及化粧用具

一絹、麻、棉、ハンカチーフ及小間物類

一舶來造花、玩具類

右科目ノ品々直輸入致シ確實廉價ニ販賣仕候間多少ニ不拘御用向被仰付度願上候

尚御用の節は御一報被下候ば迅速持參可仕候

東京市京橋區銀座三丁目七番地

電話特新橋十番

三枝商店

小賣部

[illegible]株式會社印刷